

# 銃よ、おまえは

# 誰のために

## ● 連合赤軍総括への試論

序文／はじめに

第一章 この裁判と情勢について

第二章 日本の階級構成と各階級の動向、諸問題

第三章 「銃よ！ おまえは誰のために

「処刑」問題と「銃撃戦」

「パンフ『赤軍No.4』批判

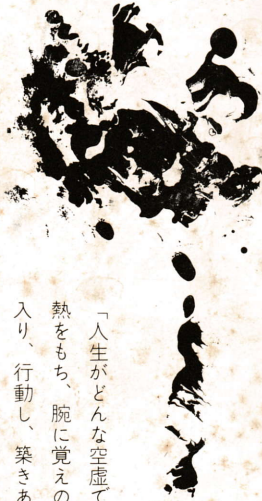
補章 弁証法について

あとがき

付1 森同志に社会主義の勝利を誓う

付2 さよなら！ 行ってまいります

## 松田 久



「人生がどんな空虚で死んだような姿を示そうとも、信実と精力と情熱をもち、腕に覚えのある人間はそのため墮落はしない。彼は歩み入り、行動し、築きあげる。つまるところ挫折するのだ。——世人はそれを廃墟だという。」これはゴッホの言葉である。……挫折しようとする者は墮落してはならないし、するつもりも無い。……「連合赤軍」の同志たちよ！同志たちも同様であろう。腕に覚えのある者は墮落してはならない、腕に覚えのない者ならなおさらである。歩み入り、行動し、築きあげるとき挫折もあれば飛躍もある。我々にあるのはゴッホの描く、絶望的な「明」と「暗」ではなく、「暗」の中に芽生える「明」である。

いつか会いたいけど、でもさよなら森のオヤジさん！ もはやあなたを想って涙をこぼすこともない。あなたを想って詩を書くこともない、もはやあなたとは違う一赤軍兵士だし、わたし自身としての一赤軍兵士だし、人民全ての一赤軍兵士になるのだから、野草の如き赤軍兵士になるのだから。

# 査証

VISA 臨時増刊

銃よ、おまえは  
誰のために

松田  
久



序文 8

はじめに 9

第一章 この裁判と情勢について 10

第二章 日本の階級構成と各階級の動向、諸問題 22

第三章 「I」銃よ！ おまえは誰のために 54

——「処刑」問題と「銃撃戦」——

〔II〕パンフ『赤軍 No. 4』批判 64

補章 弁証法について 80

あとがき 95

付 その一 森同志に社会主義の勝利を誓う 98

付 その二 さよなら！ 行ってまいります 108

編集部後記 116

私の最も敬愛する赤軍の指導的同志森、  
そして最愛なる戦友同志坂東ら連合赤軍  
同志たちにこの一文を先ず捧げる。

銃よ、おまえは誰のために

## 序文

「連合赤軍」の敗北、それを僕たちはどれ程現在総括しえたるうか？ 森同志の「死」はそのことを根底的に問うている。単に理論云々ということではなく、我々の階級的組織性、団結の貧しさをそれは歴然と示しているのです。我々は生々きした理論・組織を創り出さねばなりません。この「銃よ、おまえは誰のために」は徹底して「連合赤軍」の立場に依拠して書いたものです。その基本的立場は今でも正しいが、同時に限界もあります。敗北を科学的に思想問題として切開し切れず、ロシア革命以降の階級闘争（攻防）の質的転換を軽視したところからパンフ「赤軍」No.4を批判するという清算主義の傾向をも胎んでいます。現在僕は「連合赤軍」敗北と不可分の自らの思想的解体―自己批判を通して、塩見孝也同志の資本主義批判の立場から団結して、社会主義革命（戦争）路線構築をめざしています。それを確認しつつ、一つの直接的総括の視点として「銃よ、おまえは誰のために」が闘う同志たちの総括の一助となれば幸いです。

森同志、故「連合赤軍」の同志たちは死してなお闘い続けるでしょう。我々と人民が闘い続ける限り。

一九七三年一月一日（東大安田闘争四周年）

赤軍兵士 松田 久

私は「懲役八年」の判決に対して控訴をした。しかし、それは「刑が重すぎます。軽くして下さい」という奴隷根性からではない。ブタ共に仕えるお茶坊主にお願ひすることなど何もない。裁判も闘いであり敵対性の多い闘いである限り、その闘いいかんによって結果は決まる。私は「宮嶋某の居室で散弾を携帯所持した」云々のデッチあげとその有罪という「ささいなこと」、又、実は組織だった反革命の一つであることを明らかにしたいと思う。更に「判決理由」は大前提とされている「赤軍派の一幹部」であるということがいかに露骨な反革命的判決であるかを物語っているが、それに対し「赤軍兵士として反駁したいと思う。そして判決理由にいう「同派の目標とするよりよき社会を実現するためには革命的な手段に訴えるほかはないとの信念の下に、その準備として武器、資金等の獲得をもくろんでいたものである」ということ、即ち、いわゆる「M作戦」等の我々のこの一連の戦いとその終焉たる軽井沢銃撃戦と一四名の同志「処刑」という悲劇の根源を分析し、総括し、新たな社会主義革命（戦争）への道を構築する一助としたい。それが私の最も敬愛する指導的同志森、つねに伴い戦ってきた兄弟坂東らや今はいない弟のような同志行方らに対する私に課せられた任務である。

# 第一章 この裁判と情勢について

(一) 敵の意図(その組織だった追起訴) デッチあげを含む細々とした追起訴を私が受けたのは九月一六日である。ところがこの追起訴は僕だけではなく、東拘にいた同志城崎、同志関、横浜にいた同志林、同志鈴木(?)ら、浦和にいた同志高田、同志新谷らもこの九月中旬から下旬にかけて一斉に追起訴をされているのである。つまり、東京・神奈川・埼玉の検察の何らかの合同会議をもって、犯罪にしたりあげられるあらゆることを追起訴して、一年でも一カ月でも一日でも革命兵士たちを人民と隔離するという露骨な方針をたてたのだと思える。そこには、私の場合のような「ささいな」デッチあげにとどまらず、浦和の同志高田に対する「大逆事件」まがいの「大胆な」デッチあげもある。デッチあげにはいわゆる「自白調書」だけが唯一の頼みの綱である。弱い部分を狙ってその供述からあらゆることをねつ造し、有能な革命兵士を監獄へおとしこめようとする。松川事件でも三鷹事件でも、あらゆる「公安事件」でその手を使ってきた。私は九月上旬公判の予定もなにもないのに「出廷」ということで、東拘から押送されたことを思い出した。なんのことはない。東京地検に連れていかれ検事秋山の取調へ

を受けるということだったのだ。警視庁刑事坂本に対してみじめな屈服をした私でもさすがに秋山に話す一言もなかった。あの肥るはずのない顔がみっともなく脂肪ぶくれしている秋山(どんな優雅な生活をしているのか知らぬが)は「相変わらずだ」と苦々しげにいついていたことを想い出す。(そう簡単に世界観が変わるはずはないか、横井庄一氏ではあるまいし)同志の殆んどが私と同様にこの頃検察側の取調べをうけている。現に私の判決の証拠としてこの頃の検察官調書が提出されているものもある。検察側は相互に密接に結びつき計画的組織的にデッチあげ等々の反革命攻勢をとっていることが明らかだといえる。

(二) 「赤軍派の一幹部」であるということ。私は政治警察の取調べをうけている時自分を「中央軍一幹部」と認識していたことが恥かしく思う。「幹部」などというヤクザ気質など思いあがりもはなはだしいものだった。私は何よりも「赤軍兵士」でなければならなかった。私は自分の闘いを総括すべく愚かにも警視庁刑事坂本個人に対し、個人的なものとして「手記」を書いた。今、考えるに余りに愚劣な内容だが、その頃の私の「敗

北・屈服」をよく物語っている。階級性・敵味方を忘れ(否、忘れたのではない。曖昧にしたのだ)「幹部として責任をとる」という転倒した責任のとり方の反革命性は言うまでもないことだった。私は、米子の四兵士の闘いから、そして中国文化大革命から自分の敗北をふりかえり、一つの真理を獲得した。それは「人の感情・感覚はその人の階級性に絶対的に忠実である」ことだ。私は以前「人間の感情なんていい加減なものだ」としてきた。確かに「いい加減なもの」としか思えないだろう。自分のそうあるべきと思う階級性・革命性とは異質の感情をいだいてしまいう人間にとっては、「いい加減なものだ」とふてくされざるをえない。真理はこうである。つまり「ある階級から他の階級に変わったというのは……自分の思想・感情に変化をおこさせ、その改造をおこなわなければならない。この変化、この改造なしには何事もうまくいかず、なにもかもしっくりしないものである」(毛沢東同志)。私は思う。このような階級形成を抜きにして「革命軍建設」はなしえない。もしなそうとすれば「悲劇の革命軍」を生むと、それは我々の同志の犯した悲劇が残酷に物語っている。私は思う。私のような階級形成のな

んたるかを知らず、未熟な者が責任ある地位にいて同志たちを指導していたら同じような悲劇を生んだであろうと。だから私は思う。私のような者が一幹部となること自体が問題だと、但し断っておこう。謙虚と自己卑下とは違うものであるというところを。「謙虚は本来事実に基づいて真理を求めめる態度で客観的現実を正視する進歩的精神の表現であるが、自己卑下は一種の

事実に基づいて真理を求めない自信欠乏の困難に対して萎縮してしまふこととの表現だからである」(毛沢東同志)。私は昨年の十二月二四日第一審の最終意見陳述の最後に赤軍兵士としての再生の十カ条の宣誓を行なった。十カ条目は「いかなる時でも自己批判の精神を高揚し、模範的個人となり統一赤軍、赤軍兵士の名を汚さない」であった。私は幹部でもなんでもない、ただ一赤軍兵士として勝利まで闘い抜く決意である。

さて、私自身の警視庁における醜悪な思想的・政治的屈服としての「一幹部」という態度を逆手にとって、更に「赤軍派」革命兵士そのものであることを東京地裁は裁いたのである。私は「本件は確信犯罪とは認めがたい」式の侮辱されきった判決でないことに最初は「結構な話だ」と思っていた。しかし、よく考えてみよう、私は「赤軍派である」ことを、そして「革命的手段」とったことを裁かれているのだ。表むきは「極悪犯罪者」として、内実は「真紅の赤軍兵士」として裁かれているのだ。それは一方では確かに結構なことである。敵の本性が露わになる点で、そしてそれに耐え、鍛えられる兵士をつくり出す点で。しかし他方では敵の本性の不正義性をよりはっきりさせ、それに対する闘いを訴えねば、「弱者」の泣き寝入りか「強者」の自己満足に終ってしまふだろう。この間の一連の事件は一つの敵の動向を明確に浮かびあがらせている。それは政治的・思想的攻勢に出ていることである。我々はそれに対し、小ブル革命性でなく、プロレタリア革命性をもって反撃しなければならぬ。赤軍は狂気の殺人集団という連想をつくりあげ

ようとしている現在、赤軍兵士としてあらゆる場でそれに反撃を加えることは我々の任務だと思ふ。

(三) 日本帝国主義ブルジョアジーどもの国内人民に対する全面攻勢について。

第一審の公判過程で、かつて私と伴に革命的に闘っていた同志たちを検事側証人とする際に検事と判事は一体となって、拘留所あるいは刑務所内で証人尋問を強行せんとした。それも一度法廷で判事が検事側の要求をしりぞけて証人を公判によぶと決定したものをわざわざ取り消して急遽公判期日外に拘留所・刑務所で尋問すると決定したのである。この秘密軍事裁判の企ては獄外の同志兄弟たち、弁護士さんらの力によって打ちくたされたが、これは非常に悪どい反革命的攻撃であった。更に、私の判決公判の日、傍聴に来ていた同志友人たちは、まだ公判ははじまっていないとつげられて数十分もまたざれていた。しかし法廷では、実に「今日傍聴人はいません」と何者かが言っていて始まっていたのである。そして、判決文を判事は読みおえ、何やらくだらぬ言訳けと、たわ言をつぶやいていた時に、つまり閉廷間際によりやく彼らは入廷を許された。私もさすがにありさされてしまった。法廷でプタ権力は好き勝手なことをしているのである。私はこれらについて、簡単ではあるが全般を見てみたいと思ふ。

小田実は最近の一連の「事件」から「見えてきた」と言ったそうであるが、私も見えてきたと思っている。それは、一つ一つの「事件」が不可解でわからなくなるものであり、激烈なも

のであることが逆にその一つ一つを結びつけている全局が影として明確になってくるという感じのものである。それは先ず、日帝ブルジョアジーの組織的・社会的・軍事的攻勢である。

(i) 全国有事戒厳体制。一九六九年秋のいわゆる「安保決戦」をひかえて、九月に各県警が史上初めて横の連絡をもって全国一斉に「赤軍派」関係を中心にガサ入れをやったという。それが七一年三月初めに二・一七銃強奪作戦に対するものとして全国四万五千人の警官を動員して全国一斉ガサ入れ、検問体制へと発展した。これは私が逮捕される直前のことなのでよく覚えている。更に今年二月一四日から一五日にかけて、やはり全国四万五千人の警官を動員し、全国くまなくガサ入れ、検問を行なった。今回の一連の敗北は直接にはこれによってひきおこされたものだった。この全国的な「治安」の攻撃的体制は、単に警察庁・警視庁を頂点とする体制というのではなく、地方各県警間の緊密な機動的・連繫的体制でもある。そのことをまざまざと見せつけたのが、去年七月の米子M作戦に対する鳥取・岡山らの山陰・瀬戸内各県警の敏速かつ徹底した機動性と検問体制であった。地方性もあるとはいいながら、列車の中に入って乗客の荷物・所持品をメチャクチャに調べるなどということとは思ひもしなかった（それも、事件発生泉以外のところでやるとは）。更にこの体制は人民の日常生活に食いこんでいるとして行なわれたと聞く、今年二・一四一五の全国一斉ガサ入れ、検問はそれ以上だった。これらは日帝権力の戦略的見通しをもった組織的攻撃戦術であることを我々ははっきりとみておかねばならない。

組織と結合して人民内反革命網となっている。このような恒常的反革命網と、それを背景にしているいわば「全国有事戒厳体制」は実は大きな意味がある。ここで、一九二八年（昭和三年）の三・一五の日本共産党を中心とする革命戦士千名近くを逮捕するため全国二十有余の検事局を動員したという三・一五大検挙を思い起こしてほしい。ついで一カ月もたたぬ四月一〇日には左翼三団体（即ち総同盟と二大勢力としてあった労働組合評議会・日本労働党・無産青年同盟）の解散を行ない、そこで、四月下旬政府は中国の国民北伐軍が日本の利権の根源地たる満州・北中国をおびやかすと称して、熊本・広島・久留米の各師団から混成旅団を編成して、出兵し五月四日に済南事件をひきおこしたのだ。そして十月には日共指導者渡辺政之輔が台湾で殺され、翌一九二九年四月一六日に再び大検挙を行なってダメおしし、同年に治安警察法はさらに改悪され、「国体ヲ変革シ、

マタハ私有財産制度ヲ否認」するものに対し最高一〇年だった刑を死刑にしたのだ。労働運動としては共同印刷、日本楽器、野田醤油らの大争議が激烈に展開され、ブルジョアジーの攻勢に抗して敗北しつつも「日華事変」（中国侵略戦争の公然たる全面的開始：昭和十二年）までは全体的に昂揚していったが、日共はギャング共産党（昭和七年十月）、リンチ共産党（昭和九年一月）といわれ、その勇ましさに拘らざるスパイ工作もあって自壊していったのだ。即ち三・一五、四・一六というのは日帝権力の革命派に対する先制攻撃であった。この三・一五、四・一六と同規模のガサ入れが「朝霞事件」に関

(ii) 新全総、総合農政。これは社会的・経済的攻勢である。ブルジョアジーには公害と自然破壊も、都市と農村、工業と農業の相互発展と結合なんぞということはセミのションベン程も気にかけていないということ露骨に正面におしだしてきているのがこれである。

経済成長率年八%を見込み一九八五年まで実現しようという「新全総」（新全国総合開発計画）とは京都大学新聞（三月二七日付・一五六二号）に紹介されている平田メモ（平田敬一郎国土総合開発審議会会長の昨年十一月末に発表されたもの）によると次のようなものである。その実施の方向は①交通通信ネットワークを中心とする大規模開発プロジェクトの一層の推進②環境問題の重視③地域住民の相互理解、というご立派なわけながらのタテマエをうたっている。実施すべき緊急課題として、全国的ネットワークの先行的整備①山陽新幹線のくりあげ完成、②上越新幹線、成田新幹線事業の緊急実施、③高速道路ネットワークの緊急実施、④本州・四国連絡橋、東京湾横断架橋の早期着工、⑤流通拠点港湾の早期整備（茨城、若狭、徳島など）、⑥新大阪国際空港の早期着工、⑦民間経済力の有効活用。地方分散の強力な促進①老朽設備のスクラップ化促進、②東京湾、大阪湾の総合開発構想への組み入れ、③地方圏

中心都市への高次な中枢管理機能の集積、④地方中核都市の環境整備—地方債による資金確保の必要、⑤下水道、処理施設の整備、⑥大規模ニュータウンの建設。そして、今後の検討すべき事項として、①沖縄復帰計画の改正、②環境問題への対応と新全総の総点検、③土地問題—私権の制度強化、地価の抑制（先買権の強化、交付公債による公有地の大幅拡大）、④関連法令の制定、以上である。簡単にいえば、過疎化していく地方に巨大な工業石油コンビナートを築き、それを新幹線、高速道路、石油パイプラインで結びつけて、全国を工業化、都市化しようということだ。しかし今まで、これは破産してきた。そうだが、工業化はなっても、そこに住む人民の精神と肉体を蝕びみ殺してきた。四日市も鹿島も、鹿島なんぞは石原裕次郎という恥知らずな俳優が映画にしようとして、その宣伝に努めた。そう、「農工商全」というおよそ突飛なスローガンをもって鹿島港と巨大コンビナートがつくられた。結果は漁港をメチャクチャにし、工場と砂漠を残し、土地を売って成金になった農民たちはたちまち賭博で使い果し全てを失ない、そして今後は公害をまきちらしている。四日市であるいは川崎で大阪、尼崎で何人何十人、否何百人が死んだというのに（七二年五月二三日現在、公害病認定患者は、川崎一〇〇二人、大阪二四〇六人、尼崎一九六九人）、それなのに先が見えているのに、青森ではむつ小川原、鹿児島では大隅、島根では出雲、その他で巨大コンビナートをつくらうというのだ。かつて所得倍増計画（一九六〇年から）をうけて、旧全国総合開発計画（一九六二年から）

は沖合に五〇万トン級タンカーが原油を陸揚げできるシーバーを建設することにあり、やがて年間一兆八七三〇億円の生産という。現在、マラッカ海峡問題がもめているが、ここを通らずにインドネシアのバリ島のロンボク海峡へ迂回すると、中東から原油を運ぶタンカーの航海は二・三日延びる。それだけで一航海二〇〇〇万円の運賃増となるといふ。そこで、やはり大型タンカーで二日ほどかかる九州南端から京浜京葉工業地区の航海を志布志から直接陸揚げしようというものなのだ。この巨大独占の個別利益のために人民の生活を破壊し、自然を破壊してしまうのだ。新全総とはこういうものである。日本全土をコンビナートにしちまおうということなのだ。これを総合農政が補完する。農業問題は後でまともしてみようと思うが、総合農政とは簡単に言えば、農業切り捨て、農民の極く一部の富農化と大部分の都市下層プロへの強制くりこみ政策である。出稼ぎしなければ食っていけなくなっている農民は年々多くなるばかりである。七一年か七二年の冬に出稼ぎに出た農民は確か四七万人だと思ふ。そして出稼ぎ先の工事現場で事故に会い死んだという記事を私は何度も新聞で読んだ。こんなことを無視してプタ供は、農民が農業をやめていくことにほくそえんでいるのである。それが、昭和四六年度の農業白書である。（後述）更につけ加えることがある。先日、読売新聞に「」に「ぽん買」占、巨大資本という見出しの記事があった。記事では土地買占めは表面化しているだけでもここの一、二年の間にざっと三億平方メートル、資金約一兆円が動いたという。それは人の

が始まったころは地方自治体は工場誘致↓税収増↓福祉拡大ということで、公害なんぞ無視して（六五年当時公害防止条例を制定していた都道府県はたった九団体だった）工場誘致を行なった。しかし、それも結局は収支決算はマイナスとなり、失敗し、加えて公害をひきおこしていったのだった。

ここで、新大隅開発の場合をとってみよう。三月二十七日付読売新聞朝刊によると、「住民の意向を基調として国市町および民間諸団体の要請との調和のうえに鹿児島県が主体となって策定するものである」として、一九七一年十二月に発表された。一九八五年を目標に臨海工業、内陸工業、観光開発などを進め志布志湾（大隅半島東側の湾）に中心となる臨海工業地区を造成する。志布志では海岸線約一五km、沖合い二〇〇mの湾域を埋め立て二七三〇ヘクタールの大コンビナートを形成、石油精製、石油化学を主力に重機械、重電気、造船、食品工業などを誘致する大計画、という。これが鹿児島市と結ぶ東九州高速道路、北九州と結ぶ大隅高速道路、更に東九州新幹線と北九州を結ぶ石油パイプラインによって本州と結合していくものである。ところが、志布志湾近隣は、国定公園「日南海岸」の一部をなし、養殖を行なっているところもある。県当局は「住民の意向を基調として」などということとは全く逆に「住民の意向をふみにじて」この計画を進めようとしている。勿論、住民の大多数の反対運動がおこっていて石油コンビナート絶対反対期成同盟がつくられている。ところで、この計画実は巨大独占企業必死の願いもこもっている。というのは、この計画の目玉

住むことの可能な原野全面積（一七七〇km<sup>2</sup>）の三五分の一にあたり、一億国民全部が各々二畳分のスペースをもてる勘定だという。こんな馬鹿話があるのだろうか。マイホーム造りで借金がかさみ首がまわらなくなったりして家族をつまみ妻や子や親を殺したり、自殺、心中したりしたという記事を私はやはり何度となく新聞に見つけた。いや、そういう人民内の問題だけでなく、この土地買占めは巨大独占資本が文字通り、地主と人民から土地を奪い、日本全土を買占めているということも重要である。巨大独占の社会的経済的攻勢が展開されているということが重要である。（更にこれにはおマケがついてる。翌日の新聞によるとナント「防衛庁共済組合」も土地を大規模に買って防衛庁関係者に超安価で分譲しているという話だ。この共済組合の資金の半分は政府援助というから、つまり人民の税金で土地を買っていることになる訳だ。ナント皮肉で馬鹿にされた話ではないか。）

③ 軍部の抬頭、自衛隊の公然たる侵略、反革命治安軍隊化警察の準治安軍隊化。これは日帝権力の組織的、軍事的攻勢である。最近とみにこれがはつきりしてきた。私の記憶では、去年七月一日の「韓国」朴正熙大統領就任式に佐藤首相が列席した時、自衛隊幕僚三名が一緒に列席した。何故自衛隊幕僚がわざわざ列席したのか？（佐藤が訪韓したことさえおかしいのだ）米帝国主義の代表としてはリードだかロジャーだかが出ていたが、米帝と一緒に朴フアッシュ政権の後楯として緊密な体制を築くという意志表示に他ならない。そして、軍事的



後楯もするという事なのだ。ついで八月二三日自衛隊史上最大というヘリボン作戦演習を展開した。朝鮮半島の気候・地形状況に似ているという北海道で洞爺湖・旭川間南北二〇〇Km東西六〇Kmという広大な地域を確保することを目標に陸上自衛隊の総機数二四機中ヘリボン四機を使い人員一万七千人、車両約二千台（うち装甲車一二四台）、燃料二六〇t（ドラムカバンにして一万三千本）、弾薬一八tを使った大作戦である。このヘリボン作戦という戦闘形態は実はアルジェリア侵略戦争の際対ゲリラ用に展開されたのが最初で、ついで朝鮮侵略戦争そしてベトナム侵略戦争で米帝が対ゲリラ用に展開しているものなのだ。「専守防衛」を標榜する自衛隊が何故こんなヘリボン作戦をこれ程大規模に演習するのか誰しも首をかしげざるをえない。ついで民間旅客機を仮想敵機として自衛隊の訓練している事実が一六二名の尊い人民を失なうことによって暴露された。

今年の元旦私は新聞で「原子力潜水艦建造」暴露の記事を読んでびっくりした。それは四次防で、建造予定の六隻の在来型（電池）潜水艦のうち二一〇〇トン級二隻はいつでも原潜に昇格できる有資格艦であるとある。難かしい専門的なことはわからないのだが、①七〇キロ鋼を使う。②長期潜航装置（シンスの開発）つき。③特殊エアコン（「モノ・エタノール・アシン新処理剤」装備。④潜水艦救難艇積載予定等から、原潜をはっきり目指したものだといえるそうだ。タテマエとしては「燃料電池」用だというのが、それは実用化難というしるものだそうで

その意味からも原潜へのつなぎとして建造するにまちはないという。建造をうけおろ川崎重工、三菱重工では原潜であろうとなんであろうとどんだん発注されれば造っていくというからおそろしい。更に去年十一月、時の防衛庁長官西村は「原子力推進が常道化すれば原潜ももてる」と公言しているから、いわゆる「非核三原則」なんてものがどれ程まやかしてあるかわからうというものだ。

さて、自衛隊のめまぐるしい動きが目立ってきたのは今年初めにサンクレメンテで行なわれた佐藤・ニクソン日米会談以降である。この会談、「共同発表」なんかでは一般的な討議をしたとされ、又マスコミでも、通商問題とデカデカととりあげていたが、その核心は、米中・米ソ会談、沖繩「返還」、ベトナム終結とそれ以降の日米安保のあり方、アジア反革命軍事体制の再編を六九年秋の会談、共同声明の修正であったことはまちはない。去年暮の十二月八日に「韓国」朴は非常事態宣言を行なっているから、それに対する方針も協議されたらう。例えば、表面化されたものに、米空軍施設の横田への集約移転計画がある。これはサンクレメンテで基本線が合意されたという。沖繩をアジア反革命侵略の日米共同基地として、とりわけ米軍のベトナム侵略の直接後方基地として維持しつつ、空軍は横田陸軍は座間、海軍は横須賀、海兵隊は岩国への米軍を集約してこうとするのが米帝の狙いだ、それに見合う自衛隊の戦力配備が必要であり、それがこの間行なわれたのだ（米帝の日本基地使用によるベトナム侵略への直結は米日侵略・反革命戦争

（体制）を意味し、それは日米侵略・反革命戦争（体制）へとつながるのだ）。

二月中旬から国会で四次防予算先取りが問題となつて紛糾を続けていた。二月十九日から始まったいわゆる「あさま山荘」銃撃戦は、この四次防問題を人民の目からそらすかの如く、その決戦を日一日と遅らせ、泰子さんの無事を確認していたというのに、「人質の安全救出」キャンペーンを大々的にはって大芝居をうったのだ。これは現場と警察庁との方針の食い違いによって、ギクシャクした印象を誰にでもあたえたが、完全に影のお偉方に指揮されたという観があった。更に、衣笠統幕僚会議議長が、いまやベトナム・インドシナへの前線侵略基地と化しているタイを訪問し、その足で、なんとサイゴンの戦況を視察したのだ。これも一つの意志表示である。南ベトナムは今では米帝の商品より、日帝の商品が輸入されているという日帝の商品市場になっているが、経済侵略だけではなしに積極的に「軍事的支援もするよ」という意志表示に他ならない。この後三月七日から八日にかけて、深夜に立川への移駐強行が行なわれ、沖繩へのもぐり物資輸送も行なわれた。ここで注意しておきたいのは、丁度この時わゆる「連合赤軍大量粛清殺人」の報道の発端たる同志山田の件が報道されたということだ。知つての通り、これ以降、連日マスコミは警察の統制し演出した報道を展開した。その演出された報道の陰に隠れて、自衛隊軍部の公然たる侵略・反革命治安軍隊としての登場は開始された。立川基地への自衛隊移駐とはとりもなおさず、防衛庁の某官僚

がいったように「首都圏における有事即応の治安部隊」である。練馬や習志野、朝霞では戦前の近衛師団や第一師団より速いし滑走路がない（立川は一五二〇m滑走路がある）ということだ。立川移駐は至上命令だった。立川を自衛隊基地として既成事実にしたうえで、霞ヶ浦の方面へり航空隊を増強して移してくるという構想だそう。地元住民の八割以上が反対しているというのに反革命治安強化のためにはなりふり構わぬという「軍部」の横暴が歴然と姿を現わした。これと同様、軍部の拾頭をはきりさせたのは、沖繩への「もぐり物資輸送」に関する石川空幕僚長の辞任をめぐる自衛隊高級将校の集団辞表提出という叛乱劇である。この叛乱劇を日本のマスコミは殆んど黙殺したが、フィリピン紙だが、インドネシア紙だがこれを大々的に報じて、それによって初めて日本のマスコミにもトビックス風にとりあげられたのだ。この劇の意味するところは大きい。国会で社会党が野党の追及に対し、政府は石川の辞任を決めたが、この高級将校の殆んど全員（衣笠統幕僚会議議長らも含む）の集団辞表提出という恫喝にあつてついに石川を辞任させずにおくほかなかつた。野党の追及も例の通り腰だけになつて事は一応おさまつたが、軍部の拾頭をまざまざとみせつけ実権の移行も考えさせられる事件だった。更に今年四月二一日衆院内閣委員会で社会党楢崎氏の質問に対して、久保防衛局長は「政府の統一解釈では憲法論としては純粋に防衛上のものなら核兵器の保持も禁止されていないので、ABM（ミサイル迎撃ミサイル）も純粋に防衛的なものなら憲法違反にならない」

と答弁している。「純粹に防衛上のもの」なんてのは現代科学兵器に關してあるはずもなく、第一軍事的に全くばかげた論理だが、そのことが問題なのではなく、このように自衛隊關係がABMとして、「核兵器」さえも公然と保持し使用しようと断言する段階に入っているのだということをお我々は銘記すべきだ。このように自衛隊の公然たる反革命・治安軍隊化と軍部の抬頭は最近とみに拍車をかけて進んでおり、それが沖繩への派遣によって侵略軍化は確定され、それに伴って米軍との新たなアジア侵略・反革命としての再編・結合が進行していくであろう。今はそれについてはここでは詳しく論じようとは思わないのでこれでこのことは一応おえよう。ところで、そのような自衛隊の動きと相まって、警察権力の準治安軍隊化を注目しておかねばならない。「軽井沢銃撃戦」での警察側の物量作戦はまことに圧倒的であった。あれ程の「近代的武器」を集中しつつも十日間も決戦を遅らせたというのは実に不可解なことと思えるが、人質云々を利用しての報道統制、連合赤軍・新左翼反人民キャンペーンを創造しようとしたことは明らかである。

「人質をとった」という限界はあったにしろ、敵権力のそのような攻撃陰謀を連合赤軍同志たちはその闘いのなかでうちくだいたが、そのことは別にして、とにかく、敵は一つの戦いに予想以上の物量を集中することがわかったし、その意味でもはや治安警察というより、準治安軍隊化していることを我々は見極めておかねばならない。

以上、簡単に日帝ブルジョアジーの国内人民に対する組織的

というが、T記者は拒否し口論となる。二七日、S部長が警視庁榎野副總監に通報、T記者は九月初めから数度にわたって出頭に応じ、数百枚の写真を見せられるなど菊井「君」らの確認に協力した(T記者は今年二月一日付で配転になり、一カ月の停職となった)。以上である。つまり、八月下旬にすでに警視庁は菊井「君」らをつかんでいた。そしてはつきりしているのは十一月に菊井「君」らを逮捕するまで泳がせて、新左翼系知識人に接触させ、龐大な虚構をつくりあげたということ。それはまことしやかに三里塚青行隊、日大「十月社」グループ更に京大C戦線と土本典昭氏ら新左翼系知識人。それらの頂点に滝田修氏をおき最近はその「暴力団との黒いつながり」という方向までびびっているのだ。八月七日にあって警視總監公舎爆破未遂に關して日大元全共闘「十月社」に対しても同様の謀略がめぐらされているという。三里塚青行隊に対する権力の狂気の弾圧は同じ「現代の眼」に弁護士の人々からの報告がある。別件逮捕、勾留、自白強要(連日少なくて一〇時間、多くて一四時間の取り調べ)殺人罪恫喝、弁護士との接見妨害(県警は「違法なことはわかっている。だけど会わすわけにいかない」という)、不当再逮捕、無差別的起訴ほかに去年二月八日から「三警官殺し」キャンペーンのもとで八次にわたって大量逮捕がなされている。しかし、青行隊の不屈の戦士たちは断乎たる闘いを続け「朝霞」や「十月社」のような虚構を敵がつくることを困難にさせ、破産させている。一一・一〇沖繩ゼネストの際、デモの最中、機動隊が殺されたが、これに關しても

・社会的・軍事的攻勢を見てきたが、最近の一連の事件とそれをめぐる権力の攻勢は、政治・思想面の攻勢に大きな特徴がある。政治が組織・経済・軍事よりも優位にあり、魂であるというよりは、革命勢力にとってばかりではなく、反革命勢力にとっても真理なのである。

五月三日の憲法記念日の日を前にした二日、石田最高裁長官は「憲法擁護の立場には立つな」という発言をした。実に恐れいっただけである。更に石田は「極端な軍国主義者や無政府主義者、はっきりした共産主義者は裁判官として好ましくない」ともいっただけである。又、山中総務長官も「今の憲法は押しつだけだ」と発言して問題にされたが、今や日帝ブルジョアジーが戦後民主主義の仮面を憲法というその根幹までかなぐり捨てようとしているのは明らかである。

ところで、革命勢力と対政治警察の攻防の面からこれを見てみよう。あの全く不可解な朝霞自衛官殺人事件のことについて朝日新聞記者旭太郎氏が「現代の眼五月号」にその内幕の一部を書いている。それによると八月二日事件発生一時間後、朝日ジャーナル記者川本三郎氏は菊井「君」から事件について連絡をうけた。そこで川本氏はすぐに本社にT記者に連絡をとったが、事件の確認がなくて、川本氏は菊井「君」から事件内容を取材、菊井「君」を自分のアパートに泊め、謝礼として五万円渡した。二四日、T記者はこの内容をS社会部長に話し、相談し内容を社会部に確認させたところ裏付けがとれる。二五日S部長はT記者に警察への通報を命じた(これは局長室の判断

佐木隆三氏や松永優君が何の根拠もないのに逮捕され殺人犯にデッチあげられている。又、吉岡カメラマンは強制的ガサ入れをうけ逮捕され現場フィルムを押収されている。又、一一・一四「渋谷暴動」で奥深山君らが殺人罪で起訴されたが、いつだったか「読売」の投書でこの渋谷暴動の日、機動隊員の死んだ現場近くには「市民」本人が、学生たちを尾行して警察に通報し、警視總監賞をもらった云々というのがあった。「市民」のペールをかぶったスパイ網が広がりめぐらされているという事実の一端だろうか、さすがに暗い気分になった。このような革命勢力と政治警察との攻防の質が最近かわり始めている。これらの事実の他にも破防法適用らはその質の変化を如実に示すものといえる。政治警察は明らかに従来とは違って攻撃的捜査網とプレム・アップを展開している。そして、さらに重要なことはこれが新左翼を中心とした革命勢力対政治警察という枠内ではなく、帝国主義国家権力中枢と全人民との問題に発展していることだ。最高裁の青法協会員に対する再拒否は去年ばかりでなく、今年も行なわれた。石川県では公安調査局が小学校教員のなかの共産党員とそのシンパのリストをつくっていったことが、県議会と国会で明るみに出た。最高裁批判を行なった「朝日」は逆批判されると陳謝し、異例の人事移動を行なった。「朝霞事件」での「朝日」の警察権力の出先機関ぶりは前述の通りである。昨春秋の我妻栄氏らが出た「司法の独立を話し合う裁判官の集い」に対する公安調査局の聞きこみ事件についても、そのような集いで講師や集会内容いかによって公

安調査局の調査は当然適法であるとされる最高裁長官談話を発表している。そして、変な方向に騒がれた沖繩復興資金らめぐる日米密約に関する極秘電報の暴露に対する「毎日西山記者」らの逮捕である。ついでに言っておけば「毎日」新聞は一連のいわゆる「連合赤軍事件」で他に比べてまともな報道をしていた。例えば長野県警の「家族対策班」の泰子さんへのカン詰の説得の内容や、三月五日付の「確認していた泰子さんの生存」のトップ記事（権力側は隠しマイクで泰子さんの元気さど居場所を知っていた。東拘は「説売」だから私はそんなこと知らなかった）らである。勾留却下の判決を出した東京高裁の判決理由も実質的には反動的内容であり、マスコミも西山記者の取材方法や発表の仕方を云々して結局は問題をすりかえている。西山記者個人は佐藤内閣の「沖繩返還」欺瞞性に耐えきれず国家人民の最高機関である「国会」の場で人民に真実を訴えるべきだと判断してやったことが、どんなでもない方向にすりかえられ自らが権力に逮捕されるということになってしまったが全く皮肉にも「国会」という場が空虚な場であることを人民に示したのだった。問題なのは佐藤が目をもいて公言したように「機密保護法」を制定するような動きにあること。そして、この件が「国家公務員法」の拡大解釈というにとどまらず、マスコミの取材活動、報道を完全に権力の支配の道具としてかえていくだろうということ。（今まで以上に）権力は全ゆることを逆手にとって人民に対する攻撃をしかけている。それは新左翼と警察などと違うのではなく、権力による全人民の統合を意図した

政治的・思想的攻撃なのだ。そこで我々は全く残念ながら、今回のいわゆる「連合赤軍大量リンチ殺人」が新左翼、革命派の悲劇の頂点にあり、権力はこれを契機に政治的・思想的攻勢を一挙に強めていくだろうということを確認しておかねばならぬ。これに対するに我々が、旧来のままの政治性・思想性では自壊的に敗北していくことは必至だろう。我々は今こそ政治性・思想性をプロレタリア階級性に立脚して立て直し鍛えあげるべきであり、そのような飛躍の好機でもあることをしっかりとつかんでおこう。

ところで、私は、敵権力の政治的思想的攻勢をいつてきたがそれはまだ戦略性をもった確固たる基盤のもと攻勢ではないということをはっきりさせたい。それは戦略的戦術の攻勢にすぎないのだ。戦前のような天皇制ファシズム、あるいはドイツのナチズムのような明確な政治・思想性（最良民族、反共、反帝）を確立するには、世界社会主義革命勢力の正義性、革命性、人民性、軍事力が強く成長しており困難になっている。階級面からいっても、もっとも動搖的で破壊性のある小ブル・ルンプロ層をブルジョアジーは容易に獲得することができず、基盤は脆弱である。だから、戦略的には何も悲観することはない。戦術的に局面を見ると確かに敵権力が攻勢に出ているが敵権力が大きくうごめき出しているのも確かだけど我々にとって戦略的には展望は明るい。最近トンネル不況なんていう言葉がはやっていて、局面ばかりみていると何か我々人民のゆく末がどっちいっても壁にぶつかって敵に翻弄されているかの如き悲観的感情に

なってしまうで革命運動がトンネル不況に陥いってしまったかの如く思っている人がいるかもしれない。しかし、そう心配するな、トンネル不況は敵さんの陥っている状況なのだから、そこで目先の問題でなくゆったりとした長期的な展望を見ている。

## 第二章 日本の階級構成と各階級の動向、諸問題

レーニンはロシアの第一回国勢調査の職業構成表から階級構成表をつくったという。毛沢東同志も一九二六年「中国社会各階級の分析」を書いて中国の階級矛盾の特徴を明確にあげ出し、中国革命の主力か、プロレタリアートと農民であることを指摘して中国型革命戦争の基礎を築いた。毛沢東同志はそこで「誰がわれわれの敵か誰がわれわれの味方か」を明らかにすることが革命の前提問題であるとして全階級を次のように分析している。①地主階級、買弁階級Ⅱ国際ブルジョアジーの従属物、②中産階級Ⅱ民族ブルジョアジー、③小ブル階級Ⅱ自作農、手工業者、下層知識層、④半プロレタリア階級Ⅱ半自作農・貧農・小手工業者・店員・行商人、⑤プロレタリア階級、その他ルンペンプロレタリアート、農村プロレタリアートと、そして「湖南省農民運動の視察報告」などでわかるように農民運動のなかにこそ中国革命の核心があるとして独自の革命戦争路線と、政権構想をうちたてていくのである。レーニンは「共産主義内の「左翼主義」小児病」で次のように言っている。「(政治の)科学は第一に他国の経験を考慮に入れることを要求する。同じく資本主義国である他の国が非常によく似た経験を現に成しているか、あるいは最近なめればあは特にそうである。第二に科学はその国のなかで行動している勢力

共産党の敗北の根拠がうかびあがってくるということ、それによって日本の現在の革命が、社会主義革命でなく、ブルジョア民主主義革命である。あるいは人民民主主義革命であるというような主張の誤りの前提を明らかにすること。もう一つは戦前の階級闘争に学び、その敗北の過程に学ぶということ。この二つである。

ところで、私は、このⅡ章全体に亘って大橋隆憲編著の『日本の階級構成』(岩波新書)に基本的分析を負っている。だからより細かい数字や指摘はそれそのものを見て参考にすればよいと思うが私は赤軍兵士という立場からその分析を再構成していきたいと思っている。

### ① 階級構成の全般的変化(資本主義の発展の面から)

△表Ⅰ-Vを見ればわかるように一九二〇年(大正九年)を境に階級構成が急速な変化をなしている。つまり、一九二〇年以降は基本的階級闘争が従来の地主・小作関係から資本家・労働者の関係に完全に移っているということである。「明治維新はブルジョア民主主義革命か、否か、という論争が戦前・戦後に亘って行なわれてきたが、明治維新当時未だブルジョアジーが脆弱であったとはいえず、資本主義確立、発展のための封建的障害物を政治的にも経済的にも取り除いたという意味では、それはブルジョア民主主義革命であった。

三井・三菱・住友らの大商人が、政商として莫大な特権をもち、明治政府と密着しつつ、商業・運輸・金属に独占的支配力をもって成長していったのだ。一方で徳川時代の社会的・経済

<表-1> 階級構成の変化

(単位 千)

年次	1888 (明21)	1899 (明32)	1909 (明42)	1914 (大3)	1920 (大9)	1925 (大14)	1930 (昭5)	1935 (昭10)	備考
Ⅰ 支配階級	85 (1.3%)	135 (2.1%)	422 (4%)	427 (3.7%)	553 (3.9%)	558 (3.3%)	650 (3.3%)	799 (4.1%)	
(A) 政治的存在(人)	26	30	34	38	40	44	46	49	天皇・皇族・貴族・勅奏任官
(B) 寄生地主(人)	45	50	169	167	172	106	163	160	5町歩以下所得者
(C) 資本家(人)	13	49	198	196	306	307	384	525	資本金10万円以上・5人以上雇用
(D) 恩給生活者(人)	1	6	20	26	34	41	57	65	奏任官以上
Ⅱ 中間層	2,328 (37.1%)	3,142 (34.6%)	3,291 (32.1%)	3,313 (28.7%)	3,451 (25.0%)	4,116 (24.5%)	3,989 (20.7%)	4,371 (22.4%)	
(A) 政治的存在(人)	61	74	94	110	141	186	169	209	判任官
(B) 農民(戸)	1,439	1,882	1,660	1,562	1,509	1,567	1,630	1,699	5町歩以下自作農
(C) 漁民(戸)	179	100	230	252	266	290	310	236	営業税農務者
(D) 商工自営(戸)	233	436	618	639	643	1,118	858	1,122	
(E) 独立技能者(人)	414	550	631	671	797	847	889	972	医者・教員・技師・神官・僧侶・船業
(F) 恩給生活者(人)		12	58	78	95	108	127	134	旧判任官
Ⅲ 被支配階級	3,878 (61.6%)	5,665 (63.3%)	6,518 (63.7%)	7,820 (67.8%)	9,899 (71.1%)	12,139 (72.2%)	13,650 (76.0%)	14,298 (73.5%)	
(A) 貧農(戸)	2,955	3,524	3,068	3,725	3,802	3,826	3,857	3,879	小作・自小作
(B) 自営業(戸)	721	612	701	631	911	461	442	398	営業税免稅者
(C) 労働者(人)	136	1,426	2,440	3,079	4,666	7,271	8,575	9,175	
(D) 下級公務員(人)	65	103	152	385	520	581	776	846	雇以下
計	6,291	8,942	10,231	11,560	13,903	16,813	19,289	19,468	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ

資料：『日本の階級構成』P26～P27より

グループ党、階級、大衆のすべてを考慮にいれること。けっしてただ一つのグループまたは党の願望と見解、たたかおうとする意識と覚悟の程度だけをもとにして政策を決定しないことを要求する」と、ここでは第一の外国の経験については後にまわすとして第二の諸勢力、グループ、党、階級、大衆のすべてを特に全階級の分析を行なってみた。これは毛沢東同志の農民運動の視察報告のようにその動的実態を把握する「調査」に裏付けられている訳ではない。だから、より実践的な豊富なものは今後に期すしかない。とにかく全般的分析をすることが先である。毛沢東同志も「社会各階級の分析」を書き「視察報告」を書いたといっても井冈山に根拠地を築いた初期は農民政策土地改革で左翼的ゆきすぎをやっており失敗しているし、軍事戦争戦略でも「私は戦争・軍事に関して無知だから皆と一緒に学んでいこう」とアピールしているほどののだ。実践して誤ちをおかしく失敗することが悲劇なのではない。誤ちを正しいといいくるめ再び誤ちを犯すことが悲劇なのだ。それに対して、実践さえも躊躇するのを愚かという。

### (一) 第二次大戦前の日本の階級構成

戦前の階級構成とその闘争を見ておくことは戦後、現在を分析する前提として不可欠である。というのは一つは戦前の日本

的基盤だった自営農民を各藩支那が維新の廃藩置県と地租改正（租税の金納化）によって政治的に上から崩壊させられ、自営農民は大量に小作化し、その対局に山形の本間や新潟の市島らを筆頭とする寄生地主を生み出した。（最大の寄生地主は一八九〇年にほぼ九州全土に等しい御料地をもつ天皇家だった）。日本資本主義発展のこの特異性から戦前の日共は寄生地主制を封建制のあらわれだとし、その頂点に立つ天皇として天皇制絶対主義打倒を戦略的目標とした。（例えば一九二七年の綱領は天皇制の打倒、寄生的土地所有の廃止と土地を農民に無償で与えること。七時間労働制の実施、労働者・農民政府の樹立であった）。しかし、それは第一に上に見たとおり、日本資本主義発展の特異性によって寄生地主制が、明治末期まで発達しつつ存続したということ。そして第二に一九二〇年つまり大正末期から基本的階級闘争が独占ブルジョアジーと労働者となったということ。更に第三にその意味から天皇制は当初は寄生地主と独占ブルジョアジーの政治的権力だったが、大正から昭和にかけて独占ブルジョアジーつまり侵略的帝国主義権力となったのであり、中国への侵略戦争からは天皇制ファシズムとなつたということからして、日共の権力規定は誤りだったといえる。さて、何故一九二〇年が階級構成の転換となつたかを見ておこう。

一九一四年に始まった第一次世界大戦は、一九一七年一月ロシアに社会主義革命を成立させ、一九一八年一月ドイツ革命勃発によって終った。世界全体が革命的昂揚をむかえていた。

増。零細企業まで動力機を採用し、一九年には、ついに工業生産額が全国民生産額の五一・三%となつて、農業（三九・五%）と家内工業（九・二%）を追いこした（前掲書P五一）。特に重工業製品は工場生産額の三一・七%になった（一九一九年）。しかし、これは独占の確立でもあった。「一九一四年から一九年にかけて五〇〇人以上の大工場は二〇九から三六二にふえ、その労働者も二五万人（全労働者の二五・一%）から五七万人（三二・一%）にふえた。この期間に一、〇〇〇人以上の巨大工場が八五から一六〇になり、その労働者も一六万人から四〇万人以上（二二・三%）に激増している。また、資本金五〇〇万円以上の大会社は六二社から二九三社にふえ、払込資本金の四二・二%がここに集中された。……一九年には三井・三菱・安田・住友・第一の五大銀行は全国銀行預金の二五%を集中するとともに、産業会社への長期貸付や増資・社債発行の引きうけをおこない創業過程に参加しはじめた」（前掲書P五一〜P五二）。更に、一九二〇年の戦後恐慌、二二年第二次反動恐慌二三年震災恐慌、二七年金融恐慌、三〇年世界大恐慌とみまわれるなかで、独占は強化され大財閥が形成されていった。（資本金五〇〇万円以上の大企業は二九年には七三三社（全体の一・五%）で払込総資本金の六八・五%に集中した。一、〇〇〇万円以上四〇八社では五五・四%である。）

## ② 階級闘争の進展と敗北

一九二〇年を資本主義の発展からみてきたが、ここで階級闘争の側面から大きく見ていこう。一九二〇年を境にして基本的

一九一九年中国での五・四運動、朝鮮での三・一運動（万歳事件）、日本でも一九一八年八月米騒動が起っている。特にヨーロッパ全体で革命と反革命の衝突はすさまじいものであった。ロシアでも内戦が激しく、帝国主義勢力は白衛軍をあらゆる面から支援し、自らシベリア出兵もした。反革命帝国主義列強はヴェルサイユ体制を確立し（一九一九年）国際連盟を発足させた（一九二〇年）、それらは反革命体制確立であると同時に米英の二大帝国主義の覇権の確立と敗戦帝国主義、ドイツに対する強収奪の体制でもあった。このような中に日本帝国主義も割り込んでいこうとしたのである。これらの世界的情勢を背景に分析をすすめよう。結論からいえば、日本資本主義は第一次大戦によって資本主義を確立すると同時に独占段階に入ったということである。さて、日本資本主義発展の特徴として国家資本利権資本の主動性先行性、強蓄積（富国強兵）をあげねばならない。国家資本は増税と外資の導入によって形成され、日清・日露の強盗戦争で文字通り強盗強奪によってそれをまかなっていたが、それでも欧米列強への金融的従属は強まっており、一九一四年には外資導入は約二〇億円にも及んでいた。（国民所得の五一%）、その一方で朝鮮・中国に対する資本輸出が強行されていった（一九一四年で五億円）、ところが第一次世界大戦の勃発によって、日本資本主義はメチャクチャに驚異的な発展をした。それは主に民間資本の発展であった。「一九一四年から一九年に至るまで会社払込総資本金は二・九倍にふえ、工業資本金は三・二七倍となり、工場数は三万二千から四万四千に激

階級関係が、寄生地主↓小作農からブルジョアジー↓プロレタリアートに移ったと前に言ったが、小作争議は二〇年以降並びに激化していることは注目に値する。客観的には第一次大戦のもたらした資本主義の急激な発展で一時農産物の需要の増大をもたらし、戦後の価格暴落で、いわゆる鉄欠価格となつたことが農業危機を招き激化の要因をなしていた。「一七年から二〇年まで（小作争議は）一〇六五件であったが、二一年から一六八〇件となり、二二年に日本共産党・日本農民組合・全国水平社の結成とともに争議はますます激しくなり、二五年以降は二〇〇〇件をはるかにこえるようになった。参加農民は一〇万を下らず、農民組合も二三年に二三三七、二四年に三四九六二六年には四五八二というふうに増えた。そして、その要求も小作料軽減から小作権の確立を要求する運動に変質した」（前掲書P六三）

さて、一九一八年（大正七年）八月三日越中女一揆から始まった。いわゆる「米騒動」は、一道三府三二県をまきこみ、八月中だけでも、一五九件の暴動、参加者も一、〇〇〇万人にのぼったという。これも客観的、直接的には、米価の急騰にある（この年一月に一升三〇銭だったものが、八月には四五銭にはねあがった）といえども、戦後の世界的経済危機とあいまった革命的昂揚という主体的状況に帰因していることも確かである。これを一つの契機として、いわゆる「大正デモクラシー」運動も昂揚し、ブルジョア民主主義の徹底化が要求された。一九一九年（大正八）の労働運動も八時間労働や組合の承認、普通選

挙実施の積極的スローガンがたてられ大規模に闘われた。この年五月は東京大島製鋼所、七月は東京一六新聞社製版部、京都奥村電機製作所らのスト、八月には東京砲兵工廠、王子火薬銃砲製造所、板橋・目黒火薬製造所など軍の直轄工場でスト（約六、〇〇〇人参加）、九月には友愛会（後の総同盟）が指導した川崎造船所（神戸）の争議（一万五千人参加）、さらに同年秋から年末にかけての足尾銅山、釜石鉱山、日立鉱山らでも争議がおこり、釜石では二個中隊の軍隊が出動してようやく鎮定されるという程だった。（一方、これに対しブルジョアジームも渋沢栄一ら財界のきも入りで一九年（大正八年）に労使協調と争議調停を目的とする財団法人「協調会」を創立した。）一九二〇年（大正九年）に入って官営八幡製鉄所、東京市電で大規模なストライキをやっている。さらに一九二一年（大正一〇年）七月に神戸の三菱・川崎両造船所の大ストライキがおきている。これはワシントン軍縮会議が造船・鉄鋼に深刻な打撃を与えたためだが、両造船所の工員三万人を中心に神戸印刷工組合・東神鉄工組合その他友愛会所属の組合員あわせて三万七千人の大デモで神戸市内を制圧したという。これに対して警察側は市中デモを禁止し、姫路師団・憲兵・舞鶴の水兵二〇〇〇人らが大挙出動、死傷三〇〇名、検挙二五〇名を出して敗北していった。この直後九月に友愛会機関紙は「資本家や官憲がもし労働者の正義と信じて進む所に、ただ、力をもっておしつけてやろうとするのみならば、労働者もひっきょう正義とか人道とかいう弱者のお題目を唱えるをやめて、力をもつて応対

で続いた野田醬油の争議を指導した〇〇。全て敗北したが。一方「評議会」は、いわゆる「太陽のない街」のモデルの一九二五年（大正一四）二月からの共同印刷の大スト、あるいは浜松の日本楽器のストらを指導していた。今はそれらの闘いの詳しい紹介や分析は専門の学者さんたちに任せておこう。ここでは一九二〇年以降労働運動が全般的に不況のなかで成長していったことを確認しておくにとどめる。Iの(三)のところでも言ったように我々が問題にしていかなければならないのは、これ以降労働運動全体は「日華事変」に至るまでより上がり続けるが、日共を中心とする革命的前衛部隊は権力の先制攻撃のなかで完全に解体されていったということである。一九二八年（昭三）の三・一五の大検挙と、四・一〇の三左翼団体解散に対し、日共は「評議会」に代わって一二月に地下に「日本労働組合全国協議会」（全協）を結成して闘っていったが、二九年の四・一六の大検挙で日共本体は潰滅的状态となり、翌年のメーデーの時は武装デモの様相の呈したが、文字通りマンガのようになってしまったようだ。「工場地帯の川崎では、全協が指導して日石その他の製油所を破壊し、警察署を襲撃する、などという騒擾計画がたてられたり、メーデー会場では指導者のひとり竹槍をかつぎこんで「われわれは、これから東京で決起した同志とともに千代田城へ行く。諸君は我々が用意した竹槍で武装し、我々に続け、即時革命政権を樹立しよう」とアジ演説した：」「（「暗い谷間の労働運動」）まったくあわれみを感じずる悲劇である。その後日共は自壊していたのであった。そして、一方で

する外はない」と主張し、左傾化していった。（「暗い谷間の労働運動」岩波新書・大河内一男著）（大河内一男は東大闘争の際はつきりしたようにおおよそくだらない学者である。私は大河内の「戦後日本の労働運動」も参考にしたが、そこにある二・一ゼネストに対する評価は支配者の論理である。こういう学者の本をよむ時は注意してからでないとダメである）ところで一九二〇年（大正九年）に上野公園で初めてメーデーが開かれ労働戦線も統一されていった。これに対し権力は、一九二三年（大正一二年）九月の関東大震災を利用して大杉栄らを虐殺した「甘粕事件」あるいは逮捕した労組員七名を銃剣で刺殺した「亀戸事件」、そして教知れぬ朝鮮人虐殺を行ない、又、震災から数日後、治安維持のため次のような緊急勅令を発している。「出版・通信ノ他ナンラノ方法ヲモツテスルヲ問ハズ、暴行・騒擾ノ他、生命・身体モシクハ財産ニ危害ヲ存ボスベキ犯罪ヲ煽動シ、安寧秩序ヲ紊乱スルノ目的ヲモツテ治安ヲ害スル事項ヲ流布シ、マタハ人心ヲ惑乱スルノ目的ヲモツテ流言浮説ヲナシタルモノハ十年以下ノ懲役モシクハ禁錮マタハ三百円以下ノ罰金ニ処ス」。

さて、一九二五年（大正一四）に友愛会の発展した総同盟が分裂し、日共黨員指導のもと「日本労働組合評議会」が結成された。（当時総同盟傘下四〇組合、一万九、四六〇人、評議会傘下三二組合、一万七七八人）、総同盟は、一九二五年一二月から二六年二月まで住友別子銅山争議、信州岡谷の製糸工場の「出稼工女」の争議、一九二七年（昭二）九月から翌年四月ま

は総同盟らは右傾化を続け、一九三二年（昭七）には傘下組合員二八万人（当時の組織労働者総数の約八〇％）を擁する「日本労働組合会議」という右翼的ながらも戦線統一をしたが、一九三七年の対中侵略戦争の開始（「日華事変」）を境に組織も運動も急激に衰退し、産業報国会に包摂され、解体していく。一九四〇年（昭一五）には各地方長官を中心とする都道府県ごとの組織であり「大日本産業報国会」をその中央組織とする産業報国会組織はその統制を軍と警察の手に収められてしまうのである。

以上で、戦前の階級構成と階級闘争を見るのは終えようと思いが、戦前の日共の敗北についての早計な結論は出さないでおこう。今、そのための資料も知識も乏しすぎるから、ただ権力規定の誤りについてはふれておいた。だが、革命闘争、階級闘争の勝利と敗北は革命派の綱領のみならず具体的状況における戦術も分析しておかねば分析しえないし、なによりも、人民と権力全体を動的に把握しなければダメである（つまり戦術はそれに依拠して立ち立てられるのだから）。私は日本の階級構成の転換の象徴的時期たる一九二〇年に行けるだけ焦点をぼやけておいた。だからそこを理解してもらえれば、私の意図は果たされたことになる。しかし、断っておくが、唯物弁証法は常に「全面性」を要求する。その意味で私の主張は不充分すぎるものである。しかし、何もかも要求して結局は支離滅裂になるよりはましである。一つ一つ解決していくことも必要なのだから。それに焦ることは禁物である。

(二) 現代日本の階級構成・各階級の動向・諸問題

先ずA表12Vを見てほしい。これは「日本の階級構成」で大橋氏が引用あるいは再構成した階級構成に関する表を私なりにまとめたものである。端数を思いきってすて、そのすて方も邪道だろうが、こういうのは大胆な方がすっきりして全体像をつかみやすいものだ。数字も六八年から七〇年にかけてのものからとっており、一定しておらず、又、真正正銘の現在の数字ではない。しかし、それは各階級を個別に追及していく段階でリアルなもの、正確なものがえられていくだろう。とにかくここでは多くみて一〇万足らずの支配層が三千万労働者を始め日本人を支配しているというのを見ておいてくれればよい。ただ注意しておくことは「中間層」というのは非常に曖昧な表わし方で、小ブル層とするが、適当なのだが、その際、労働者上層部を入れねばならないので、労働者階級内の分析をまとめてやるべく一応「中間層」と表現しておく。それでも、農林漁業者とくに農民は上・中・下層の分化が激しく、いわゆる小ブルといえるものは現在小数であり、半プロレタリアートといった方がよいので、そこいら辺のことを注意しておいてほしい。又、小ブル層といった場合、大橋氏は全く頭の中にないのだが二五〇万人の学生層を考慮し、本来ならばこの分析に加えるべきである(二五〇万人というのはかなりの数字だ)。しかし、私にも全体的な(学生に関する)資料がないのでそのことには補足的に述べるにとどめておく。

A 支配階級

企業体高級管理者は約八、〇〇〇名、合計して二万名(このうち特に注目すべき自衛隊幕僚・警察官僚である)。大独占資本家層、巨大資本家層：資本金一〇億円以上の民間・金融保険業の法人役員数約一万七、〇〇〇名、大資本・資本金一億円ノ一〇億円の民間法人(金融保険業は除く)は四万二、五〇〇名。

ここで、政治家官僚と独占資本家層との癒着を指摘しておく。大橋氏は次のように言っている。「この場合、癒着といっても、公経済の巨大企業への奉仕の側面が主要である。それは次のようなルートで行なわれる。(1)巨大企業に対する減税、輸出奨励金、価格補給金などの名目での贈与、特別低利融資、(2)公共事業という名目での巨大企業の「外まわり」の整備への奉仕的投資、(3)電力・工業用水・運輸サービスにおける巨大企業へのサービス価格、(4)巨大企業からの大量の商品の買入、その価格は「安く」はない。(5)対外援助や賠償支払いなどの国家資本輸出による民間巨大企業のための海外市場開拓、(6)巨大企業で採算のとれなくなった産業(たとえば石炭)や高額の創業資本を要する新産業(軍需産業関連部門)の「国有化」などである」(前掲書P九八〜P九九)

四七年度予算のうち財政投融资は五兆六、三五〇億円(前年比三一・六%増)という巨額にのぼったが、これは全て「社会資本」と称して、〇〇公団という準政府機関に流れ、そこから各々の事業、工事を巨大資本にうけ負わせるわけだが、この際常日頃のことだが、その人的交流から汚職が伴わない、それ以上

<表-2> 現代日本の階級構成の全貌

階級	構成人数
支配階級	8万2千
政治家・高級官僚	3千 + 2万
大独占資本家・巨大資本家	1万7千
大資本	4万2千
中間層	
中小資本家層	40万
零細資本家層	80万~140万
農林漁業	850万
都市自営業者	800万
労働者層	3千万
上層	250万
中層	1,400万
下層	1,300万

(1) その構成 政治家として国会議員・都道府県議会議員約三、〇〇〇名(議員といっても自民党も共産党もいるわけであって勿論全部が支配階級ではない。七一年四月現在で上にあげた議員は三、三三九名で、うち社共議員は七五〇名という。そこで大都市の市会議員を若干含めてブルジョアジー代表の総計を三、〇〇〇名としておく)。高級官僚・国家公務員・指定職含め行政職二等級以上、司法上層部合わせ五、〇〇〇名、地方公務員、一般行政職一等級以上約七、〇〇〇名、国公営公

に巨大独占資本は「がっぼり」ともうける訳である。財投は強行的に経済成長させる手段だが、その経済成長とはとりもなおさず、巨大独占資本の成長に他ならない。又、去年、円切り上げの際、日銀はドンスカドンスカ、ドル外貨を買い上げ(総額で四〇億ドルという)が、この時、東京銀行(六億九、二〇〇万ドル)をトップに三菱・富士・住友・三井・第一勧銀等の大銀行と三井(三億三、一〇〇万ドル)、丸紅飯田・日商岩井らの商社がそのドルの大部分を売っており、その差益で「がっぼり」ともうけたことは記憶に新しい。

又、現在の自民党政府の主流がいわゆる「吉田本流」でありそれが、ブルジョアジーの主流たる経団連グループ(石坂泰三・植村甲午郎)と一貫して結びついてきたということ、逆に言えば経団連グループの政治的反映が「吉田本流」であったということは銘記しておかねばならない。更に今の佐藤派は財界首脳と「長栄会」なる会合をもっている。勿論これは表むきの結合で、結びつきはより深い。あといわゆる「産軍複合体制」である。自衛隊幕僚と独占資本の結合は人的交流以上のものがある。とりわけ三菱重工との癒着は顕著である(六九年五月時で将補退職者の三菱重工への就職は一五名、三九年/四〇年度の三菱重工は一、〇九四億円の契約高にのぼり、ともに他の群をぬいている)。

(2) 資本家層の分類とその独占度  
右の表を見れば資本家層の様相が大体わかるだろう。ところ、ここにレーニンの『帝国主義論』がある。その「一章、生産

の集中と独占体」に一九〇九年のアメリカ合衆国の資本生産の集中を分析してレイニシはこう書いている。「国の全企業の総生産額の約半分が企業総数の百分の一にぎらられている」そして、「これら三、〇〇〇の巨大企業は二五八の工業部門にわたっている。このことから、集中は一定の発展段階でひとりていれば独占のまぎわに近づく、ということが明らかである。なぜなら、わずか数十の巨大企業が相互の協定に達することは容易であるし、他方では、まさに企業が大規模なために、競争は困難となり、独占への傾向を生ずるからである」と。一九〇九年の米帝に対し、六〇年後の日本帝国主義を比較してみよう。今や、国の全企業の総売上高の約三分の一が企業総数の千分の一にぎらられている（資本金では半分以上が千分の一にぎらられている）、もはや「集中が独占のまぎわまで近づく」のではなくて独占が集中を強化・拡大している。例えば、最近の日本の株式市場は異常な高騰である（不況だといふのに）これは様々な要因があるだろう。外的にはケタはずれの金融緩和とということが、それが金融機関・事業会社の株式投資を生みだしているのだ。その本質は明らかである。巨大資本をも集中している巨大独占ということだ。これは単に日本だけの現象ではない。

ところでここで簡単に巨大独占内の分類と動向をみよう。大橋氏は独占資本を三つのグループに分けている。即ち、①財閥型独占資本家群として、三井・三菱・住友 ②半財閥型独占資本家群として、富士・第一（勧銀）・三和 ③戦後型財閥型独占資本家群として、松下の「ナショナル」、石橋「ブリジストン」、中部「大洋」、五島「東急」、本田「ホンダ」、ソニーである。①は旧財閥系であり、六五年不況を機にして急速に内部結束をかためつつある。この系列は従来、石炭・金属・鉱山・化学・造船が産業基盤だったので、新興重化学工業の発展にはたらくれてきたが、合併・吸収などで、その分野ののりだしつつある。又、住友を除いては、台湾「韓国」市場を捨てきれず中国・北朝鮮市場に対しては消極的、全体としては経団連に代表されているといえるのではないかと思う。②は、③の系列とともに、石油化学、自動車、電気、鉄鋼、合繊らの新興重化学工業に進出し、自立的産業トラストを形成していた。ところで、この系列の富士と①の系列の住友は、最近の中国接近の筆頭にたっている。もともと財閥色がなく内部結束の弱かった富士グループは系列下企業を財閥系へ手離しながら経営悪化を克服していた。又、住友は三菱・三井らの東南アジア進出に内部問題からたらくれており、「韓国」「台湾」との結びつきが差程強くなかったという事情がある。この富士・住友が中国市場に色目をつかって進出しようとしているのはそのような事情からであって決して、この両者が、真剣に日中国交回復を考えている「反米親中の独占」という訳ではない。この②の系列は、木川田一隆の経済同友会に結束しているように思える。

③の系列はいずれも戦後急速に成長した新興独占であり、その同族支配が特色、戦後成長したということから生産手段も、①②のグループに比して老朽化しておらず、新技術も吸収しやすい

<表-3> 法人企業の資本金規模別分布(1969年)

(単位 10億円)

資本金規模	法人数 (社) a	資本 b	売上高 c	売上原価 d	従業員給料 手当 e	従業員数 (人) f	役員数 (人) g
零細 500万円未満	704,307 (85.31)	3,042 (14.47)	42,104 (22.78)	33,015 (21.06)	3,928 (27.39)	7,926,165 (36.78)	1,365,552 (75.43)
中小 500万円~1億円	114,468 (13.87)	4,369 (20.78)	53,711 (27.17)	44,852 (29.34)	4,172 (28.08)	6,794,424 (31.53)	387,182 (21.38)
大 1億円~10億円	5,671 (0.69)	2,889 (13.74)	25,947 (14.09)	21,859 (14.30)	2,165 (15.10)	2,725,835 (12.65)	42,462 (2.35)
巨大 10億円以上	1,099 (0.13)	10,726 (51.01)	62,369 (33.87)	53,135 (34.76)	4,076 (28.42)	4,120,503 (19.04)	15,164 (0.84)
計	825,605	21,026	184,131	152,861	14,341	21,548,927	1,810,341

(注) 大橋氏が「『財政金融統計月報』1970年11月号による」として紹介したものを、零細・中小・企業の細かい分類を一括して再編成してみた。巨大企業としては資本金規模は100億円以上が現実的だそうだが、その統計がない。69年現在で資本金100億円以上で活動中の会社は147社。ところで上の統計は金融保険業法人を全く含んでいない。(金融保険業は全法人数6,600余社というが、いままでもなくその寡占度は著しく高い)

く、新興重化学工業部門で産業トラストを形成している。  
 (3) 円決済圏と東南アジア  
 ここで、階級分析とはちよつと離れるが、日本帝国主義の基本的動向の一つたる円決済圏形成と東南アジアの関係をみておこう。今年二月二三日付の読売新聞朝刊の「磁気テープ」の欄に次のような記事があった。全文引用しよう。

「蒙州や東南アジアの諸国は日本企業の猛烈な商売ぶりを経済侵略とさえみており、警戒心を強めている」——八日間の蒙州・東南アジア視察を終り、このほど帰国した大蔵省の細見卓財務官は、あいかわらずのエコノミック・アニマルぶりに驚いている。太平洋戦争をひきあいに際して「大戦の要因は東南アジアを舞台にした日本商社と華商との対立抗争だった。いまの日本商社の進出ぶりをみると、経済的独立を強く願う東南アジア諸国のナショナルリズムとの衝突が心配になる。大戦前夜に似た感じさえする」と視察旅行で日焼けした顔にきびしさをただよわせている。「昨年の国際通貨調整では私も火の粉をはらうために全力投入したが、こんごは経済進出そのものの反省がもつと必要だ」と語る財務官の表情は深刻。国際通貨体制はドル中心から、ECによる欧州通貨統合などの多極化の動きを強めている。この中で、円通貨圏の形成も具体化するとの観測されている。しかし、同財務官は「日本企業の猛烈ぶりをみて、円経済圏に各国を巻きこむ考えは全くないことを強調してきた」そうだ。細見財務官にすれば、アメリカ重点の貿易構造を転換するにつれて、いずれは東南アジアを中心にした円経済圏ができ



ると読んでいるのだから、日本企業の態度をみると、とても訪問先で円経済圏づくりの呼びかけなどできない心境だったようだ。

ここには大蔵官僚の思わず吐露した困惑がにじみでている。東南アジア諸国を円経済圏（円為替圏）にくみこまざるをえないのは必然としている、にも拘らずそれは、東南アジア諸国人民と民族資本をも搾取し、収奪し、抑圧するものでしかありえない。去年開かれたASEAN（東南アジア諸国連合）外相会議は諸国の様々の思惑をためつつも「東南アジアの平和・自由・中立宣言」を採択したのであり、いわゆる六〇年代前半からの「反動の時代」から、中国・ソ連らの外交的進出の前に分散的傾向を示している。そこで、再びそれなりのナンショナリズムが各国に抬頭してきているのはうなずけるし、そのような変化と日本帝国主義の経済侵略がタイアップして、さしもの大蔵官僚もガチンときて、ショックをうけたというわけである。さて、日本企業のモーレツぶりをちよっと紹介しよう。最近、読売新聞で「南北新時代」という連載ものをやっている。いつも期待して読んでいたのだが、およそ愚劣で悪内容で統計すらもないものである。そして何より東南アジア人民に対する恥ずべき蔑視を無自覚に（つまり身体にしみついたものなのだ）露骨に行なっていることがガマンならない。ちなみに最近読売新聞（他のマスコミもそうだ）は徹底して反革命的論調である。そのような中に一つの興味深い「事実」が語られている記事があった。「繊維業界のインドネシア進出」に関するものである。

即ち、「どうも近く完成品の輸入は禁止になるらしい」とのニュースが流れて、すでに操業中の地元との合併会社は、テトロ・綿混紡の「鐘紡・トーマン組」「東洋紡・伊藤忠組」の二社があったが、同種の「ユニチカ・丸紅組」ら三社、テトレイヨンの「帝人・伊藤忠・トーマン組」らの二社、綿の「大和紡・日綿組」の二社がなだれこみ、そのいずれもが、今年中に本格的実動に入るといふ。つまり、日本系メーカー八社がしのぎをけずろうというわけだ。ところがインドネシア自身約三、〇〇〇の織物工場があるという。これらをつぶしていかなければ成長しえないのだ。こうなったのは、日米繊維協定、円切り上げで韓国・台湾・香港との過酷な競争関係に入っているためだといふが、インドネシアに於いてこのような日本系同士、あるいは地元資本との競争関係は必然的に企業規模拡大・コスト下げから供給過剰になるのは目に見えている。このようにして日帝資本は、東南アジアを荒らし廻っているということだ。

ところで、「円為替圏」は円建て取引を促進し円決済機構の創設による日本帝国主義の経済ブロックの形成の開始を意味する。政府調べて日本の貿易の全輸出入に占める円建て比率は七年九月現在で、二・四％「経済ベース」で、アメリカの九五％西独六五％、仏五〇％と比較して非常に低いといえるが、日帝のように東南アジアに強固な対抗資本主義をもたない地域との結合の強いところではいきおいそれは、「経済ブロック」から「政治・軍事ブロック」へ成長していかざるをえない。最近を見ても、三月二十九日マレーシアへ一億ドルの円借款、四月一二

日タイへ二億八百万ドルの円借款はじめ、四月にビルマへ一、五〇〇万ドルと五、六〇〇万ドル、インドネシアへ一億五、〇〇〇万ドル、フィリピン六、五〇〇万ドルといずれも円借款を出している。レーニンが帝国主義論に書いているように「資本輸出は商品輸出を促進する手段となる」し、借款は「贈賄と紙一重」のようなものである。そしてそのうえ日本帝国主義の借款は借入れ国に不利になっている。これらの円借款は旧来の意味とは違ってきた。つまり、これらは「円為替圏」形成にむけての手打ち金なのである。この「経済ブロック」に最も密接な国は「韓国」であるが、それについてはここでは述べない。私などが浅薄な知識で語るより緻密な分析をしている論文は多くあるし、今はそれに任せよう。ただ、馬山地区における日本独占資本の工場地区建設は（馬山自由輸出入地区）は露骨な植民地化の第一歩であるということ、日本の中小資本の大量に進出しているということを描いておこう。

(4) 日本帝国主義の若干の特徴

日本帝国主義の体系的分析は、この階級分析を大きく離れるし、又、その準備もしてないので、現段階に特徴的なものをメモ風にまとめておく。

④ その寄生性

朝鮮侵略・反革命戦争の「特需」によって戦後日本の独占資本の再興を確立したと同じように一九六五年の生産力の過剰に

よる不況を下図で見ると、更に再び巨額のベトナム特需によってのりこえてきた。日本独占はその成立以来一貫してその寄生性を大きな特徴としている。まるで、山蛭のように木の上からほとりと人の身体に吸いつき、血を吸い、充分に肥えたと、ぼたりとおちるといった類である。六五年不況を①国債、財政インフレ政策 ②輸出拡大（ベトナム特需、長期資本輸出、商品輸出） ③独占体制強化として日本帝国主義はのりこえてきた。

<表-4> ベトナム特需額

(単位100万ドル)

	1965年	1966年	1967年
直接特需	10.6	147.0	206.0
間接特需	79.6	831.7	1,169.3
アメリカ向け	-	456.5	522.3
ベトナム関連地域向け	79.6	375.2	647.0
特需額合計	95.6	978.7	1,369.3

資料：野村総合研究所「ベトナム特需と停戦に関する試算」より

⑤ スタグフレーションの前景

今日の米帝がスタグフレーション即ち、不況期における物価昂騰にみまわられていることはあまねく知られている。これは直接にはベトナム直接侵略、北爆以降六九年夏までベトナム介入のもたらした好況が持続し、労働力需給がひっばくし、労賃・物価上昇となった。（鉄鋼・鉄道労働者はAFL、CIOのリー

ダーとして高級をうけベトナム侵略に積極的に加担していった。その高給が続かなくなった故、七〇、七一年頃から大規模なストがうたれたのである」ということなのだが、その物価とは、単に消費者物価ではなく卸売物価をもさしている。これは実は非常に奇妙なことなのだ。戦後の世界どこの国でも何度かの不況に見まわられているが、初期においては不況期にデフレ現象が一般的だった。ところが、五八年最初ドル危機にみまわれた頃からだと思いが、特にアメリカでは構造が転換した。不況期にインフレ現象、即ち、物価騰貴となったのだ。（消費者物価が恣意的に高騰させられることは一般的であるが、卸売物価を特に生産部門で不況期に高めたら買手はなくなるので高騰することはありえないはずなのだ）。これがスタグフレーションである。ところが日本ではまだこの段階に入っていない。六〇年から六九年までの統計で卸売物価の上昇率は西独二五・四％英三〇・四％、仏二九・九％であるのに日本は一三・七％でしかない。「トンネル不況」といわれるこの現在の不況でも例えば去年（七一年）の一二月には、卸売物価指数は六五年を一〇〇として一〇九・八％で、七一年中の年平均は「七年ぶりに反落」ということで、一一〇・五、前年の一一一・三に比べて〇・七％下落している。これは鉄鋼、非鉄金属、繊維、木材らが大幅下落したことが原因とされている。消費者物価は年々六％位づつ上昇しているのいわば資本家同士の間の物価たる卸売物価は逆に下落しているというのだから、なんともばからしい話だ。とにかく日本では一般的経済学通りなのであり、未だ

スタグフレーションの段階に入っていないといえる。この原因は主に日本においては剰余価値率が高い。つまり搾取率が高いことにある。例えば、日本では五三年で企業の労賃への分配率（正確な資料がないので、新聞にのっていた数字を使う。分配率＝剰余価値ということではない。搾取率を目やすとしてもらえればよい）は三九・六％で、それが六六年には三三・八％と下落している。これをEC各国と比較すると、六七年で西独四一・二％、カナダ五一・二％、英六四・九％である。もう一つは下の表を参考にしてほしい。

日本帝国主義が未だスタグフレーションの階段であるということは経済面から言えば、まだ膨脹の余裕もっているというところでもある。しかし世界的通貨危機が示すように外的に経済危機が平準化するのであり、それ以上に世界社会主義革命勢力の攻勢によって慢性的政治危機をかかえることざるをえないのだということを確認しておこう。

<表-5> 鋼材トン当り費用構成

(1964 単位ドル)

	原料費	資本費		計	労務費	計
		金 利	償 却			
日本 (6社)	44.4	9.5	11.2	20.7	19.8	84.9
米 (8社)	36.0	1.4	15.1	16.6	83.1	135.7
西独 (4社)	43.5	3.3	12.4	15.6	39.5	98.6
英 (3社)	38.5	2.4	9.0	11.4	53.2	103.1

資料：鉄鋼連盟「コスト構造の分析」

(5) 階級分析と権力分析  
さて、以上で支配層

(とくに独占資本家層)の分析をしてきたが、ここで、この階級分析は即ち権力分析という訳ではないことを注意しておこう。階級分析は権力分析の基底にすえられねばならないが、権力分析は階級分析とは違った視点が必要なのだ。例えば、軍隊をとって見よう。将校クラス以下は全て労働者と階級分析はする。しかし、それでは本質を(そして実体を)つかむことはできない。個々人が何者であるかということから、我々は出発するのではなく、個々の人間の組織されたものとして機構として実体を(本質を)把むことが必要なのである。近代国家とりわけ帝国主義国家は軍隊を高度に組織された武装特殊部隊にする。一般に権力とは先ず軍事力、政治力、組織力、経済力であり、その最も組織されたものが国家である。こういった辞書的原則論は無味乾燥ではあるが、とにかく階級分析だけでは全く不十分であるということを理解しておこう。とりわけ今日においては、帝国主義国家間あるいはそれと後進的資本主義国間に特殊な(歴史的な)反革命同盟という結合ができ、新しい国際的権力構造が出来ているといえるのであって、その面からの権力分析が必要なのである。

更に、私は階級分析で、日本のみに限っているが、この支配層の分析の究極的目標は現在着々と進められつつある日本帝国主義の侵略・反革命戦争体制をその本質を具体的階級攻防のなかに把えることにある。これはだからその前提的分析なのだが

その究極目標に至るためには『帝国主義論』の「フランス語とドイツ語版の序文」のレーニンの次の分析方法をふまえておかなばならない。即ち

▲戦争の真の社会的性格、もっと正確に言えば、真の階級的性格がどのようなものであるかということを証明するものは、いままでもなく、その戦争の外交史にあるのではなく、すべての交戦列強の支配階級の客観的立場の分析にあるからである。この客観的立場を描き出すためにはいくつかの実例や個々の統計数字をとるべきではなく、……かならず、すべての交戦列強と全世界との経済生活の基礎にかんする資料の総体をとらなければならぬ。

このようにして、レーニンは「帝国主義の基本的な経済的特質の関連と相互関係」と「社会排外主義の世界史的な現象の経済的基礎」を明らかにしたのだ。

我々もこのように分析していかねばならない。だが「交戦列強」という形の帝国主義間世界大戦の可能性はきえた訳ではないが、現在の主要な戦争形態は社会主義革命勢力を主勢力とする民族解放戦争と帝国主義の侵略・反革命戦争との対決となっている。だから単に「経済生活の基礎」の総体ばかりでなく、その集中として、又、逆規定するものとして政治生活の基礎の総体をも分析しないと真の階級的・社会的性格を分析しきれないといえる。しかし、今ここではその分析はひかえておこう。

(時間と資料の許す限り追及するつもりであるが) さて、くだくだといってきたが、ここでごく簡単に具体的権

力問題にふれておこう。

五月一日「沖繩返還」がなされた。「在日米軍」はこれまで二万八千だったが、沖繩の米軍は陸一万五千、海兵隊二万、海一十五百、空一万四千で、五万五千の部隊がふえる。在「露」四万三千二百、在比二万、在タイ三万二千二百、在台九千でベトナムを除けば極東一東南アジア最強・最大の部隊と基地をもつということになる。沖繩は即、前線基地としてその他横田を第五空軍司令部として横須賀を第七艦隊駆逐艦、空母、母港補給港とし、海軍司令部を設置、陸軍は座間、海兵隊は岩国へ集約統合、日本全土をニクソン・ドクトリンの軍事的要として再編している。この再編と自衛隊の再編は不可分一体のものとして把えねばならない。これが公然たる侵略反革命軍として変貌していることは(1)のところで書いた。さて、日本帝国主義権力の経済的基礎は勿論巨大独占である。この巨大独占は主要に(というが殆んど)日本の巨大独占である。一九六五年不況の際日本帝国主義ブルジョアジーは侵略的独占へ飛躍した。(それはそれで以降の経済の様相に資本の動向を見ればわかる)として外帝国主義独占との真向からの対立抗争関係に入った。資本の自由化は他帝国主義市場への進出とタイプアップしていた。しかし、日本帝国主義の軍事的基礎は自衛隊と米軍の安保反革命同盟である。これは一国的に見れば政治は経済の集中的あらわれであり、軍事は政治の集中的あらわれである」という真理に反するものである。日帝と米帝の経済的対立は激烈なものなのであり、それは当然政治的軍事的対立を生むにも拘らず同盟を

結んでいるのだから、しかし、政治は軍事に逆規定され、経済は政治に逆規定される。そして何よりも政治が優先する。革命と反革命の政治が優先する。

そこに複合権力が生まれる。(勿論、現代過渡期世界という歴史的段階の特殊性によるものであるが)、日本帝国主義の政治的基礎は、未だに弱い。ベトナム・インドシナ革命戦争、中国・朝鮮の外交的政治的攻勢に確固たる政治基盤をつくりえず侵略的イデオロギーを確立しえていない。だが、(1)でみたように戦術的には全ゆる方面から攻勢に出ている。それは、日帝が未だスタグフレーション前段であり、膨脹過程にあり、経済侵略による超過利潤は小ブル人民とプロレタリア上層をうるおしているということから可能なのである。では次にその層の分析に入っていく。

#### B 中間層(小ブル層)

##### (1) 中小零細資本家層

中小資本家層は一応、資本金五〇〇万以上一億円未満とする。と、一九六〇年に二万七千社、役員一五万人、従業員三百万人だったが、一九六九年には一一万四千社、役員数三九万人、従業員数六八〇万人(表一三参照)となった。中小零細資本は、多くは巨大独占の下請、再下請らであり、不況の際にはまともにその影響をうける。例えば六五年不況を前にしての六三年頃からの設備投資のおちこみは主に大企業であり、大企業は充分に不況にそなえていたのに対し、(六三年の設備投資は大企業で対前年比八%減に対し、中小企業は二七%増だった。一六四

年「中小企業白書」)いい気になって設備投資を続けていた中小企業は、六四・六五年にはたばたと倒産していき、回復がおくれた。さらに貿易収支の黒字基調は六四年からだがそこから中小企業の輸出シェアは全輸出の五〇%をわり、その後毎年五%づつ縮少し、去年一月―九月では三五%までに低下している。しかし、これは全く相対的な数字で、中小企業の「韓国」、東南アジア諸国への進出はめざましいものがある。ところで現在の状況を七一年度の「中小企業白書」で見ると中小企業の生産は前年比一・五%増(七〇年は一二・七%増だった。大企業は六・一%増である)在庫水準は前年比一六・七%増、輸出伸び率は鈍化。倒産は九、二〇六件(前年比五・七%減、前年に比べ少なくなっているが、六五年度総計は六、〇六〇件だった)全体に設備投資関連企業、輸出関連企業の業績悪化でとりわけ下請け企業と産地型輸出中小企業(昨年の円切り上げの際の新潟県内洋食器企業の破産は記憶に新しい。文字通りさじを投げた格好だった)。独占資本は粗鋼カルテル等や勧告操短に見られるように政府の手あつい保護をうけて価格を保ち、中小企業を操短させて吸収したり、倒産させて自らはのびていく。中小企業はまともに不況をうけねばならないのである。しかし、逆に中小企業はだからこそかえって階級対立を尖鋭化させざるをえないともいえる。そして、中小資本はなりふりかまわず「韓国」台湾等へ進出して地元資本を食いつぶしているということも又事実なのである。

零細資本は資本金五〇〇万円未満のものとすると、一九六〇

年は四七万社、役員一三〇万人、従業員七四〇万人で、一九六九年になると、七〇万社、役員一四〇万人、従業員八〇〇万人である(八表一三参照)。しかし、一般に資本金五〇〇万円未満といっても、後述の都市自営業者との区別がつきにくいということになるので、一応資本金二〇〇万円以上、従業員一〇人以上とすると、役員七五―八〇万人となる統計もある。この層はどの資本家層にも増して龐大な企業数をもっているが、相変らず不安定な経営を行なっている。勿論政治的にはブルジョアジーの位置にあるがきわめて不安定な要素をもっている。

##### (2) 都市自営業者層

国勢調査の自営業者層のうち農林漁業従事者を除いた。鉦工運通従事者、販売従事者、サービス職業従事者、専門的・技術的職業従事者を一括して都市自営業者層とすると、一九五〇年―一五五年―一六〇年―一六五年の各調査で五二万―六一万―六一万―七四〇万人で労働人口中の比率は一四・三%―一五・六%―一五・〇%―一五・二%、この割合でいくと、七〇年にはおそらく八〇〇万内外で今はそれを上回っているだろう。このように比率は一五%内外と一定であるけれどこの都市自営業者を中心とする小零細企業の開業率は年率で一〇%をこえるというから、かなり不安定である。もともとこの層も開業医のようなものもあればスナックを営んでいる人もいるのだから、左程不思議ともいえない。この層は上中層と下層の差が激しい。下層は実質的に過酷な家族労働をもってなりたつて、半プロレタリアートであるともいえる。ところで、この層の政治的不安

定性は、主にこの層を基盤とする公明党もかなりの政治勢力たらしめていることとわかる。階級的基盤からいえば、この層とルンプロを中心にドイツナチズム、イタリア、ファシズムを登場させたのであり、もっとも警戒しなければならぬ層なのである。「自警団」なんていうのもこの層が警察や消防署と結びついて出てきたといえる。ところが、奇妙なことに最近中小零細企業とこの都市自営業者層の間に日本共産党の影響の強いという「民主商工会」が組織を伸ばしている。いつだったか自民党が「民主商工会」の成長に対して何とか手をうたねばならぬと苦慮しているといった記事を読んだことがある。最近の中小零細、自営業者層の切り捨ての傾向に政治的不安定になっているということだろう。一昨年(?)だったか、創価学会公明党と共産党のすさまじい組織のつぶしあい抗争は実はこの都市自営業者層(とルンプロ)の争奪戦だったといえる。

(3) 農民層と農業問題

④ 農民の構成

国勢調査によって農林漁業従事者の実数をとりだすと、一九五〇年に一、六一九万人、五五年に一、五〇五万人、六〇年に一、三四九万人、六五年に一、一一〇万人で各々の五年間に一四万人減、一五六万人減、二二九万人減と急減している。六五年から七〇年に一応二五〇万減として推定すると七〇年は八六〇万人となる(六八年の統計では九〇四万人で六五年から年になんと六九万人づつ減少している。その割でいくと七〇年は七六六万人となる。現在は七〇〇万人をわっているかもしれない)

<表-6> 農家世帯員の他産業への流出者数と出かせぎ者数

(単位 千人)

	流出者 総数	流出形 態通	別出 動	新卒・新卒以外		出かせぎ 者総数
				新卒	新卒以外	
1958	542	146	395	—	—	195
60	746	286	460	325	421	175
62	902	405	497	480	422	206
64	890	475	415	513	375	287
66	807	425	383	563	244	235
68	787	449	318	538	249	236

資料：「高度経済成長下における農家の就業動向」  
「日本の階級構成」P184より

いるということだっただけと思う。このような人は一貫して増えており、近年特に激増している。これを分析していきよう。  
△表一六Vを見てみよう。流出者総数は年約八〇万人、出稼ぎ者は年に二〇万人強である。

僕の記憶では七一年から七二年にかけての冬の出稼ぎは四七万人にのぼっていたはずで、最近はお出稼ぎは倍増してるとい

これは農林漁業従事者だから全て農民というわけではないが、ここでは農民を分析していくことにする。(林業者、漁民の分析も本来はすべきだけど今は全く資料もないので、やりません)これを戸数の面からみると、五五年一六〇年一五五千戸減(減少率〇・三%)、六〇年一六五年で三五万七千戸減(率六・一%)、六五年一七〇年二八万八千戸減(率五・三%)である。では何故このように急激しているのか、その実体はどうなのかを見ていこう。

⑤ 農民の分解と流出

△最近、本紙で岩手県在住の作家儀村方夫氏が紹介している出かせぎ農民の感動的な歌を読んだ(八四十二の厄年重くのしかかる。何くそ何くそくそを日々くむ)開拓地でも出かせぎする以外に生きる道がなく、いまは故郷を捨てて清掃夫となる。いまのところ、かれは銃を乱射する若者とは無縁だが、連合赤軍がいつまでも底辺から抜け出せない階層と手を結び、真に恐るべき存在となるまで政治は催眠をつづけるつもりだろうか

これは三月二日付の読売新聞「編集手帳」の抜粋である。いわゆる「リンチ殺人」が発表される以前、ブタ供の先兵たるブル新でも軽井沢銃撃戦を気狂い扱いしきれず、その恐れの一端を垣間みせているので面白い文章である。ところで今はそのことより「くそを日々くむ」元農民に注目しよう。この人は大分以前から出稼ぎをしていた。それでもどうしても農業が続けたくて数年前土地を買って農業一本立ちをしようとした。だが結局続かず、今は家族とともに東京に出てきて清掃夫をやっている。

える。ただし、流出者の方では年に二〇万人強が農村に還流する(六八年で二一万人)ので、そうすると年約六〇万人の流出ということになる。これを階層別に見てみよう。

△表一七Vより年々増減戸数の境が経営耕地規模の大きい方へ及んでいることがわかる。六五年から七〇年にかけては二haがその境界をなしている。ここで一応〇・五ha未満を小零細農〇・五ha一haを中農、一haを富農とすると、中農が大規模に

<表-7> 経営規模別戸数の増減(都府県)

(△は減)

総数	1955~60		
	増減戸数	15千戸	率0.3%△
	△357	△288	(△5.3)
0.3ha未満	△13	△135	(△4.0)
	(△1.1)	(△10.6)	
0.3~0.5ha	△22	△38	(△5.6)
	(△2.2)	(△3.8)	
0.5~1ha	△58	△148	(△9.0)
	(△2.9)	(△7.6)	
1~1.5ha	17	△56	(△8.1)
	(1.8)	(△5.6)	
1.5~2ha	27	3	(△0.7)
	(7.2)	(0.8)	
2~2.5ha	15	9	(9.6)
	(11.6)	(5.8)	
2.5~3ha	6	5	(20.0)
	(12.3)	(9.6)	
3ha以上	6	5	(49.0)
	(21.3)	(14.0)	
例外規定	6	△5	1

資料：大橋氏が「農業センサス」より作成 一前掲書P119

分解しているといえる。それに比して富農とりわけ3ha以上をもつものは逆にふえているのである。農業所得の家計費充足率でも〇・5ha未満は二〇%足らず、中農でも七〇%内外に比して、2ha以上は一〇%以上となっている。

これを専業・兼業面で見ると一九七〇年で専業はわずか一五・六%、農業に従とする第二種兼業が半ば以上をしめている。それも自営兼業でなく雇用兼業（臨時的賃労働、恒常的賃労働職員勤務）が増大している。更に、前述のように流出人数に比べて減少人数が比較的少ないのは、いわゆる三チャン（二チャン）農業となっているからで、ちなみに六八年では全農民のうち男子四三%（ということは女子五七%）、四〇才以上は六八%という数字を示し、中高年令層と婦人の残村を表わしている。これは一方で機械化にたよって農業を営なむことを意味しているが、一・5ha以上では機械化で収益をあげているが、〇・3ha以上では逆にそのため赤字を出しているという。いわゆる「機械化貧乏」である。いずれにせよ、このようにして、多くが都市低賃金プロレタリアートへくみこまれていることを確認しよう。

#### ④ 食管の歴史

今日では破綻した「食管」の歴史を以下六段階にわけてたどって現在の農民、農業問題に接近してみよう。①一九四二年食糧管理法成立、これは生産者米価と消費者米価を別個の原則によって決定し米価二重価格制を通して、戦争遂行の条件を確保し、一方で米の増産、他方で国民生活の安定をはかるうとしたものだった。

働力不足が目立ちはじめた。この傾向を更に促進しようとしたのが「農基法」である。それは農村労働力流出、兼業、出稼の拡大、生産構成の変化を更に促進させ、零細農の脱農促進、農業生産の選択的拡大、生産の集中化の促進を目指すものであった。しかし、実際には一部の地区で構造改善事業が実施されただけで、選択的拡大、経営規模拡大、零細農切り捨てといった本来の目標は殆んど達成されなかったという。又、生産者米価、消費者米価とも六一年まで比較的安定していたが、これ以降は乱調となる。⑤六二年から六〇年半ばまでこの時期は米不足傾向となり、外米の輸入も増大（六六年が最高で八九〇万トン）し、米価も上昇、これが米の生産を刺激し、東北上層農民と零細農の米生産一本化を促す。⑥六〇年後半から現在までこの時期は米生産が急増し、六七年には一、四〇〇万トンの大豊作となり、何年連続大豊作」という記事が毎年続いた。しかし、米の消費量は年々減少し、政府の持越古米は六五年からふえ続け、一方で生産者米価も引きあげられ、食管赤字は六七年で二、四二九億円にのぼり、巨大独占の方からついにクレームがつき、食管政策は破綻し、七〇年の総合農政の提起に至るのである。前述の農基法農政の破綻はこの時期の八郎湯干拓の大型農業のキャンペーンに拘らず、工場地帯へと変身してしまつたことに見事に表われている。

#### ⑤ 総合農政

一九七〇年二月、政府は「総合農政の推進について」という政策決定を発表した。それは「農政の基本目標」を達成する

しかし終戦にいたるまで明治以降初めて農業生産指数が三年連続して低下した（六八年から四年連続して生産指数が低下しているが、これは史上初のことなのだ）②四五年から四九年まで、米占領軍は終戦直後から起きた農民運動の盛り上がり（とりわけ山口武秀氏の指揮した茨城県常東農民組合運動）に対し、農地改革というブルジョア民主主義的改革を行ない、地主を解体して、その運動を収束した、と同時に四七年から米占領軍はその政策を転換し初め、日本資本主義再建として、石炭鉄を中心とした傾斜生産方式を採用、さらに電力・交通・肥料の優先的生産開始、片山哲社会党政府のもとで新物価体系がつくられ、四八年には米価の補助金うち切り、農業所得税増徴、食糧不足から強制供出（ジープ供出）となり、農業圧迫政策がとられ、翌四九年のドッジライン（デフレ政策）でいわゆる

現状危機となり消費者米価は生産者米価以上となりいよいよ農業経営は苦しくなった。③五〇年から五四年まで、朝鮮特需を媒介にして工業生産の急速な再興と米国からの資金導入によって基幹産業は大規模な設備投資を展開、この段階で独占資本は復活したといえる。この時期は農業農民保護政策がとられた。一応、米以外の直接統制は五〇年に撤廃されたが生産者米価の伸びでは消費者米価をはるかに上まわり、食管会計は五一年までの黒字から一変して五二年以降赤字が累積するようになる。④五〇年代半ばから、農基法農政（六一一年）へ、米の需要が減少し、農産物構成の変化は富農にとって有利となり、3ha以上の農家戸数は漸増、零細農は分解の度を早め、農業における労

「基本的事項」として、①米の需給調整、②需要の強い畜産物・飼料作物・園芸作物などの効率的増産と農業団体などによる生産と出荷の調整体制の整備、③米価政策はじめ農産物価格政策の是正、④流通加工の近代化と市場開発、⑤農産物輸入の調整、⑥離農の援助・促進、⑦大規模・高生産性の近代的農業の育成、⑧農村の整備・開発の推進の八項目を掲げている。これはI章の(三)(ii)として分析した「新全総」と一体をなすものとして見なければならぬ。日本共産党は一貫して、農業問題をアメリカ独占資本の収奪とアメリカ農産物のダンピングという面からしか扱えていない。だが、もはやこの「総合農政」は日本独占の強行的農村解体と中下層農民の強制的都市下層プロレタリアートへのくみこみを露骨に展開するものとしてあることは明白である（そして独占資本のおこぼれをうけてごく一部の農民が富農として残るだけだ）。ところで、帝国主義段階に入り、一九三〇年代不況以降、帝国主義のどの国でも体制維持の政治的要請から農業、農民保護政策をとってきた。イギリスでも五%たらずの農民に対し農産物価格、販路の保証、協同化過小農統合、農村開発などで農民支持政策をとっているというし、アメリカでも農業法による保証と過剰在庫の海外ダンピングなどで農業支持政策をとっている。ちなみにニクソンの南部農牧業者に対する「南部戦略」はその表われである。ECでも同様、自民党も農業全てを切り捨てる訳にはいかない。農協を牛じる富農をだきこんでおく必要はある。しかし、それ以上するつもりはないし、農村の若年労働力を都市にくみこんでいく

ことは至上命令であろう。

### ④ 農民の闘争

農民の闘いは輝かしい歴史をもっている。私が水戸にいて水戸射撃場撤去や東海村の核燃料再処理工場設置反対に関わりあって、農家を訪ねて話し合った項の農民の人々の印象は今まで強く残っている。「むしろ水戸の百姓は起ち上がるまでは遅いかもしんねえけど、一度起ち上がったらとことんやんねきゃ気が済まねえ」といった三十才半ばのオヤジさんや、冬の寒い日畑仕事をしながら射撃場で訓練のために飛んでくる米軍機の低空飛行と轟音のものがすごさを語ってくれたおばあちゃん。彼らは、茨城では未だ起ちあがっていない。しかし、三里塚芝山の農民は最も革命的な農民として、人民として闘い続けている。以上見てきたように、今、農民は（特に中下層農民は）個々に分断され、解体され、やむなく都市下層プロレタリアートと化している。農村から中高卒として都市へ流出してくる若者、あるいは学生として都市に出てくるもの、それらはやはり矛盾のただ中に放り出され、政治的・階級的感觉は鋭い。こういう抽象的なことばかりでなく、去年の春の参院選の際、秋田だと思っただが、自民党県連と癒着している農協を青年団が批判し、造反をおこした。これは単に秋田だけに限らず、全国的な傾向に思える。自民党の支持率は農村でも確実におちている。しかしそれが即社会党や公明・共産らの票にならず、無関心票を増やしているにすぎないというのが現状だ。自民党各県連と農協ボスとの結合は続くだろう。総合農政も「農業団体による生産と

出荷の調整体制の整備」をあげており、農協は地方農民の支配権力として機能し続けるだろう。しかし、総合農政が新全総と

にかけてのロシアのナロードニキの敗北→反動的時代に『資本論』が労働者の間でむさぼり読まれていたという。学者さんや学生さんには難かしい『資本論』も労働者にとっては理解しやすい革命的文書だったのだ。全ての革命文書は労働者にとって興味あり、わかりやすいものでなければならぬ。

プロレタリアートは一九二〇年に日本の階級闘争の主役としてなって以来、更に量的にも増加し、一九五五年から六〇年にかけて総労働人口の五〇%をこえ、今や六割以上になっている。しかし、同時に帝国主義の腐朽性からその内部の分化も進み、一般的に「プロレタリアートの党」あるいは「プロレタリアートのため」ということだけでは「人民の党」「人民のため」というのと同様不十分であり、曖昧になってしまうことが多い。ここでは実践的な提議・方針を提出することはできない。私の叙述もその構成の整理・分析に止まってしまうだろうが、しかし、それは是非とも必要であると思っっている。実践し、調査し、分析し、総括し、又、実践し、調査し、分析していくこと、そのようななかからこそ実践的理論と方針が獲得される。

#### (1) 日本プロレタリアートの構成

一九六八年は労働者約二、九〇〇万人（別の資料では三、〇〇〇万人以上）で、うち、建設、製造業が一、三〇〇万人、その四五%を占めている。その他、運輸、通信業二九〇万人、サービス業四七五万人、卸・小売業四八〇万人である。

雇用者規模五〇〇人以上の大企業の労働者は六八年で八四二万人いるが、一方、三〇〇人以下の労働者も全体の五五%をし

めている。『日本の階級構成』で大橋氏はⅧ表ⅠⅧⅤのように、上・中・下層を分類して分析している。

＜表-8＞ 労働者階級上・中・下層の試算  
(非農林業)

(単位：万人)

	1965	1968
労働者総数	2,525.3	2,898.2
上層	173.7	252.8
中層	1,212.8	1,371.2
下層	1,138.3	1,274.2
下層内訳	常雇のうち年間所得30万円以下	常雇のうち年間所得40万円以下
	950.0	1,073.8
	臨時雇	臨時雇
	89.3	141.5
	日雇	日雇
	99.5	58.9

資料：大橋氏が「就業構造基本調査」より作成したもの  
前掲書P134より

#### C プロレタリアート

ブルジョアジー、小ブル層の分析から、ようやく社会主義革命戦争の主力「プロレタリアート」にいきついた。これまでの叙述は多分に冗慢であったかと思う。一八八〇年代半ばから後半

「根本的マチガイ」として公害（公害とはうまく逃げたものだ、工害のマチガイ）をまきちらし、多くの人民にマチガイをしわよせして、今「トンネル」不況に入っている。音もうるさく、煙もひどい「トンネル」だから自分で窓をしめろという。フザケルナ。侵略・反革命・人民抑圧のとまらない汽車をとめて、我々は人民解放の汽車にしなければならぬ。そこでトンネルがあれば自分たちで窓をしめよう。とまらない汽車をとめるために日本の農民はプロレタリア人民と団結するだろう。現時点で中下層農民はプロレタリアートの同盟者となりうる。

#### (2) 労働者上層

主に、この層は大企業の管理労働者をさしている。一般に

「労働貴族」として、独占資本のもたらす超過利潤のおこぼれをもらいうけ、資本家階級の先兵として、現場あるいは事務によつて、一般の労働者を事務面で政治面で管理している。この層が増大することは帝国主義の腐朽性に帰因するのだが、差別性・区別性がないところに帝国主義はなれたたない。日本帝国主義が経済的には海外侵略を増大させ、膨脹過程にあることを考えれば、今後もこの層は増大し強化する基盤はある。最近では「技術革新」「機械化」が進み、職員層、いわゆるサラリーマンが増大し、職員管理ではなくなってきたりしているが、管理者層内部の分化も激しく、ライン・アンド・スタッフ制・作業長制度らのアメリカ式労務管理がふえてきている。又、従来の年功賃金に職務給を加えて、その差別と競争関係を形成せんとしている。ところで、資本家に公然と買収された労働貴族以上に、労働者にとって警戒し、闘わねばならないのは労働組合官僚であり、これは隠然に買収されており、労働者の皮をかぶった資本家である。世界的な例でいえば、アメリカのAFL・CIOがその典型であり、彼らはベトナム侵略戦争からの利益を高額賃金をもってうけとり、それに加担し続けてきたのである。大橋氏によると、AFL・CIOとの結合、あるいは南ベトナムの反動的労働運動との結合を日本の労働組合官僚が進めているという。ここで戦後労働組合運動をみておこう。日本の労働組合は第二次大戦前に全て解体され、その上で戦後その政治経済危機のなかで、急激に誕生し成長してきたという特殊性がある。そして、それが、戦後の革命的昂揚を支え、領導してきたとい

える。しかし、一九四七年の二・一ゼネストの敗北、四九年の下山、三鷹、松川事件によるフレーム・アップ攻勢、アメリカの朝鮮侵略・反革命戦争勃発の一九五〇年から五一年にかけての「レッド・パージ」攻勢で一応戦後の革命的昂揚期を収束させてきた「全労連」（全国労働組合連絡会議）が解体させられ一方で、右派たる「民同派」が「総評」（日本労働組合総評議会）として総結集したのもこの年である。それは総同盟・全日労三九七万人を結集させ、組織労働者の約三分の二を占める大同団結であった。つまり、戦後革命期の敗北の上に「総評」は始まったのである。ところが、それは丁度アメリカの朝鮮侵略戦争の開始でもあり、対日政策の転換の時でもあった。そのような国際的政治関係から五二年頃から、いわゆる「ニワトリからアヒルへ」として「左傾化」がおこり、それによって、右派は独自組織形式へと進み、五四年に「全労会議」（八四万人）を形成し、後に「同盟」をつくっていく。さて、現在、再び労働組合戦線の右翼的再編が盛んである。六〇年代の日本帝国主義の「高度成長」は悪性膨脹に支えられて、量的には成長を示してきた「同盟」が中心となって「総評」内の右派部分を切り崩し、あわよくば総評そのものを包摂しようとしている。七〇年一月には「全民懇」（全国主要民間労組委員長懇談会）を組織し、七一年二月には拡大世話会をつくり、右派系はそのリーダーシップをとろうとしており、現実的には今年の一二月二八日、全国民労協（地方民労協全国連絡協議会）に四九七万

三千人を組織した。これは名目は現在の官公労主体の労働運動を民間労組中心の労働運動にかえていこうというのだが、しかし、これは今、まがりなりにもよく聞いている官公労に対する民間労組を右翼的に再編する以外の何者でもありえない。このような労働組合上部団体の動きに対して労働組合内部の動きは後に見るがここでは一般的にこの右翼的再編がアメリカのAFL・CIO型の労働運動への再編であるという指摘だけにとどめておこう。更にAFL・CIOはベトナム侵略戦争以降の好況の波で急速に組織としてのびていったということを付記しておく。

(3) 労働者中層

④ この層は主に、工業プロレタリアートによって構成されており、日本社会主義革命戦争の主力として存在する。工業プロレタリアートは六五年現在で一、一三三万人を数え、労働者階級全体の四一％に及ぶ最近の大きな特徴は、大企業に若年労働者が大量吸引されていることである。雇用者五百人以上の大企業への入職率は中卒で六三年に二七・一％だったのが六七年には三三・一％へ、高卒はやはり六三年に三二・六％だったのが六七年には三九・三％へと高まっている。又、総合的に見ても八表一九Vを見ればわかるように若年層は大企業に集中し、中高年層は中小企業に滞留している。二〇才から二四才で三百人以上は六五年には四八・九％だったが、六八年には表にあるように五〇・九％となっている。四〇才から五四才で三百人以上の企業に勤めているのは六五年で三九・四％、六八年で三八

<表-9> 製造業雇用者の年齢別・規模別構成(1968年)

(実数 単位:千人)

	総数	15~19歳	20~24	25~29	30~34	35~39	40~54	55~64	65~
総数	10,750	1,542 (100%)	2,048	1,603	1,352	1,164	2,275	609	157
1~9人	1,143	6.0	8.1	10.7	11.9	12.5	12.0	15.9	22.9
10~29	1,551	8.9	10.7	12.9	15.6	16.7	17.4	23.8	26.8
30~99	1,884	14.7	15.7	16.0	18.2	18.8	18.9	24.1	25.5
100~299	1,451	16.4	14.4	11.9	12.3	13.1	12.7	14.4	12.7
300~999	1,372	17.0	14.7	12.7	12.2	11.0	10.8	9.0	1.6
1,000~	3,317	37.0	36.2	35.6	29.7	27.6	27.7	12.2	5.7
官公	22	0.1	0.1	0.1	0.1	0.3	0.4	0.3	0

資料:前掲書P158 『就業構造基本調査』

\*製造業に従事するプロレタリアートは1968年で全労働者の35.3%を占め1,000万人強であるのでその例をとってみた。

・五%と減少、反対に中小企業に勤める割合は多くなっている。このような現象は近年の急激な設備投資による「技術革新」が適応力の強い若年労働力を吸収しやすいこと。それに年功序列型の賃金制度では中高年を雇うよりも大量に若年層を吸収した方がよく、それなりに資金力のある大企業に若年層が吸収されそれに對し、中高年層が「配転」「降職」「解雇」の形で切り捨てられることである。私が警察署に留置された時、食事を運んだり、雑務をやっている四〇才そこそこのおじさんがいたが、その人に聞くと旋盤工で腕がよかったのだが、中企業で整理されるとき別の会社に移るかやめるか考えたそうだ。結局、いい仕事はできても仕事の量では若い者にかなわんから、ということではやめて警察に勤めているということだった。大企業では尙更この傾向は強いだろうし、それがこのようなおじさんたちを大企業の社外工、臨時か、中小零細企業への転落か、あるいは転業ということにさせているに違いない。しかし又、大企業の若年層といえども安定している訳ではなく、その絶対的低賃金は大量の離職者を生んでいる。六八年の統計で男子二〇才―二四才の離職率は五百人以上の企業でも一六・四%に及ぶ。しかし、又、この離職率は中小企業ほど高いのも事実であるが(男子二〇才―二四才で雇用者数一〇〇―四九九人の企業二一・〇%、三〇―九九人は二六・五%、五二―九人は三三・九%にもなる)、ここで一応労働者中層の位置を占める、公務員をみてみると、七〇年で三〇四万人(軍人・警官除き)であり、全労働者の約一割を占める。

「アト依拠論」の再検討でもある。「現代の眼五月号」に「右傾化で難破した海員組合」というレポートを高橋明氏がのせている。ちよつとギクシヤクするが先ず、その内容を逐語的にあつていくことにする。

「昨年夏の海員組合(一六万人)における南波佐間豊組合長以下三役の『交代劇』は産別ユニオンの体制にあぐらをかいて何ら恥じることない『ダラ幹』どもの心胆を大いに寒からしめた」

「これは、組合本部が昨年の春闘で外国航路部門の賃上げ交渉をスト権確立の一般投票を行わずに本人本給一%プラス一、五〇〇円(航海日当なども項目ふくめて八、九〇〇円アップ)で妥結したことに端を発している」

「(今年)一月三日、このままでは少数職能者の定員が守れないとして船舶通信士が同組合を脱退して新労組(船舶通信士労働組合・全通信士三、九〇〇人のうち二、二〇〇人を組織)結成、わが国唯一の産業別単一組織海員ユニオンはついにその一角にひび割れが生じた」

「一般に海上における労働条件の一切は陸上に比べてかなりの遅れをとっているといわれている。船員の労働問題の窓口は労働省ではなく、運輸省である。その法的根拠は船長の判断一つでどのようにも労働時間を延長もしくは連続させることができる(船員法七〇条)とする前近代的尻尾をひきずった「船員法」である」

「労働者の保護法も「船員保険法」という総合保険一括さ

④ 戦後の革命的昂揚の時期に一九四七年の二・一ゼネストや三月攻勢あるいは一九四八年の一月攻勢らを主導したのは官公庁の公務員であり、それに対するブルジョア側の弾圧も常に官公労の革命的、先進的部分に集中していた。それは、四八年七月のマッカーサー書簡で官公吏の争議権・団体交渉権を奪えという指示があつて以来、政令二〇一号発令と公務員法の改悪となり、争議権はハク奪されたのだ。しかし、それでも日本においては、一九五四年日鋼室蘭や一九六〇年三井三池ら大企業プロが敗北して以降は官公労は民間大企業プロが右翼的に再編されるのに対し、労働運動の主導的役割を果たしてきた。今年一月末につくられた同盟系の全国民労協はこの官公労主導の労働運動を民間側から組織的に右翼的に再編しようとするものである。又、最近公明党が従来の都市自営業者層・ルンプロ層の組織基盤から、この右翼的再編に便乗した形で労働組合に基盤をもととして結成している。公明は数年前「民労」(民主労働協議会)を独自に結成して、労働組合運動の第三勢力たらんとし、総評、同盟双方からふくらだたきにあつて結局解散し失敗したという過去があるという。今後も独自組織を形成することはないだろうが、今年のメーデーに初参加したような形で社・共・民社との政党間の共闘を組んでその勢力をのばそうとするだろう。

⑤ ところで、一般的な上部団体の動きなんぞみてもプロレタリアートの動向はつかめないで、ここで具体的な例をあげてその動向をさぐってみよう。それは我々の「下層プロレタリ

れている」

「高度成長の政策がスタートした一九六〇年以降、海運界には船内就労体制を無視した技術革新の波がおしよせた。(巨大タンカーやコンテナ船へ、あるいは機関の無人化を可能とするMゼロボラスターコンピュータを就航)そのひずみが「ぼりはあ丸」や「かりぼるにあ丸」の沈没という事故を生み、多くの船員犠牲者を出した」

(船舶通信士労働組合結成のいきさつについて)「今から五年前、電波法、船舶職員法の改悪にもなつて船主側が通信士の三名乗務を一名乗務に改めたいと提案したことにさかのぼる」

「現在は闘争の結果二名である」

「三月一〇日現在、大手中核六社の通信士はまだ殆んどこの新労組に未加入だが、すでに全通信士の六割にたつている」

「日共は大義名分を説く……しかし、船員部員協会や船舶機関士協会には「俺たちもこの際海員組合を脱退して新労組をつくって」という声もぼつぼつあがっている」

「日共活動家は産業別統一組織を割るなという党の方針をこの場合も適用……民社路線執行部を日共路線とがドッキング

「異域同舟」

「人命無視の合理化地獄……昼夜を問わず、洋上を航行する船舶の「耳」をうけもつ船舶無線は文字通り「板子一枚下は地獄」という生命にかかわっている」

「日本近海における小型船(通信士一名)の当直時間は〇九時―一三時、一六時―一八時、一九時―二二時の計八時間、そ



れ以外の時間に附近を航行する船舶に海難が発生した場合はオート・アラーム(自動警報機)が通信士をたきおこすことになっている。外航における通信士定員の削減も実はこのオートアラーム導入を理由としているのだが、それによって海難が救われたことはいたってすくない。…戦前からあったオートアラームは技術的にちっとも進歩していず、空線や混線の場合も作動する」

「国鉄の機関士廃止にしても船舶通信士の定員削減にしても交通機関の合理化は常に人命の安全という課題と裏はらである…最近の船には殆んど船医はのっていない。船員の中の「衛生管理者」によって補なわれている」

「船内作業そのものにたずさわられる甲板部や機関部ではもっと深刻だ。…重量貨物船運搬(約七〇〇〇トン)では操舵手は五人が常識だ。しかし、自動操舵装置その他の合理化で三人に削られた。…大洋航海中ならそれでもよいが河川では自動にまかせられない」

「海員組合を支えている民社党への支持はわずか平均一七%二〇才未満では五%、二〇〜二五才では七%、二六才から三〇才では一二%、三一才から三五才でも一六%」

「五年前組合幹部のリコール運動をおこし、組合から一年間の権利停止処分をうけていた部員協会の活動家堀次清治氏の勝訴」

「一月一七日からの同盟大会で、滝田は辞任挨拶で「同盟の組織労働者はこの一年に五・五%、約一二万人増加し、わが国

せてがんばっているが、それも、下からのつきあげによってなされている。私は、我々が主張していた「下層プロレタリアーに依拠論」が我々自身の「建党建軍遊撃戦」に合せて都合よく解釈した恣意的な主張だったのでないかと考える。我々は自身に似せてプロレタリアートを見ていたのではなからうか? 国労・動労の労働者がアメリカの北ベトナム封鎖に対して、あるいは「沖繩返還」の欺瞞性に対して順法闘争をやるということもすばらしいことだ。何故、我々の到達した最高の地平たる暨井沢銃撃戦に対して、そのような連帯行動がとられなかったのか、それに我々は答えねばならないと思う。穂積満君が死んだ同志進藤三郎君について私あてに手紙をかいてくれたが、そこで同志進藤は、こういったそうだ。「ドヤの労働者はナマケ者ばかりだ。いくらドヤが資本主義の矛盾の集中的表われだといっても奴等はチュウウさえ飲める金さえあれば文句はないんだ。もっと基幹産業の労働者を把まなくては駄目だ。赤軍もルンプロばかり目をつけていたら何も出来ない。労働者を沢山味方にしなければ武装闘争は出来ない」と。釜ヶ崎に見るようにはドヤの労働者も組織化されてきているといえる。しかし、やはり、工業プロレタリアートに依拠し、それを包括し、組織していく展望を具体的にたなければ革命の前進はない。人民遊撃戦が真に人民革命戦争(=社会主義革命戦争)として発展していくためには、どうしてもその本来の組織性・規律性をもつ工業プロレタリアートに依拠する以外にない。私は前哨的ゲリラ戦の段階では中小企業プロ、下層プロに依拠す

労働運動史上かつてない大きな飛躍をした」とぶちあげた」

「(今は)『脱政党』だけでなく、『脱労働組合化』にある」  
以上の長い引用から以下のがわかる。①戦後一貫して労働運動の最右翼として常に労働運動の前進を妨げてきた海員組合が内部からの下部労働者からのつきあげで解体の危機にあること(今年春闘で大方ががんばっているようだが)。②それはブルジョア側からの「技術革新」「合理化」攻勢労働強化に対する生命そのものに關わる闘いとしてあること(船医がないなんて考えられるだろうか?)。③民社同様、日共もただ形式的に産別単一労働組合を守るといって右翼の対応しきっていないこと。④同盟の大黒柱の一つたる海員組合内の民社支持率は非常に低いこと(同盟が総評に対して、すでに組織組合員数では上まっているのに総選挙での相変らずの低迷は実は同盟が水ぶくれ組織であり、一部の上部労働組合官僚の右傾化の成長の反映でしかないということに帰因しているといえる)。⑤今まで日本の労働運動の弱さとして企業別組合であることをあげ、産別労働組合を組織することが労働運動の発展につながるのと多くの労働運動指導者が言ってきたが、産別組合必ずしも革命的ではなく、逆に現在のには桎梏になっていること。⑥これが最も重要なのだが、この例で見る限り、労働者中層は潜在的エネルギーを内包しており、細流ではあれ、労働官僚、社民、日共らの指導をのりこえんとしていること。

⑦海員組合は最近中国へ行ったりして旧来のイメージが変わりつつあるが、そして、今年の春闘は戦術をエスカレートする以外ない。又、それは可能である。そして、それが一つの蜂起的闘いを契機として革命戦争へと飛躍しなければならぬ。その時から、基幹プロレタリアートの大々的な組織化が可能となるだろうと教えてきた。しかし、それは再考されねばならない。ところで、我々は海員組合内部に見られる革命的傾向と同時にプロレタリアート中層の右翼的傾向という現実も知らねばならない。以下は一月八日付の読売朝刊のハチッソ五井工場「抗議」を袋だたきVという記事である。ハ水俣病補償の自主交渉をすすめている新認定患者の川本輝夫さんと「水俣病を告発する会」のメンバー一五人は七日午前一時三十分すぎチッソ系列会社の市原市五井海岸五、チッソ石油化学五井工場を訪れ同工場労働組(夏目英夫委員長)に会見を申し入れた。川本さんらは一月二四日に東京丸の内チッソ本社ですわりこみ中の患者や「告発する会」の会員三〇人がチッソ従業員約二〇〇〇人の手で排除された際、排除側の中に同工場の労働組合員が参加していた事実を重視、この日抗議のため訪れた。これに対し組合側は夏目委員長が「会見の条件が違う」と本社との会議出張、副委員長らの組合幹部も会見に応じなかった。それどころか、会社側は午後三時前正門わきの守衛室にいた川本さんらを排除するため突然約二〇〇人の若手従業員を動員して実力行使したVこのように労働組合がブルジョア側の先兵の役割を果たすところもある。しかし、水俣病公害病の告発のねばり強い闘いがこの右傾化を切り崩していく可能性をもっていることも又、確かであろう。

(4) 労働者下層

④ 労働者下層は、具体的には中小零細企業労働者、大企業の社外工、臨時工、日雇労働者、季節労働者、婦人労働者その他である。公害や交通事故で生活苦においやられている人々や在日外国人労働者も最下層を形成しているか、政治的抑圧をうけている。そうしていくと八表一八Vの下層一、三〇〇万人よりも数は多くなるだろう。先ず中小零細企業労働者を見ていこう。従業員規模三〇〇人未満の労働者は六二年一、二六五万人（五三・三％）から六八年一、六六一万人（五五・〇％）と相対的にも絶対的にも増加している。これは大橋氏によれば「この中小・零細企業労働者の集積は、独占企業の中小企業支配の拡がりを示すものであり、独占企業が下請け中小企業の労働者を低賃金と劣悪な労働条件を利用して間接的に収奪する関係がいつそう広範囲に行なわれていることにはほかならない」（前掲書P一六七）。又、八表一九Vからもわかるように中高年層の比重が高まっている。それを内容的に見ると「三〇人から九九人規模において新規卒者の比重が低下（一九五九年二八％、六七年二一％）した反面、女子未就業者よりの入職（五九年一三％、六七年二二％）を既就業者よりの転職、とくに農林・水産業（一九五九年三％、六七年八％）、製造・鉱・建設業（一九五九年二八％、六七年三六％）、の比重が増大している」（前掲書P一六八）。

この一つ一つの数字が非常に興味深いものであるが、ここではつっこまないのでおこり。さて、賃金格差を八表一九Vで見

ておこり。ここで明確にわかる、①中小零細企業の中高年層の賃金が極端に低いこと。②一時期若年労働者の中小零細企業の賃金は大企業を上回ったが、最近では低下し、格差がついていること。総じて企業規模別の賃金格差は縮まるどころか、広がっているということがいえる。このことははっきりと心にとめておかねばなりません。

③ 次に大企業の臨時工・社外工を見よう。これは大橋氏の文章をそのまま引用した方がわかりやすいのでそうしよう。

「一九五五年以降、大企業において設備投資Ⅱ「合理化」がすすめられるにつれて、大企業の臨時工は激増した。「労働異動調査」によれば「臨時・日雇い名義」の常用労働者（定義は「臨時または日雇労働者で、前二カ月の各月において一八日以上または前六カ月において通算して六〇日以上雇用されているもの」）であり、現実の臨時工の一部分しかとらえられないものの比率は五年以後に増加し、一九六〇年には製造業の大企業（五〇人以上）労働者のうち九・二％、大企業への新規入職者のうち四八％を占めるにいたった。……大企業における臨時工雇用のねらいは、第一に、臨時工の極端な低賃金（製造業常用工の賃金一〇〇に対し臨時日雇工の賃金は四九・六二）を利用して大きな超過利潤をあげることであり、第二に、臨時工を景気変動に応じていつでも整理できる自由な調節弁として利用することであり、第三に臨時工と本工間に差別、分裂をつくりだし、本工登用をめぐって臨時工間に競争を生みだし労働者の団結をさまたげることによって、低賃金構造の温存を

<表-10> 年令別にみた規模間賃金格差の推移  
(産業計 男子労働者・旧小・新中卒)

(1,000人以上=100)

区分	年	1,000人以上	100~999人	10~99人	区分	年	1,000人以上	100~999人	10~99人
~17才	1966	100	99	101	30~34才	1966	100	99	92
	69	100	94	95		69	100	96	89
18~19才	66	100	100	104	35~39才	66	100	92	81
	69	100	95	92		69	100	93	88
20~24才	66	100	109	109	40~49才	66	100	85	74
	69	100	99	97		69	100	86	75
25~29才	66	100	107	103	50~59才	66	100	76	65
	69	100	99	95		69	100	76	67

資料：『賃金構造基本統計』を簡略化した 前掲書P169参照

はかることであると思われる。六〇年以後……臨時工比率は全体としてやや低下している。六八年には製造業大企業（五〇人以上）において入職者の三五％（約二〇万人）。他方では、臨時工の年令構成はいちじるしく中高年層にかたよってきている。たとえば「臨時日雇い名義」の者のうち、二四才以下の若年層の比率は、六三年五三％に対し六六年三九％であり、三〇才以上の中高年層の比率は六三年二二％に対し、六六年四七％となっている。……社外工（あるいは下請工）は大企業構内の労働に従事しながら、極度の低賃金と長時間労働、就業の不安定性において、臨時工以下の労働条件におかれている。製造業における社外工の比率は化学・鉄鋼部門において高く、一九六二年以来しだいに上昇する傾向にある」（前掲書P一七一〜P一七二）

こうして、いずれにせよ、停滞的、流動的過剰労働人口のプールであるといえる。さて、ここでつけ加えておけば、朝鮮戦争を契機として、進駐軍むけ修理工場における日雇い労働者と「臨時工」が急増した。しかし、特需関係の企業以外は逆に不況で各地で日雇い労働者による「仕事をよこせ」という職安闘争がくり上げられ、警察予備隊（のちの自衛隊）が出動して衝突していた。これは結局組織されずに終わったが、山谷や釜が崎にはこのような伝統があることを忘れてはいけぬ。さらにこの闘い参加者の約三割は婦人（主婦）だったという。

⑤ さて、その婦人についてだが、六八年で九四七万人（全労働者中三二・三％）で、漸増の傾向にある。年令的には一五

才から二四才、四〇才から五四才の間がとびきり多く、婦人労働者の特徴を示している。

△表一—Vは大橋氏は職員・生産労働者間の賃金格差を明らかにするために引用した表だが、実はこれと同時に男女の労働者の賃金格差をはっきり表わしている。要するに婦人労働者は男女労働者の賃金の五〇%にもみえないのである。婦人労働者は臨時工・社外工と同様、過剰労働人口の一翼として差別され強度の搾取と収奪をうけている。更に中小零細企業への入

職率も男子に比べて高い。そして、結婚し、妊娠すると職場から追い出されるのが当り前のようになっている。「主婦業に専念し、夫に最善の愛をつくす」ということが、実は（封建的遺制をうけつぎ）このような婦人への差別的構造から生まれた情緒の一つであることがわかる。更に婦人はパート・タイマー・内職という形の労働をもって強度の搾取と収奪をうける。最近いわゆるウーマン・リブ運動がさかんであるが、このような婦

<表-11> 製造業 職員・生産労働者 男女の賃金格差（規模計）

	職員		生産的労働者	
	男	女	男	女
1960	28,766円	11,327円	19,625円	8,630円
1965	68,700円	32,100円	54,400円	25,900円

資料：『賃金構造基本統計』 前掲書P162

人労働者の実態との結合がのぞまれるのではないだろうか？

(三) ま と め

以上の分析のなかで私の主張したかったことをまとめておこう。まず、戦前の階級分析では一九二〇年を境に階級闘争の主軸がブルジョアジーとプロレタリアートになったこと。そのことから戦前の日共の分析と方針が誤っていたということを充分ではあれ証明し、今もなお日共に残っているその後遺症を批判することが眼目、現代日本の階級分析に入って支配階級の項では日本帝国主義の経済的には「悪性膨脹」ではあれ膨脹期にあり他帝国主義に比べて余裕があることを指摘した。しかし戦略的には政治基盤が脆弱である。（これは世界的規模の階級攻防の分析によらねばでてこないで、ここでは分析しなかつたが）このこと総合的に把握しておかないといずれにせよ「危機論」に陥いってしまうだろう。農民問題では中・下層農民の急激な没落、都市への流出期にある現在、この期に對し有効に對処しないならば、一部富農だけの農業へと転化していくだろうということが主張だった。プロレタリアートの項では従来の我々の「下層プロレタリアート依拠論」批判が中心である。下層プロレタリアートは確かに戦闘的であり、反戦青年委員会を担ってきたのは官公労の一部青年労働者と中小零細企業のプロレタリアートだった。だが、それを固定化して「基幹プロレタリアートの組織化は武装蜂起以降でしかできない」とするのは生しいだろうか。私は正しくないと思っている。海員組合の例のように

に「同盟」内にさえ労働者内の分代・革命化・萌芽がある。我々は現実から出発しなければならぬ。願望から理想から出発し、プロレタリアートに枠をはめ、自分の姿にさせてプロレタ

リアートをネット造してはならない。「松のことは松に語らせよ」であってプロレタリアート自身をして自ら語るように共産主義者の指導はなければならぬ。人民遊撃戦がプロレタリアートとの外的結合ではなく内的結合として、即ち労働運動の高度の一つの形態として展開されていくようにさせねばならない。それは一つの形態、戦術にすぎず、それ以上のものではない。問題はそのような運動のなかでいかにプロレタリアート人民が団結するか、そして、武装し、自らの軍隊を築きあげていくかにある。人民遊撃戦が目的では決してないのだ。我々は一九三〇年代のドイツの悲劇を改めて想起しよう。市民は失業の波のなかで自己保身にきゅうきゅうとする基幹プロレタリアートに依拠し、加えて社会ファシズム攻撃で身動きがとれなかった。ナチ

スと共産党は失業者の破壊性に依拠し、その奪い合いを演じた。ブルジョアジーの影の軍隊の支持により、政治的にも軍事的にも組織的にもナチスは勝った。それは没落する都市自営業やルンプロを奪い合うという構造になったこと自体が問題なのである。そのことは別のところで分析しよう。ただ、経済的政治的危機になったときはなつたときでブルジョアジーは自分なりにその危機をとらえるということ。その時、我々の組織的階級的基盤をプロレタリアートにおかずにいたら敗北は必至であるということである。共産主義政党内に導びかれたプロレタリアート

の組織された力こそがそれをのりきるのであるということなのである。

これまで見てきたように、ブルジョアジーは非常にたくみにプロレタリアートを組織している。あらゆる人民内部対立と差別を利用して、大企業独占資本は青年プロレタリアートの若く低賃金を労働力を吸収し、中高年層を中小零細企業に放出し、その周囲に臨時工・社外工・日雇を組織し、あるいは婦人を低賃金で使い、パート・内職と、がむしゃらに賃金労働に組織している。多くの青年プロレタリアートは大企業に組織されているのである。

以上の階級分析はつきはぎだらけで、不十分なところが多くある。でも、これは、初めの一步なのである。粗暴であってもがっちりしていた方が最初はいいものである。ここにはいわずに「方針」はない。その意味で最後の一発のパンチはない。ウォーミング・アップである。だが焦せる必要はない。じっくり構えよう。階級分析は全ての礎であるけど、それですぐに方針（路線が）決まるわけではないし、レーニンがしつこくいつているように、世界的規模の階級攻防と各々の国家権力の動向をしっかりと分析しなければならぬし、そうしなければ科学的戦術は導びくことはできないのだ。私が意図したことは日本の階級構成とその攻防の全局を把握しようというのである。人民の勝利のために、日本社会主義革命戦争の勝利のために。

## 第三章 「I」銃よ！ おまえは誰のために

### 「処刑問題」と「銃撃戦」

私の最も敬愛する赤軍の指導的同志森、そして最愛なる戦友同志坂東ら連合赤軍同志たちにこの一文を先ず捧げる。人々がいまわしい言葉であなたたちを愚弄し、あるいは「反革命裏切り者」とわめいている。だが、私は同志たちが人民革命の勝利のために闘っていたことを知っているし、又、誤ちはその為の起ったことだと信じている。主観的意図と客観的現実、結果の残酷な乖離を我々は知らねばならなかった。だが、だからといってあなたたち同志の頭に反革命のどんがり帽子をかぶせ、自ら「正気」と羽織り、「正義」革命」ときざまれた等で背後から同志たちの頭をかちわることが正しいわけではけつてない。我々に超階級的な愛はない。あるのは階級的な愛である。階級闘争において超階級的な真理もない。階級的な真理のみである。私は同志たちに無上の同志愛をもって語ろう。どうか生き抜いてほしいし、革命のため闘い抜いてほしいと願う。しかし、生をブタ共に懇願するようなみっともない真似はするな。「お前たちに私を処する権利はない。誤ちあらば人民のみが私を処するだろう。やりたければやればよいのだ。そして、ステンカラージンの戦いを指導したステパン・ラージンの如く、人民に対し「プロスチーチェ」とい

えばよいのだ。「プロスチーチェ」とはロシア語で「さようなら」という意味に加えて「許されよ」という意味があるという。

#### 1 序

軽井沢銃撃戦は我々の到達した最高の地帯である。だがそれは現実には多くの同志の「処刑」という闘い（誤ちであれなんであれ、それは闘いなのである）の上に築かれたものである。それなら「処刑」という闘いを経なければ軽井沢銃撃戦の地帯に到達しえなかつたらうか？ 私はそうは思わない。何故なら、報ぜられた「処刑」の性質からして「処刑」によって共産主義的政治が豊かになつたり、組織的団結が強まつたり、あるいは軍事的に成長したとは考えられないからである。一時的に外見上そう見えたとしても、それは一時的な現象でしかないと考えるからである。つまり「処刑」がおこらなかつたならば、銃撃戦はより高い地帯に到達しただらうと思う。「処刑」と軽井沢銃撃戦を表裏一体、不可分のものとして把えるのみで「処刑」があつたから軽井沢銃撃戦も間違いだつたとする早計な結論は批判されねばならない。確かに、この二つの闘いの歴史の「栄光と悲惨」を「正と負」を象

徴するものである。そして、それは敵との攻防状況だけではなく、我々の革命の戦略、路線から考えていかなねばならないし、その意味では一体的に把えていかなねばならないものだ。だが不可分なもの、また可分である。「処刑」に関するブタ共の醜悪、愚劣なマスコミの報道に恐れおののき、無節操な自己批判（自分懺悔と読め）にあけくれる小官僚どもは早く戦線を立ち去ればよいのだ。「自分こそが正しかった。」と「連合赤軍」の同志幹部を必死になつて区別し、自分の古ぼけた物差しで他人を裁断しようとするものは電機屋にでもなればよい。自分の過去の言動をカセットテープにでもとって人々におくるに都合よいだろう。

私は軽井沢銃撃戦と「処刑」に対して混然一体に把えることに反対する。それはなにより状況そのものの差異があつた。軽井沢銃撃戦では打倒すべき真の敵がいた。傍に一人の人民もいた。

私は清算主義と教条主義に反対する。今一番危険なのは清算主義である。そのためにこの問題に関して一つ一つ分析していこう。問題の核心は分析のなかにこそある。

#### 2 朝鮮革命戦争のなかの悲劇

「処刑」問題からみていこう。「処刑」は銃撃戦の前におきてゐることなのである。「処刑」問題が当面解決しなければならぬ重要な課題であることは確かにその通りだが、そのことによつて銃撃戦を故意に軽視ないし無視する傾向に対して喚起する意味で銃撃戦については後にひかえさせよう。

先ず一つの歴史的教訓をあげよう。中国東北部で展開されてい

た朝鮮人民の革命戦争の過程なのだが、一九三〇年代、反「民生団」闘争が展開された。それは、元戦士のスパイが刑務所を脱走してきたとして革命戦争の戦列におくりこまれ、組織的に高い地位におさまつた。そして非公然に組織人民内部に民主主義の皮をかぶつた反革命組織「民生団」を組織し、一方、公然とは革命的戦士人民に反革命「民生団」員のレッテルをはり「人民裁判」を無差別にやつた。それは臭酸きわまりないものだった。（具体的には『朝鮮人民の自由と解放』八未来社刊）や『金日成伝』一八雄山閣刊）を読めばよいだろう。）それが一九三五年初め頃、そのスパイが摘発され、（そのスパイは肅清の先頭に立っていた肅反工作委員会委員長「栄一」だったのだが）直接にはその問題は終つたのだが、一度芽生えた相互不信と疑心暗鬼はとどまるどころを知らず、その後も「民生団」摘発のために「肅反工作」は続けられ、嫌疑者に対する拷問と「自首」運動が展開され、その工作員たちは自分のその成果を競いあうという有様だった。このような状況に対して、北満州遠征から帰つたばかりの金日成將軍は全く正しく対処した。例えば、コミンテルン第七回大会の反ファシズム人民戦線術の伝達をうけ、この決定にもつき新たな第六師団を編成した時である。將軍は第四師団からそれを編成しようとしたが、第四師団の百余名のものは民生団嫌疑者で全く使ひものにならず、頭痛のタネであると聞かされる。そこで將軍はその人々の所へ行き、三日間ぶつ通しの会議を開き、その人々の主張を充分に聞き、その結果、嫌疑の罪状をしるす書類をその人々の前で焼き捨てたのだつた。將軍は言った「『資料』づつみより

も、同志たち自身が革命の道でたかとうというその決定を信ずる」  
と。その人々は後に最も革命的に英雄的に献身的に戦い抜く真紅  
の共産主義兵士に成長したのである。

私はここで「栄一」のようなスパイがいたのではと「連合赤軍」  
の幹部同志を疑がっている訳ではない。この例のようにスパイが  
おくりこまれ、それを契機として、とめどない内部粛清が起  
こる場合もあれば他の契機をもって内部粛清がおこなわれる場合  
もある。ここで言いたいのは、そのような契機がどうのこうのと  
いうことではない。ただ、今回我々内部で起った「処刑」のよう  
な悲劇は革命の歴史のなかで数多くあった。その一例を私はあげ  
てみたのである。それらは各々個別の状況と歴史をもってあり、  
その意味からは「粛清」の性質も違う。だが、どの例にも共通し  
ているものはその矛盾の多くは人民内部の矛盾であり、その政治  
指導者の役割が決定的な重要性をしめていることである。そして、  
何らかの危機が先鋭化している状況が事前にあること、この例で  
も同様である。一九三〇年前半、都市部の中国共産党は壊滅的打  
撃をうけており、唯一農村山岳に根拠地を形成していた毛沢東同  
志らの部隊が組織的に存在し、発展していた。その状況が中国東  
北部にまで及んでいた。それが、東北部に多い朝鮮人部隊と中国  
人党员との対立となったりして、そこにスパイが入りメチャ  
クチャになったのだ。金日成將軍らによる適切で緻密な指導がな  
かったら、粛清によって彼らは自壊していったであろう。だが革  
命の歴史にこのような悲劇があるからといって、革命にとってこ  
のような悲劇は不可避とするならそれは転倒である。革命の過程

れは同志たち自身が明らかにするだろう。さて、我々は過去軍隊  
内から多くの脱走者を出している。その中には密告者になった者  
や、権力に屈した者に対しては追跡もせず、自己批判すれば隊へ  
の復帰を認め、あるいは促してきたが、密告者に対してはそれ相  
応の処罪を課すべきだと考えていた。(そのような愛味な考えが  
今回の事態を生んだ原因をなしたと私は思う。)だがやはり、脱  
落からの密告者と隊内にまぎれこんだスパイとは明確に区別し、  
その個別性を考慮して共産主義的政治・組織基準をもって処罪は  
許すべきであろう。これらはその基準を確立して具体的に運用す  
れば問題は片づく。だが、今我々の課題はそこにはない。根源  
にせまることである。

七一年二月一七日、偉大な銃強奪作戦を革命左派の人民革命軍  
は展開し、自ら銃武装した地下革命の軍隊に高めあげた。この闘  
いが偉大な闘いであればある程、敵と味方双方の攻防の転換を激  
しく生じさせた。日本に於いて革命派が銃武装するということは  
即、革命、反革命の戦争状況がその先端に形成されることを意味  
する。警察権力はこの革命、反革命の戦争状況を市民社会内の陣  
地を利用して、反革命包囲網に築くことによって革命派を追いつ  
めようとする。これは実際、二・一七直後からの首都圏常時検問  
体制によって、あるいは三月上旬の全国一斉ガサ入れ検問によっ  
て展開された。これに対して、我々赤軍派中央軍はM作戦を小手  
調べとする前哨的ゲリラ戦武装攻勢によって、二・一七銃強奪作  
戦を実践的にうけつこうとし、革命左派の人民革命派は、銃を軸  
とする建軍遊撃戦の方針を確立した。敵、味方攻防はそのよう

において、危機は不可避なものである。人民内部の矛盾も不可避  
である。党派闘争も党内闘争も不可避である。それらは不可避で  
あるばかりか、逆に、党と人民に生命を与える観望すべきものでさえある。  
これに対して、共産主義的政治、思想を生みだして、正しい処理  
と発展を勝ちとるなら、悲劇ではなく偉大な革命劇を演ずること  
ができるのだ。

### 3 「処刑」は闘いであった―「処刑」の経過的分析

「処刑」は否定的なものであれ一つの闘いである。「処刑」に  
対して多くの人々は、その結果が「誤り」であつたことをのみ見  
て、その誤りの重大性に恐れおののき、これも一つの闘いであつ  
たということを見失なっている。又、少ないが一部の人はその  
時の状況の危機からのみ把えて、ブルジョア法にあるような「緊  
急避難」的発想をもって「仕方がなかった」として、前とは逆の  
方から、これが一つの闘いであつたことを見過している。ではど  
んな闘いだったのか？これを人民内部の矛盾として通り一遍に説  
明するだけでは不十分であろう。

先ず、去年の八月に、革命左派の人民革命の元兵士が追跡殺害  
されたと伝えられている。我々には詳しいことはわからない。た  
だこの二名の元兵士が脱走したということは確かのようにだ。おそ  
らく幹部の同志たちは、この二名の兵士が、単に脱走だけでなく  
密告者となる可能性が大きいとみて追跡したと思える。しかし、  
幹部の同志たちが二名を密告者だと絶対的に確信していたとは思  
えない。(この追跡殺害に関しては不可解なことが多くある。そ

な闘いを要請していた。それは全く新しい地平(それは赤軍にと  
って大菩薩で踏み出しえなかったところの、また、ハイジャック「F」  
で拡散したところのもの)だった。銃を握り、それによって革命  
戦争を戦い抜いていく政治と思想と組織と軍事と規律が戦後の革  
命の歴史のなかで初めて、実践的・現実に問われたのである。

これは簡潔に言えばプロレタリア独裁の実体を組織する端緒をつ  
かんだことを意味する。このプロレタリア独裁の意味を矮小化し  
て把えてはならない。敵味方の攻防のみから把えて、銃を握るこ  
とを単に敵を倒すことに矮小化してはならない。敵を倒すのも、  
帝国主義を打倒するのも、それはプロレタリア独裁の権力を打ち  
立てるための一つの任務であり、一過程にすぎない。更にいうな  
ら、「社会主義、即ち階級をなくすこと」(「プロレタリア独裁  
期の政治と経済」レーニン)の手段として、一過程としてプロレ  
タリア独裁があるにすぎない。即ち銃を握ったということは、敵  
をうち倒す有効な武器を手にしたという外的な成長を契機として、  
人民内部に「プロレタリア人民の革命の軍隊」と、それを指導す  
る前衛党を建設する端緒をつかんだということなのだ。

だが、現実には冷徹である。六・一七の大衆の街頭実力闘争への  
武装遊撃テロの前進を契機として、七・一五連合赤軍が結成され  
た直後、二つの危機を連合赤軍はむかえた。一つは七・二三米子  
M作戦であり、一つは革命左派内の党・隊内矛盾の発現である。  
(私を知ったのは最近のことなのだが、)前者は敵警察権  
力の布陣が予想以上に強化されていることをまざまざと見せつけ  
た。そしてそれは、去年の一二・一八集会の「中央軍ア

「ピール」によれば、赤軍・中央軍と革命左派・人民革命軍の分裂の危機さえ生んだ。これらに媒介されて革命左派内の党・隊内矛盾は単なる理論的、政治的な党内闘争にとどまらず、組織的危機として、下部の兵士たちの動揺と脱落を生んだのではないだろうか。前に書いたように矛盾がおこったり、危機をむかえたり、あるいは脱落者を出すことがそれ自体間違っているのではない。それは飛躍を問われている証左にすぎない。(ロシア一〇月革命の前夜、ボルシェヴィキの最高指導部中央委員たるジェノヴィエフ、カメネフらの脱落、敵対はあまりに有名だ。)その飛躍をいかにすかすが、問題なのである。しかし、彼らはおそらく誤った飛躍を自らに課した。厳格な規律は地下組織の生命である。彼らは(我々というべきかもしれない)それを勝ちとるべく断罪者の任務を自ら課した。これも闘いである。だが、彼らは(我々は)闘うことによって飛躍するのでなく、後に飛躍してしまった。前に跳べば整いやすい。しかし、後に跳べば足は乱れる。

二名の脱落者の追跡殺害を革命左派の幹部同志がいかに総括したかはわからない。銃を握り、それによって革命戦争を戦い抜かんとする革命組織、革命軍として、その組織と規律を鉄の如きものにするために必要な闘いだったと考えたのだろうか。それは正しい。だが方法を誤った。これは銃を握っている革命軍であればこそおきたことである。追跡殺害に直接に銃を使わなくても、銃(という軍事の象徴)武装を背景にしている。だから、誰のため・何のための銃なのかをここにおいて問われていたのだ。「敵を消滅し、味方を保在する」という単なる軍事のためだけでなく、

の「統一党」「統一赤軍」結成のための理論闘争、論争の最中、一人の同志のしるびる死に「連合赤軍」同志たちは気がつかなかった。(なんと象徴的なのか!)理論闘争こそが新しい飛躍の闘いであると考えられたろうが、そうではなく、一人の同志の忍びる死に對しいかに闘うのが最大の課題であったのだ。

後への飛躍、闘わずして敗北したこと、これらは総括された。だが、全く誤って、マスコミ(読売新聞)によって伝えられた。同志森の同志永田あての「自己批判」のハガキには「私は、小ブルジョア急進主義」ということで誤りを説明しようとは思いません。短気に共産主義化を考えたと、暴力を指導におきかえたこと、指導の誤りを合理化して強要したこと、プロレタリア的人間性を喪失した。」とし「赤軍派の大菩薩峠の軍事訓練の敗北、京浜安保共闘の上赤塚交番襲撃、真岡線銃奪取闘争の経験から革命のための強固な軍事組織を必要とした。」というところで、軍の「共産主義化」を目ざしたが、実践を通じて人の共産主義化が進むことを忘却した……と書いてあるという。ここにあるのは総括でもなんでもない。ただの感想にすぎない。しかし、読みとるべきなのは、主観には彼ら(我々)は、軍(人)の共産主義化、党化を目指したのだということである。私は、(あとで詳しく分析しようと思うが)当初、軍の中の党として、党の軍化は「軍の党化」と統一されて推進されないう限り、悲劇を生むと考えていた。だが、彼ら(我々)もその観点をもっていた。というよりも「後への飛躍」と「闘わずして敗北した」ことを契機としてその観点を鮮明にした。一・二・一八集会の「中央軍アピール」は「

味方(プロレタリア人民と党・軍)をプロレタリア独裁へ発展させる手段として「契機として銃(軍事)を握り、扱うこと、この両者の間には決定的な相違がある。彼ら(我々)はこのことに気がつかなかったか、あるいは不問にした。否、主観的にはそれを理解して後者をめざして闘ったというのが正しいかもしれない。だが、その方法を誤った。

伝えられる去年一二月からの赤軍派、革命左派の組織的合流と連合赤軍から「統一赤軍」への飛躍の試みの過程で「処刑」という悲劇的闘いは展開された。これはいかにして始ったのか。検察側はついに、最初に死んだ尾崎充男君の件に關しては「殺人罪」で誰も起訴しえなかった。これは最初の処罪が「一時的制裁」として考えられていたことを立証する。そこにおける死は偶然の事故死であり、死刑にするという目的意識的処罪ではなかった。「死んでもやむをえない」と考えてはいなかったのだ。だから、逆に言えば、処罪における死刑の基準が全く曖昧であったという致命的誤りを犯していたのだ。(だから、偶然の死だからといって何が救われる訳ではない。逆である。)規律性を保持・発展させる一つの手段たる処罪の基準がこのように最初から曖昧だったということは、政治・思想性を背景にした組織・規律性が当初からプロレタリア的共産主義的ではなかったということ暴露している。二名の脱落者に対する断罪から、すでに変質が始まっていた。赤軍中央軍においても、一・二・一八集会の「アピール」にあるように同様に変質があった。この最初の処罪と偶然死は、要求されていた闘いに闘わずして敗北したことを意味している。赤軍派・革命左派

プロ独を生み出す銃」を主張し、「人の要素を理解しえないことからくる武器を武器として考える傾向」を批判し、殉教者の名ものでなく、革命戦争を戦い抜ける者のみ知る「勝利か死か」の闘いを訴えていた。それらは文字通りいけば皆ただしいように思える。だが人の要素とは何か?軍の党化、人の共産主義化とは何か?人の要素とは武器の要素に對して言われることである。即ち「武器の要素第一ではなく、人の要素第一」として、人の要素一般をとり出したところで何の意味もない。歴史はつねに人の要素で築かれてきたといえるのだから、新たな歴史を画するプロレタリア革命に人の要素をもちこんでも、海に塩を投げ入れるようなものだ。人の要素に特別の意味を付与して語り初められた時、それは危機の反映ではなかっただろうか?塩見議長はこのことをいち早く自己批判した。「人」とは超階級的な人ではなく、具体的階級であり、プロレタリアーに立脚し、その前衛、共産主義者としての人のことであることを曖昧にしてきた。レーニンは言う、「革命家だけの手で、革命がなしとげることができるよう考えるのは、共産主義者が(また一般に、大革命の発端を首尾よく成しとげた革命家が)おかし誤りのうちで、最大の、もっとも危険な誤りのうちの一つである。そうではなく、革命家は、真に生命力のある先進的な階級の前衛の役割を果しうただけだということを理解し、これを実行に移す能力をもつことが、あらゆる重大な革命的行動の成功のために必要である。」と。我々にとって人の要素とは、生命力のあるプロレタリア階級の前衛としての内容が問われていたのだ。人階級—人民Vという中において、人の要素は問われたのであり、

銃と人との関係にのみ矮小化した時、階級を離れ、人民を離れた没階級的、ブルジョア的（政治、軍事、組織）規律へと転落していった。

闘わずして敗北した経験は、その総括により、積極的に闘うことを導き出した。敵警察権力のしつような追跡と包囲のなかで、おいつめられるなか、直接には再度の進撃を組織するために、銃を握り、それによって、革命戦争を戦い抜く、政治と、思想と、軍事と組織と、規律を「統一赤軍」「統一党」として獲得するために、だが結果は根底的な敗北であり、破産であった。朝鮮の反「民生団」闘争の粛清と同じように、とめどもなく「処刑」が行なわれた。その各々の過程や内容については私には分析する術も資料もない。それは「連合赤軍」の同志たちの任務である。ただ、それらは全て組織と規律を乱したとして処刑されていると思える。その判断、基準は全て官僚に設定されていると思える。感覚的にいうなら、それらは自虐的闘いであった。まさしくそれは殉教者の闘いであった。そこから抜け出すには真の敵とプロレタリア人民を見出す以外にない。

#### 4 人民内部の矛盾の解決の一般的考察

さて、これは人民内部の（詳しくいうなら前衛的武装グループ内部の）矛盾であった。それは特殊には、3で書いたように「銃を握り、それによって革命戦争を戦い抜いていく政治と、思想と、組織と、軍事と、規律が戦後の日本の歴史のなかで初めて実践的に、現実的に問われた」時に発見した矛盾である。そしてそれは、1章の「(三) 日本帝国主義ブルジョアジードもの国内人民に対する全面攻勢につ

いて」で書いたような状況のなかに位置する矛盾である。この主体的、客体的状況を絶対に忘れてはならない。それを抜きにして総括したり、分析したり、あるいは一般的に語ることは必ず、清算主義が教条主義へ、あるいは経験主義へ陥るであろう。我々はそれらのことは最大の警戒心を払いつつ、人民内部の矛盾について一般的に考察しておく必要もまたある。というのは、個別的な状況や矛盾の発見の仕方の相違はあれ、先進帝国主義国家、あるいは中・後進資本主義、（さらに労働者国家内）においても、いわゆる現代過渡期世界たる現在（とりわけ六九年から七〇年代に入ってから）の特殊状況においては共通のものをもってあり、又、同様の矛盾をかかえているように思えるからである。例は数限りなくある。まず、アメリカB・P・P・Pのクリーパー派とヒューイ・ニュートン派の分裂、ウェーザーマンの六九年末（？）のタウンハウス爆破（自爆）を契機とする分裂・自己批判（西独における「赤軍派」（RAF）の登場）仏における「旧プロレタリア左派」↓「人民の大義派」とトロツキストの対立、スペイン「バスク国の解放と自由」派の分裂、ブラジルのVPRの分裂と都市ゲリラ総体の低迷（トルコ、人民革命軍の都市ゲリラ）等々、総じて都市ゲリラの発展と分裂と低迷、（それと比して、ベトナム、インドシナ革命戦争の勝利への前進）今思い浮かぶだけでもこのような状況がある。この世界的状況の具体的分析をすることも必要だが、ここでは一般的考察に限っておこう。

毛沢東同志は五六年の「ハンガリー動乱」をうけて、社会主義社会における階級矛盾、階級闘争を分析し、『人民内部の矛盾を

正しく処理する問題について』を五七年二月二七日最高国務会議第十一回（拡大）会議における談話として発表した。ハンガリー動乱に対する中国共産党の対応は正しかったとは言えない。周恩来はソ連とハンガリー官僚派との取りもちをしたのであり、ソ連は中国に救われた形だった。（六八年のチェコの時は、中国共産党は「ソ修社会帝国主義」というレッテルをはった。）中国共産党首脳のような官僚的強圧的対応にも拘らず、毛沢東同志自らは「人民内部の矛盾……」では正しい分析を行なっている。これは五六年に基本的に所有制度を社会主義化し終ったが、逆にそのことによって、もはや階級矛盾はなくなったとする傾向が、現われてきたことを批判する必要があったためである。

毛沢東同志は「二章反革命分子粛清の問題」のところで次のように書いている。「解放後、我々は一群の反革命分子を粛清した。重大な罪をおかした一部の反革命分子は死刑に処せられた。……我々がそのようなしななければ、人民大衆は立ちあがれなかった。……」我々の反革命分子粛清工作は成果が主要なものであったが誤りもあった。いきすぎもあつたし、手ぬかりもあつた。我々の方針は「反革命分子がいれば、かならず粛清し、あやまりがあれば、かならず是正する」ことである。反革命分子粛清工作の我々の路線は、大衆による反革命分子粛清の路線である。もちろん、大衆路線をとっても粛清工作のなかで欠陥がうまれることもあるが、しかし、欠陥はわりあいすくなくなるし、あやまりはわりあい正しやすくなる。大衆は闘争のなかで経験を積み、我々はここから次のことを読みとらねばならない。死刑もふくめた「粛清」一

般を否定してはならないこと。但し、党内における反革命分子「粛清」の基準は非常に注意深いものでなければならぬ。かつてのスターリンの三七、八年の党・軍内粛清の悲劇はくりかえしてはならない。だが「フェア・プレーはまだ早い。」こと、今回の「処刑」を契機に自らの手足をしばり武装解除してはならない。更に次のことも読みとらねばならない。党内・外の粛清の基準は大衆によること。大衆路線によらず、独断専行をしてはならない。例えば三里塚の人民（もはや大衆一般ではなく革命的人民だが）の前では内ゲバはあまりおこなわない。党利党略からの粛清・内ゲバは一時的にはどうであれ、長い目でみれば否定的結果しかもたらさない。このことを人民はよく知っている。

ちょっと脇道にそれるが、『現代の眼五月号』に丸山邦男氏が「一人称不在の八狂気社会V」と題する一文を書いていた。その中に去年の五月なくなられた高橋和巳氏の「内ゲバの論理はこえられるか」という文章を紹介している。そこにこうある「……一人たりとも傷つけてはならぬと理想主義的に否定するにせよ、ある程度はやむをえないと容認するにせよ、それらの矛盾や試行錯誤が、自分とは無縁な領域のことと思ひ込め誤った前提の上に立てられた討論には意味はない。事実はその通りでない。ずるい人間よりもまっとうな人間が凶暴な性格よりも優しい人格が、そうした極限状態に自らを追い詰めてしまい、あるいは追いつめられて、加害者になり被害者になっているのである。だからこそ、この問題は避けて通ることはできないのである。」（「連合赤軍」同志たちよよくこの一言一言を心しておいてくれ、高橋さんが

裏の下から語りかけているのだから)、さらに「内ゲバの原理」とは、と聞い、次のように言う。「……一党派内で、これまでの運動のあり方を総括し、新しい方針を出そうとする時、現状認識や新方針に関して、当然にあらわされる異なった意見の登壇にあり、その異なった見解を断じて譲らず、あるいは党派を離れ、あるいは内部党派を形成しようとする動きに対して、どう対処するかにある。肅清、リンチ、内ゲバはそうした時、革命的党派内部の問題は、自ら裁決する権限をもち、その意見対立や規律違反に対する制裁を直接に公開することは利敵行為となるとする理論に支えられて発生する。しかし、変革を志向する党派や個人は、自らの見解を常に公然と表明しておくべきである。」そして、具体的提案として「だから、どのような内部矛盾にせよ、それを処理する場に、たった一人でもよいから大衆Vを参加させておかねばならない」と言っているという。ここでもやはり結論は大衆路線なのである。これを青くさいインテリの言葉としてはならない。「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である。」(毛沢東同志)この言葉は、肅清問題に関しても生きなければならぬ。

次に人民内部の矛盾と敵対矛盾の関係について見よう。毛沢東同志は言う「敵味方のあいだの矛盾と人民内部の矛盾という二種類の異なる矛盾を正しく認識するためには、まず人民とは何か、敵とは何かをはっきりさせなければならぬ」矛盾、闘争には一般に敵対性のものであれば非敵対性のものである。このことをまず理解しておく必要がある。くどいようだが、矛盾あるいは闘争

的關係があることがそれ自体誤まっているというのは歴史・物事の発展を否定する非弁証法的考えである。(社会党、日共がそれ相応の勢力として存在すること、あるいは片や中核がいて片や革マル派がいるということそれ自体が悪いのではない。)問題なのはそこにある矛盾(闘争的關係)がどういう矛盾なのかをはっきりさせ、その矛盾を正しく止揚する方法(これは簡単ではない複雑なものである)を見出し、解決することにある。

前衛党派が敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を区別する場合、自らの革命路線(革命戦略ではないことに注意)によって判断しなければならぬ。だがこれは、実践的な検証によって保証されねばならない。その実践の検証とはひとり、前衛党派自身だけでなく、必ず人民大衆の実践によって検証されねばならない。毛沢東同志は『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』を書いたけれども、この時点では社会主義社会内の階級矛盾を正しく処理(処理という語は正しくない。解決・止揚というべきだと思いが)する方法を実際には理解していなかった。それは文化大革命の偉大な人民の実践によって初めて理解することができその方法を獲得したのである。これに関連してレーニンが革命党の規律の保持点検、発展の条件は、①前衛としての自己認識、②プロ人民との結合浸透、③その前衛の正しい政治上の戦略、戦術、指導であるとし、③の戦略、戦術の正しさは最も広範な大衆自身の経験によって体得されねばならないと主張している。以上まとめれば、人民内部の矛盾と敵対矛盾の区別も、その処理(止揚)の基準、方法も、矛盾に対する主体的規律も革命党の革命路線によって実践

的検証をうけねばならないと同時に、人民大衆の実践によって検証をうけねばならないということである。

更に人民内部矛盾と敵対矛盾の相互転化をみてみよう。毛沢東同志はいう、「一般的状況のもとでは、人民内部の矛盾は敵対性のものではない。しかし、その処理が適切でなかったり、警戒心を失なって油断していたりすると、敵対が生ずることもありうる。」わが国の具体的条件のもとでは、この二つの階級の敵対性の矛盾も存在する。

我々は階級闘争を階級攻防に、階級攻防を階級間の革命・反革命の運動的攻防に各々一面化してきた。(主体的な革命論の見地からいえば)階級闘争には革命路線が、階級攻防には革命戦略が、革命・反革命の軍事的攻防には革命戦略が、各々照応する。即ち我々は革命路線を革命戦略に一面化し、更に革命戦略を革命戦争戦略に一面化してしまっていた。



パンフ『赤軍No.4』（以下『No.4』と略す）は一貫して我々赤軍派の綱領的文章であった。そして69年秋、安保決戦時に前段階峰起を貫徹しようとしていた我々の歴史的認識の骨子であった。だから我々が自らを理論的側面から総括しようとするとき、必ずこの『No.4』を検討・分析することを要求されよう。そこで私は最初『No.4』の検討・分析によって理論面での根本的総括をなそうと考えていた。だが検討を進めていくうちに『No.4』そのものからは多くの根本的総括をひきだすことが困難であることを悟らざるをえなかった。分析を深め総括をかちとるにはあまりに論理が粗雑であった。更に『No.4』は大菩薩峠敗北の総括たるパンフ『赤軍No.5・6・7』と一括して検討されるべきものである。と

いうのは、『No.4』には当初第五章として予定されていた「戦略・戦術論」が書かれないうままになっており、それは『No.5』～『No.7』において「革命軍・国際根拠地・国際地下組織」建設等として初めて積極的に、理論面で主張されたからである。ところが今、私の手元には「No.5」～「No.7」がないので検討すべくもない。又、『No.4』のように難解な文章を逐一分析していくことは総括を鮮明にするどころか、わかりにくくもしよう。そこで私は

は『No.4』批判をできるだけ簡明にまとめることにした。

1 『No.4』の概要について

『No.4』の内容を知らない人のためにも、あるいはその内容をよく理解してない人のためにも、更に論考をすすめる上にも『No.4』概要を説明しておくことは必要であろう。全体を理解もせず、説明もせず、一部だけとりだして好みに応じてダジャレをとはし、批判することは「評論家」がよくやることである。我々はそのような真似はつとめてしないようにしよう。

『No.4』は「綱領確立のために(I)―過渡期世界とプロレタリア・党」という副題のもとに「第一章現代革命論への方法的視点、第二章世界史的階級闘争の段階としての過渡期世界、その二つの歴史的普遍性、第三章現代帝国主義国家、第四章過渡期世界―その歴史的展開、」という章構成をなしている。ここで展開されている革命論獲得の方法（革命論の構成）は以下である。

①（過渡期世界の階級闘争の）史的唯物論的分析…唯物弁証法を基底（＝基本的認識方法）として唯物史観とマルクス経済学をもって分析する。

えたもの。

2 その対象認識・革命論構成の方法について

(i)階級闘争史観―「ブルジョア」とプロレタリアートの闘争の世界史的段階は如何なる性格のものか」  
(ii)階級関係―「ブルジョア」とプロレタリアートが如何なる闘争関係にあるか」  
(iii)プロレタリア革命と社会主義・共産主義の歴史実践的成長の在り方。

②（過渡期世界の階級闘争の）現実形態的分析…（唯物弁証法、唯物史観、マルクス経済学を歴史的・現実的特殊段階に適用する）

(i)（この段階の）「ブルジョア」とプロレタリアートとの関係」  
(ii)「これに媒介されたブルジョア」の基本的・基調的動向の確定」  
(iii)「現代帝国主義（国家）論」

(iv)「世界プロレタリアートの歴史的、実践的な、かつ実態的な総体的位置」  
(v)「現状分析…（唯物弁証法、唯物史観・マルクス経済学を現在の個別的段階に適用する）」

(vi)「ブルジョア」の攻撃の在り方」  
(vii)「プロレタリアートの対応の在り方」

③、狭義の革命論・戦略・戦術

(i)党としての闘い…狭義の階級形成。

(ii)党のための闘い…党建設。

(注)：( )内の説明は理解を容易にするために私がつけ加

過渡期世界における階級闘争の対象認識の方法としては、①、

②、③という構成は原則的に正しい。それは世界が「労働者国家の成立によって、全面的な資本主義から世界社会主義・共産主義への実態的過渡期に入った歴史段階の階級闘争の認識として、いわゆる普遍―特殊―個別の方法を適用しているからである。更に革命論獲得として、④の説明のところで「No.4」は次のように書いている。△(注)これら①、②、③のこと(の)指定の上に立つて、歴史的、場所的な「プロレタリアと党」が現実形態性(□)を媒介として世界史的段階の革命と共産主義の在り方(普遍性)△接近する内実たる革命論(戦略―戦術の獲得)▽言わんとすることは正しいがこういふあらためねばならない。「いわゆるヘーゲル流の言葉を使えば、現実性は現存性と普遍性を媒介する。現状分析を通してあらゆる階級闘争の現実形態性を世界史的段階の革命と共産主義の在り方(普遍性)に媒介するために、主体的現実性たる革命論を獲得せねばならぬ。」と、これは難しい言いまわしだが、なんのことはない、プロレタリアートの普遍的成長、更に階級消滅を現実化するために革命的实践をみちびく革命的理論を構築することなのだ。だから、革命論構築のための方法としても①、②、③、④というのは原則的に正しいといえるだろう。対象認識・革命論構築の方法そのものについては『No.4』は批判どころか、賞讃されるべきものといえる。

### 3 史的唯物論的分析について

先ず、(ii)の階級闘争関係からみていこう。「No 4」の主張は次のようにまとめられる。資本主義そのものが世界市場成立をもって初めてなりたちえたにも拘らず、その基礎は国民経済—市民社会を統括するブルジョア民族国家である。いうならば、資本の世界性に対し、ブルジョアジーは国家を媒介にした世界性でしかありえないという二律背反的矛盾をブルジョアジーはかかえこむ。それに対し、プロレタリアートは(資本制生産とその諸関係が国民経済に基礎をおき、かつ市民社会がブルジョア国家権力に総括されることにおいては擬制的に国民的民族的であるが)「国民経済が世界市場成立と一体となり、それを前提として成立することに於いて、もともとその物的姿態として労働力商品が世界的であり、世界性をもつことに於いても自由で普遍的で、世界的である」(当該書、P 3)、即ち、 $\wedge$ 資本 $\uparrow$ 賃労働 $\vee$ という経済的關係においては普遍的世界性をもっているにも拘らず、階級闘争関係としての $\wedge$ ブルジョアジー $\uparrow$ プロレタリアート $\vee$ の支配—被支配關係を維持するためにはブルジョアジーはプロレタリアートを(民族)国家に包摂して国家権力を掌中にし駆使しなければならぬということである。レーニンの言葉をもちえば、「社会の大部分を強制して、他の部分のために系統的に労働させることは、恒常的な強制機関がなければ不可能である。」「土地と生産手段の私的所有が存在しており、資本が支配している国家は、どんなに民主的であろうとも、全て資本主義国家であり、労働者階級と貧農を

らず、疎外され、擬制的に民族・国民となっている」という疎外論に外ならない。世界性と同様にプロレタリアートの共産主義的社會性(組織性)暴力性(軍事性)が主張され、それが、プロレタリアートの本来の三大資質の如くいわれているが、それも間違いない。ブルジョアジーに商品として切売る労働力以外に何もかもまたないという意味でプロレタリアートは唯一「団結し武器をもたない。そして、機械制大工業の発展に促がされて組織性、規律性を発展させていく基盤をもっているということ、更に帝国主義の侵略性、寄生性の増大は帝国主義プロレタリアートと被抑圧民族人民とをますます結合させる条件を形成していること、即ち、「本来」とか何とかいう問題でなく、プロレタリアートはそのようにして「団結」を強め発展していくということではないのである。勿論その団結の内容は、政治的には侵略的帝国主義国内のプロレタリアート人民の革命的祖国敗北主義—自国帝国主義打倒の場合もあるし、被抑圧民族国家内プロレタリア人民のように革命的祖国防衛主義の場合もある。ここにおいて「世界性」としてのプロレタリア国際主義はプロレタリアート・被抑圧民族人民の団結のあり方以外のなにも意味させてはならないものである。67年10・8羽田闘争以来我々の原則的スローガンとしての「プロレタリア国際主義」を恣意的に拡大して把えていったところ(我々の国際拡散主義的傾向(コスモポリタンの傾向)が発生し、自国におけるプロレタリア独裁権力をうちたてる具体的路線(綱領)をもたない無政府主義に陥った根拠がある。このようにして、ブルジョアジーとプロレタリアートの闘争関

係を単なる「世界性・一國性の矛盾」に一面化したことは「No 4」の根本的限界と誤謬をもたらしただのである。階級闘争関係それ自身としては「No 4」はこれ以上分析してない。それは(i)の階級闘争史観の分析のうち(過渡期世界の階級闘争関係として展開されている。では(i)についてみてみよう。「歴史的普遍性の基本テーゼ」の「第一テーゼ」と題して、それを次のように書いている。「(唯物史観の次元においては)支配階級としてのブルジョアジーはその矛盾を解決することなく過渡期世界に突入し、その矛盾を一層深めるのに対して、被支配階級としてのプロレタリアートは、過渡期世界突入を契機に世界武装プロレタリアートに成熟・到達し、ブルジョアジーとの闘争を通して、現実形態的に自己の矛盾の止揚を開始しはじめた」(P 10)、更に別のところでその説明として、次のように書いている。「即ち、プロレタリアートは産業資本主義以前の貧民から産業資本段階に於いて、この運動を通して自らの団結と組織への道を開始し、帝国主義段階に於いてこれを通じ、組織され、自己の矛盾をかかるとしての発展形式を通して展開し、今過渡期世界に於いて、自らの過去の組織的団結を打ち壊し、世界武装プロレタリアートとして矛盾を開花し、止揚への道を現実的に打開し始めたのである。」(P 7)と、「世界武装プロレタリアート」なる、ア・プリオリな設定が誤っていることはすでに述べた。それについての八木同志の主張をつけ加えておこう。八木同志は次のように書いている。「ブルジョアジーは増々国際的に結合し、先進諸国では民族は増々腐敗化した反動的なものになっているが故にプロレタリアートは

隷属させておくための資本家の手中にある機構である、そして普通選挙権、憲法制定議会、国会—これらはただの形式であって、一種の約束手形にすぎず、けっして事態の本質をかえるものではない」(「国家について」一九一九年七月)ということである。更に「No 4」はその認識のもとに、プロレタリア世界革命の歴史・経済的基礎として、資本制生産から形成させる過剰な生産力(資本)が国家的枠をこえ自律的に発展していくのに対し、ブルジョアジーは擬制的にしか応え切れず(経済的政治的他民族抑圧、植民地化、領土占有)、一方、プロレタリアートは、逆に他民族人民・プロレタリアートと結合し世界プロレタリアートに成長すると主張する。そこで結論として「プロレタリアとその党は、ブルジョアジーとの弁証法的な闘争関係に於ける勝利的方向を、常に世界的に表現するようにしない限り、自らの革命を改変し展開することはできないのである。それ故、プロレタリア革命はただ唯一の世界革命である。」(P 4)とされた。この結論は明らかに短絡である。資本—ブルジョアジーが世界性—一國性の矛盾をかかえこんでいるのは確かであるが、だからといって、即プロレタリアートが「世界性」をもつてのみ勝利するとはいえない。このことは単にこの結論だけの問題ではない。「プロレタリアートは……もともとその物的姿態としての労働力資本が世界的であり、世界性をもつことに於いても自由で普遍的である」ということ自体に誤りがある。他の箇所でも、プロレタリアートの「本来の姿—世界プロレタリアート」(P 15)という表現がある。これらの認識は「プロレタリアートは本来世界性をもっているにも拘

増々国際的に結合し、国際プロレタリアート・世界革命の観点に立たねばならないと言わねばならないと考える。しかし、それは「世界武装プロレタリアート」なる抽象的実体、抽象的理念の具体化、ヘーゲル流の主体⇨実体概念を意味するものでは決してないし、更にその一層の主観化としての、世界党と世界ブルジョアジイとの闘争という考えを排除する。このような主観的転倒・観念論とは反対に、プロレタリアートはただ具体的な階級闘争の中にのみ存在するのであり、歴史的⇨具体的社会的⇨政治的諸関係（その物質的土台こそ所有⇨生産諸関係である）によってのみ明らかになるのであり我々にとってはプロレタリアートの歴史的使命を明らかにし、その実現のために闘い、党⇨階級⇨大衆の相互関係を打ち鍛えることが必要なのである。」（前掲書P207）、ただ、『No4』では、過渡期世界における階級闘争についての史的唯物論的分析と、現実形態的分析を明確に区別することを主張しているのであって史的唯物論次元における世界武装プロレタリアートの到達、成熟ということが、直ちに現実的なものとして措定されていた訳ではなかった。これは即ち毛沢東主席の「世界戦争の可能性は二つしかない。それは戦争が革命をひきおこすか、それとも革命が戦争をおしとどめるかである。」「しかし、当面の世界の主な傾向は革命である。」という歴史認識と共通のものともいえるのである。しかし、それは**実際には現実形態的なものとしてスタートに扱えられてしまったのである。皮肉なこと**に、『No4』は、この史的唯物論的（大歴史的）次元の認識を**現実にストレートにもちこんで史的唯物論、階級闘争史観を修正し**

一つの組織形態であるが「議会」は近代ブルジョア国家の一機構であるのだから、だが、ここでの問題の性質は同じである。侵略帝国主義国家内において「労働組合」は労働運動の前進にとっても革命運動の前進にとっても多くの桎梏となつてゐることも事実であるが、世界的な意味においてさえもそれは否定されるものではないだろう。ところが、『No4』は「労働組合」は時代おくれになつたとして世界的な意味において、なおかつ、現実にも「過去の組織的団結を打ち壊し」始めたと主張しているのである。確かに「労働組合」の桎梏に対し、日本の青年「労働者」は独自に「社研」、「労研」そして「地区反戦」を組織してきたが、「社研」、「労研」は主基幹工業プロレタリアート内のサークル活動として、「地区反戦」は主に官公労青年労働者の一部と中小零細企業労働者の一部を結集したものにすぎなかった。労働組合組織そのものを否定することは労働運動が基幹工業プロレタリアート内では帝国主義労働運動に固定されている現状に対する自ら無策にふてくされてゐることを意味し、更に労働運動をサークル活動に矮小化することを意味しているにすぎない。結局は「世界武装プロレタリアートへの到達成熟」とは歴史認識ということではなく、自らの姿に似せてプロレタリアートを抽象し、「抽象的実体」以外の何ものでもなくなつてしまふのである。

そして、(i)、(ii)のような認識のもとに(iii)の「プロレタリア革命と社会主義・共産主義の歴史的实践の成長の在り方」が規定される。即ち、過渡期世界に於いては唯物弁証法⇨史的唯物論⇨経済学の次元では、ますます階級闘争は「地域のプロレタリア」が「支

ている（全人民国家論・体制間矛盾論etc）としてスターリン・ハーリン、革共同あるいは中国共産党を批判していたのである。（P8〜P9）、それらの批判は中国共産党に対するものを除けば誤っていない。だが、我々自身現代帝国主義国家内の革命派として歴史的认识を現実的認識にとりちがえるという誤ちを犯していたのである。それは、**実際面だけではなく、理論面でもすでにそうだったことが引用した文から理解できる。**即ち「プロレタリアートは……今、過渡期世界に於いて自らの過去組織的団結を打ち壊し、世界武装プロレタリアートとして矛盾を開花し、止揚への道を現実的に打開し始めたのである。」という主張である。これは何を意味するのか？それはこうである。「産業資本主義段階から帝国主義段階へと到るなかで、プロレタリアートは自らを「労働組合」に組織し団結を固めてきた。しかし、もはやその「労働組合」はプロレタリアートにとって、逆に桎梏と化してきており、その枠を打ち破り世界武装プロレタリアートとしての団結の道を歩まねばならなくなつてきている。私はこれに関連してレーニンが「共産主義内『左翼主義』小児病」の「ブルジョア議会に参加すべきか？」でドイツ共産党左派を批判した一節を思い出す。世界史的にはすでに議会主義が時代おくれになつてゐることは明らかである。だが、「實際政治の問題で世界史的な尺度を引き合ひに出すことはもつとも驚ろくべき理論上の間違ひである。」、**世界史的尺度とは数十年の単位をもってはかられるものなのだから、という内容であった。勿論「労働組合」と議会主義を同列に扱うわけにはいかない。「労働組合」は本来プロレタリアートの**

配「階級」として登場し、世界プロレタリアートが現実形態的に世界プロレタリアートとして登場し、世界革命戦争の性格に深化、具体化し、階級闘争の弁証法は戦争の弁証法として深大発展されなければならなくなつてゐる。」P5と。又、これとは大分視座が違ふように思えるが次のようにも主張されている。「我々は過渡期世界を、それ自身、世界プロ独⇨世界社会主義⇨と変革すべき変革主体⇨プロレタリアートの世界的存在様式⇨自然発生性とその内的矛盾の對象化された世界として扱え、従つて過渡期世界の**変革⇨対象変革革命自身を、同時にこのプロレタリアートの内的矛盾の止揚⇨世界的階級への形成の運動として扱えるが故に、現代の階級闘争を世界革命戦争⇨世界プロ独への闘いとして、即ち、三ブロック（現代世界を帝国主義諸国家群・労働者国家群・後進諸国群の三つのブロックに分類して扱っている。）に分裂したその歴史的個別的、過渡的存在形態を不断に単一の世界プロレタリアート⇨世界プロ独への止揚する闘いとして扱えるのである。まさにここに根柢をもつて世界社会主義⇨共産主義をめざす世界党が、単に理念と宣伝としてではなく、過渡期世界の現実的階級闘争の世界的ヘゲモニーとして形成⇨存在しうるものであり、プロレタリアの自然発生性と結合⇨止揚しうるものであり、現代世界のプロレタリア階級闘争にとって不可欠必然の目的意識性として扱えうるのである。従つて又党形成と階級形成の連関構造とその組織形態をも明らかにしうるのである。かかるものとして初めて共産主義へと永続的に接近し実現してゆく現実の運動が可能となる。」P28長い引用だが参考にならう。要するに、（各個別国家）各**

ブロック性をこえて、世界の階級闘争は単一の世界革命戦争の性格に深化されてきたので、階級闘争の弁証法は、(世界革命)戦争の弁証法に発展させていかねばならないということなのである。ここに我々の理論的誤謬が結晶している。魔法の有能の根源はあの空を翔ける魔法の箒にある。ただの箒ではなく魔法の箒なのだ。現実が幻想に変えられ、空を翔けめぐり、現実の弁証法は魔法の弁証法に変えられた。世界の階級闘争が総体として世界革命戦争の性格をもちはじめていることは事実である。ペトナム・インドシナ民族解放—社会主義革命戦争の進撃が全世界の階級攻防を尖锐化させ、全世界のプロレタリアート・被抑圧民族人民の団結を強化、拡大させていることは事実である。歴史的な意味で現代を世界革命戦争の時代というのは正しい。それはすでに、第三インターナショナル第二回大会に於いて力強く宣言されている問題なのはいかに表現しようとも世界革命戦争を一面的・平板的に把握、そしてついに階級闘争(革命)戦争に一面化したことにあるのだ。革命戦争は軍事的攻防という意味では確かに独自の弁証法を必要とする。だが、革命戦争は階級闘争の激烈な一形態でしかないのである。我々は69年安保決戦において(前段階)武装蜂起戦術をとることを決定し、その革命戦略上の位置を世界革命戦争の中に確定した。それが何か特別に誤っている訳ではない。何らかの計画的戦術を国際的階級闘争(階級攻防)から導びき、位置づけることはマルクス・レーニン主義の教えるところである。我々が間違っただのは前段階蜂起という一戦術から、革命戦略を見出さずとし、その革命戦略を革命戦争戦略に一面化するという立場か

沢東主席は「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である」と語っているが、これがその史的唯物論なのである。ところが、「No.4」ではこの観点は物質的諸条件に埋没し、たかだかプロレタリアートの内的矛盾だの自然発生性だのという抽象に終始している。更に、被抑圧民族人民についても、農民小ブルジョア階級についても何の分析もなされていない。これこそが絶対的な誤謬なのである。人民こそが歴史の創造者であるというところは「人の要素」などというふやけた英雄主義とは決定的に違うのだ。

#### 4 現実形態的分析について

この段階における(i)の「ブルジョアジーとプロレタリアートの関係」については「歴史的普遍性の基本テーゼ」の「第2テーゼ」として次のように「No.4」は書いている。「帝国主義の運動に媒介され、ブルジョアジーはいぜんとして支配階級であり、プロレタリアートは被支配階級であり、二大階級の基本関係は変らないが、にも拘らず、ブルジョアジーは、この闘争関係に於て、受動的防衛的であり、プロレタリアートは能動的攻撃的であり、両者の制約関係が転倒過程に入ったこと。即ち、「ブルジョアジーの制約↓プロレタリアートの被制約↓プロレタリアートの逆制約」攻防関係に於て、この逆制約が、世界武装プロレタリアートへの成熟到達を通じ、以前の消極的受動的なものから、能動的攻撃的なものに転化したこと。」(P.11)もう少し詳しくみると次のように説明される。「ロシア革命を直接的契機としての世界的

ら、世界革命戦争をみつめ、世界と歴史を階級攻防(そのとりわけ軍事的攻防)から捉えかえそうとした点にあるのである。それは階級攻防を鮮明にし、目的意識的に革命戦略を確立しようという一定の意義をもってはいたがやはり致命的な誤ちでもあったのだ。だから、自ら設定した「プロレタリア革命と社会主義・共産主義の歴史の実践的成長の在り方」に全く抽象的にしか答えることしかできず、日本におけるプロレタリア独裁権力樹立等の現実的権力問題にジグザグをくりかえしたのである。

史的唯物論的分析の項をまとめるにあたって、史的唯物論そのものについて書いておこう。レーニンはマルクスの学説諸理論を概説した「カール・マルクス」で次のように書いている。「唯物史観、または、より正確にいえば社会的諸現象の領域への唯物論の首尾一貫した適用および拡張は、従来の歴史論の二つの主要欠陥を除名した。従来の歴史理論は第一には、たかだか人類の歴史の行動の理念諸動機のみを考察の対象として、これらの動機が何によって生みだされるかを探究せず、社会的諸関係の体制の発展における客観的合法則性を追究せず、この諸関係の根底と物質的生産の発展段階とを注目しなかった。第二に、従来の理論は、まさに住民大衆の諸行動をまったく等閑に付したのであるが、他方、史的唯物論は、はじめて、自然史的正確さをもって、大衆の社会的生活諸条件ならびにこの諸条件の変動を研究するという可能性を与えたこと、即ち、史的唯物論とは、歴史の発展を社会的・経済的諸構造の発生・発展・崩壊の合法則性から観ること、と歴史の創造者は人民であるという観点なのである。この第二の内容について毛

変化とは、ブルジョアジーが現実形態的には支配階級として新たな対応を示したが、根本的な自らの世界性と一国民性の矛盾を止揚しなかったのに対して、プロレタリアートは労働者国家(それが疎外され、自然発生性に拝跪したものであれ)に於て、自らの一部を資本制生産関係から離れしめ、支配階級として武装せしめ、その地域に於てブルジョアジーを武装解除し、被支配階級に転落せしめ、自らの矛盾を普遍性に向け止揚する芽を獲得したのである。これらを一般に高次の自然発生性と、その目的意識性の萌芽と呼び、いわゆる「攻撃型階級闘争論」として展開されている訳である。

先ず、「ブルジョアジーの支配、プロレタリアートの被支配の基本関係は変らない」という認識の誤謬についてみてみよう。これは帝国主義・資本主義国家内における階級関係としては正しいが、これをそのまま過渡期世界全体に於てはめることは決定的な間違いである。ましてや現代過渡期世界においてははかりである。この考えはブントの伝統的な世界認識であった。『No.4』の中でも「批判するために」その考えを紹介しているが、それはこうである。「①帝国主義とブルジョアジーにプロレタリアートは規制されていること。過渡期社会の矛盾も、根本的には、帝国主義に規定されていること、スターリン主義の発生もここに起因していること。②帝国主義打倒を世界革命の枢軸に置くこと。この打倒を通してスターリニズムも克服しなければならぬこと。③かかる観念は全く正しい原則的観念である。」(P.9)ところで、一国内家で資本主義から社会主義社会に至る最大の困難な帝国主義国

家が存在し侵略してくるというところにあるのではない。そうではなくて、小商品生産・小経営（農業も含めて）を一挙に強制的に社会主義化することができないということにあるのだ。小規模生産・小ブルジョア階級に対しては非常に長期でねばり強い援助と教育をもって社会主義的改造をするしかないのである。これに失敗すれば小ブルジョア階級はブルジョア先兵として国家機関を牛じり官僚と化し、あるいは他国の帝国主義ブルジョア階級の侵略をよびおこしたりするのだ。八木同志は次のように言う、「（スターリン・コミンテルン）の犯罪性はプロレタリアートを小ブルジョア階級に追随させ、従属させ、屈服させ、解体させ、融合吸収させていった点にある」（前掲書P130）と、ここでは八木同志は私とは違う意味でいっているのだが、本質的には同じだと思っている。即ち、過渡期社会（それを拡大して過渡期世界）においては小ブルジョア階級との闘争が決定的な意味をもつということである。ファシズムとは正しくプロレタリアートが小ブルジョア階級に追随し従属した結果であり、金融独占資本の反共組織テロル支配であったのである。スターリン主義の発生は帝国主義に規定された過渡期社会の矛盾そのものではない。過渡期社会の矛盾そのものではない。過渡期社会内部で小ブルジョア階級にプロレタリアートが敗北した結果なのである。（勿論、私は主要な要因を言っているのであって、その小ブルジョア階級と帝国主義の相互関係、影響を無視して形而上的にみている訳ではない。）経済的に一挙に社会主義化することができず、資本制生産が残存せざるをえないということは、確かに多少なりとも帝国

主義ブルジョア階級に規制（規定ではない）されるであろう、だが過渡期社会では経済問題＝政治問題として政治が全てを決定する。ということは過渡期世界においてブルジョア階級とプロレタリアートの闘争・対立・拮抗する世界である。（小ブルジョア階級の社会的国家的存在は今「ソ連社会帝国主義」としてある）「No.4」は帝国主義・資本主義国家内の階級関係を過渡期世界総体に拡大し、固定化し、そのうえで、プロレタリアートは被支配にも拘らず、能動的攻勢的になったのである。誤った前提のもとにやはり誤った結論に導びかれる。ではそれを検討してみよう。

「攻撃型階級闘争」論、あるいは「攻勢の理論」は何も我々が発見したものではない。ブレスト・リトフスク講和の際にプーリンは最も強く世界革命戦争への前進を主張していたし、レーニンが一九二一年第三インターナショナル第三回大会で批判したのは「ダイナミックな傾向」あるいは「受動性から能動性への移行」という「攻撃的闘争の理論」そのものであったのだ。だから「No.4」の次のような認識は間違っている。「全世界の革命的党派は（ロシア革命によってもたらされた）この世界的力関係の変化を理解することはできなかった。或いは理解しても、これに一挙的に対応する程には過去の世界プロレタリアートは計画的に組織され得ていなかった。歴史の重みそのものが、逆にかかる理解に対応をばんだといってもいい」（P14）そこで、もし、彼らがこれを理解していたら次のようにすべきだったという、「明らかにロシア革命は世界革命の突破口として、世界革命戦争の最前戦

としての位置をしめ、全世界の反乱を世界革命戦争として組織し、ポーランドから独逸ヨーロッパ進撃を徹底的に貫徹し、帝国主義列強の共同反革命戦線を打ち破り、……全面的な世界革命戦争に展開せしめるべきであった。」（P14）は夢想というものである。「夢想と現実の不一致」（なにをなすべきか？）ならまだしも、これは「夢想と過去の不一致」である。芥川龍之介がいうようにレーニンが「誰よりも理想に燃えた君は、誰よりも現実を知っていた君」なのだ。理想主義者とは現実をよく知る者のことである。そして過去の現実も知っていなければならぬ。ところが、ここでは歴史が改造され、夢想されているのである。一九二〇年五月のポーランド進撃はソヴェト・ロシアが大幅な妥協と譲歩をした「四月講和」の提議が拒否されポーランドがドイツ将校の支援のもとにロシア攻撃をしかけたのに対する反撃であったのだ。更にその年の十二月末の第八回全ロシアソヴェト大会でレーニンが語ったように労働赤軍は帝国主義列強に支援されていたウラングリの白軍と激しく戦っていた（それは最後の追討戦でもあり、ウラングリの軍は十一月クリミアで撃滅されたのだが）、ワルシャワでの敗北はそのような困難のなかで必然であったのだ。単一の世界革命戦争へ発展しなかったというのは時の世界の革命党派の「世界的力関係」に対する認識不足にあるのではない。現実そのものに対する無能と帝国主義列強の反撃の強さであったのだ。フィンランドで、ハンガリーで、ドイツで、イタリアで帝国主義の組織された反革命プロレタリアートは敗北していったのだ。前述のコミンテルン第三回大会で、七月一日「共産主義イン

ターの戦術を擁護する演説」として次のように言っている。「我々と共同してこのテーゼを作成した同志ラディクと我々の間では、この問題についてはどんな論争もない。真の攻勢の準備がなされなかったのに、ドイツで革命的攻勢の理論についての議論を始めたのは、おそらく必ずしも正しいことではなかったであろう。それでも、三月の決起は、その指導者たちの誤りにも拘らず大きな一歩前進である。」「はたして我々は攻勢準備をしたであろうか？……攻勢は新聞論説のなかで論じられたにすぎなかった。一九二一年のドイツにおける三月の決起にこの理論を適用したのは誤りであった。我々はこのことを認めなければならぬ。だが一般的にいって、革命的攻勢の理論はけっしてまちがってはいない。」このように戦術上の理論としては攻勢の理論はある条件のもとでは真理となる。だが、それを過渡期世界の階級闘争一般に適用することは、はなはだしい誤りであった。具体性・個性性が、抽象性・一般性のなかに溺死したのだ。

次に(ii)の「これに媒介されたブルジョア階級の基本的・基調的動向の確定」＝現代帝国主義（国家）論についてみよう。

「No.4」はその「第三章 現代帝国主義—現代帝国主義国家」の最後に、「現代帝国主義生成—発展のまとめ」として次のように書いている。「①現代帝国主義は、帝国主義段階が世界革命の前夜であるのに対し、まさに世界同時革命＝世界革命戦争の過程にある帝国主義（71年1月に出されたパンフ『赤軍』特別号では「世界革命戦争を内包する帝国主義段階」と規定された。）であり、自らの矛盾を資本主義的に解決しえず、普段に階級として他の形

態に世界革命に於て解決せざるを得ないように、経済的危機を深化した帝国主義である。この矛盾の根源は、この金融独占資本がその内部に金融過剰資本を慢性化したことにある。②資本主義的矛盾の解決は、唯一戦争のみで恐慌は資本主義的矛盾（の解決）にならないこと。③帝国主義戦争にむけ、金融過剰資本の運動を国家は助長促進せざるべく、新たに政治的、経済的役割で強化した。これが可能であることも金融過剰資本の存在に根拠をおいていること、管理通貨制に統制経済は、帝国主義戦争への媒介政策であり、同時に世界恐慌の克服の媒介政策であった。④金融過剰資本は金融独占資本の運動から生まれ、その寄生性、腐朽性の集中された物象形態である。金融過剰資本を内包した金融独占資本は階級闘争に質的に形態転換する契機を含み、階級闘争に媒介されて段階的本質の運動を展開する（P27）本来この章は、「（現代帝国主義）を歴史的に、生成—発展—成熟—没落として、歴史的に明らかに（P22）するためにあてられたはずであったが「生成—発展」の分析だけで（即ち30年代の帝国主義だけを分析して）「成熟—没落」については結果的に全く分析されていないという欠陥をもっている。何故書かれなかったか理由はわからないが、それは第四章の「現状分析」にまわされている。ではその方を見よう。「帝国主義諸列は、益々過剰となる資本の処理を軍事投資—軍事経済へと転化し、産軍複合体をつくり出し、過剰労働力を軍隊へ集中し、同時にIMF危機下での再分割戦激化の下で通貨維持と競争力確保のために統制経済へと移行し、原料資源—商品市場—低賃金労働力の獲得のために、後進国への国家資本輸出—商品輸

分割という侵略面では対立し、侵略と反革命は統一されないが、その矛盾を各帝国主義国家は国家内人民に対するなし崩しファシズムとして、かつそれと一体のものとしてのなし崩しの政治・経済的ブロック化解決せんとする。だが、それは逆に階級対立の激化しかもたらさず、不断に政治的・階級危機（経済危機にかかわりなく）を発現させ、帝国主義国家内の革命戦争の現実形態の根拠をなしている。以上である。

さて、批判に移ろう。私はそれらの個々の分析について、とやかく批判しようとは思わない。その多くは今でも正しいと思っている。批判しなければならぬのは、一つは現代帝国主義の一般の特徴となっている「スタグフレーション」と各帝国主義列強の同盟のあり方の分析の欠陥についてであり、もう一つは、現代帝国主義（国家）論—資本主義、帝国主義批判の位置づけそのものについてである。前者の批判については他のところでやることにして、ここでは後者について書いておく。レーニンは『帝国主義論』で帝国主義の経済的一般的メルクマールを五つにまとめたと思う。『No4』でも同様にこう書いている。「レーニンはその帝国主義論において、①生産の集積と独占 ②銀行の新し役割 ③金融資本と金融寡頭制 ④資本輸出 ⑤資本家団体の世界分割 ⑥列強の間での世界分割、として金融資本と帝国主義の運動を説明している。」（P24）と、更に『No4』は「第三章 現代帝国主義—現代帝国主義国家」の目的として別のところで次のように書いている。「我々は、この章で……帝国主義（論）の修正—恐慌革命論派とも言える潮流との闘いを念頭に置き、①過

出—利潤生み資本輸出を激化させ、その独占的確保の闘争を激化させる。これらに新たなエネルギー革命と技術革新が一層拍車をかける。そして行きつく先は戦争である。」（P40）「世界的矛盾は、権力的側面に於いては、なし崩しファシズムと反革命同盟の再編である。なし崩しファシズムとは、ファシズムの前期的表現ではなく、統制経済—軍事経済—再分割戦—侵略反革命戦争のなし崩しの同時一体的な進行を基礎としてプロレタリアートに対する先行的反革命を通して巨大独占体—帝国主義軍隊—労働者階級の上層部と小ブルジョアジーの一部の三位一体的結合の下に、暴力的支配と結合を実現する体制である。総じて現代帝国主義の全世界的矛盾の成熟は、

統制経済—再分割戦—侵略反革命戦争—なし崩しファシズム  
軍事経済—反革命同盟再編

である。」（P41）

大分長い引用になってしまったが加えて当時の私の認識を極く簡単にまとめてみればこういうことである。即ち、第一に労働者国家の存在と民族解放闘争の発展は帝国主義をして経済侵略を困難にさせ、軍事的な反革命を遂行しなければ市場を確保しえないこと、第二に、もはや耐久消費材（テレビ、自動車等々）部門では市場は狭益化しており、今後は絶対的消費材（軍需品）部門に移行しなければならぬこと、この二つの政治的、経済的要因をもって、軍事スペンディング—産軍複合体が築かれ、侵略反革命戦争が不可避であること。しかし、帝国主義間対立は消えず、逆に激化し、反革命ということでは一致し同盟を組んでも、市場

渡期世界の階級闘争の世界的特質を踏まえ、帝国主義の段階的本質を踏まえつつこの貫徹を、②過渡期世界の帝国主義（現代帝国主義）を歴史的に生成—発展—成熟—没落として、歴史的、理論的に明らかにし、③いわゆる恐慌革命論に帰結される、「現代帝国主義論」とその「国家論」を、かんぶなきまでに粉砕することを任務としなければならぬ。」（P22）これは文字通りの「現代帝国主義論」の矮小化である。レーニンは五つの一般的メルクマールを提示しながら但し書きをつけた。「帝国主義論」が手元にならぬので正確ではないが、それはこの五つのメルクマールは経済的見地からのものであり、政治的には別の定義を必要とするというような内容である。レーニンは膨大な資料を分析し徹密に帝国主義を経済学上から分析しつつ、その帝国主義の寄生性・腐朽性こそが、世界的に勢力をもっていた社会排外主義の根拠であるとして、社会排外主義批判こそ帝国主義論の任務としたのである。そしてプロレタリアート・農民・兵士をその社会排外主義からとき放ち、プロレタリアート・農民を社会主義革命の主力として、組織することをめざしたのである。その帝国主義—資本主義批判の原則的立場は次のようなものである。「帝国主義の基礎を改良主義的に改変することが、可能かどうか、帝国主義によって生みだされる諸矛盾をこれ以上激しく、深める方へ前進するか、それとも鈍化する方へ後退するか、という問題は帝国主義批判の根本問題である。帝国主義の政治的特質は金融寡頭制の抑圧と自由競争の排除とに関連して、あらゆる面での反動と民族的抑圧が生じていることであるから、二十世紀の初頭以来、ほとんどすべ

ての帝国主義国には帝国主義にたいする小ブルジョアの反動派が現われている。※レーニンには次のようにもいっている。「帝国主義の批判ということ、我々は、社会の種々の階級が各々の一般イデオロギーとの関連において、帝国主義の対策に対してとる態度というふうな広い意味に理解する」この点でもっとも危険なのは帝国主義との闘争はもし日和見主義に対する闘争と不可分に統合されないから、空虚で為りの空文句にすぎないことを理解しようとのぞまない人々である」と。マルクスが「ヘーゲル法哲学批判序説」を書いた時、「天上の批判」を「地上の批判」にかえた時、「批判の武器」を「武器の批判」にかえた時、その目的はなんであったか、それはブルジョア社会・資本主義批判であった。それはただのイデオロギー的批判ではなかった。資本主義の軛から人類を解放するものが近代プロレタリアートであること、それこそが解放の武器であり、主力たりうることを主張したのである。ここにこそブルジョア社会・資本主義批判の意義がある。現代においても同様である。「資本主義・現代帝国主義批判」とは主体的にはとりもなおさず、何者が現代帝国主義の軛から日本・世界人民を解放する主力であるのか、そして、そのためにどのような世界的な政治的、階級的潮流と闘わねばならないのか。このことを明らかにすることなのである。『No 4』は全くこのことに答えていない。だからこそ、「下層プロレタリアート依拠論」だのという小ブル・ルンプロ革命論に陥いつたのである。だが、これは「赤軍派」に限ったことではないのだ。多くの革命党派はこのことを考えようとさえせず、帝国主義の諸特徴を断片的に寄

せ集めて、その場しのぎの「現状分析」をやって、したり顔をしている。せいぜいのところが「プロレタリアートとブルジョアジーの非和解性云々」という毒にも薬にもならないコンニャクみたいなことを言うしかないのである。

さて、(iii)「世界プロレタリアートの歴史的、実践的な、かつ実態的な総体の位置」についてみよう。これはすでに(i)の「ブルジョアジーとプロレタリアートとの関係」のところで書かれていることなのだが、「No 4」は世界革命の挫折||コミンテルンの敗北変質、過渡期社会、スターリニズムとして概括している。該当箇所を引用しよう。「帝国主義戦争を内乱へ」「帝国主義打倒」「党―赤軍―ソビエト」下からの高度な自然発生性の萌芽として、推進させると同時に、高度な目的意識性を、党から「世界同時革命||世界革命戦争」「世界党―世界赤軍―世界革命戦線」として、上からもちこむ、二重の組織過程を、「党の改組」「党と軍事」の問題解決を媒介にして統一して把えかえさねばならぬ。正に、かかる路線転換の問題をして、かつその総括をして、党の改組の問題をしてかつポリシエビキ党と、コミンテルンの、決定的な党内闘争、そして世界革命戦争派が、登場しえなかったことにこそ、世界革命の挫折とスターリニズムが、存在するのである。」(P 19)「疎外された過渡期社会(帝国主義に包囲された労働者国家)は、世界革命の挫折||ロシア革命の挫折によってプロレタリアートの階級的成熟の変容||ブルジョアの欲求の増大を結果し、それが一方では国内的には農業||小商品生産として不断に拡大される商品経済と結合し、他方では対外的には、資本主義の世界的な商品流

通と結びつき、それらが民族国家へと集約されつつ帝国主義列強との対立関係と相まって、世界革命||世界プロレタリア独裁とブルジョア化・民族主義||国社会主義との矛盾をつくり出したのである」(P 33)ここで批判されるべきことは何か? 世界革命戦争の恣意性・一面性あるいはスターリニズムについても、過渡期社会についてもすでに批判してきた。更に「世界党―世界革命戦線」についても世界革命戦争に対するものと同様の批判をすればよいだろう。(一面的、抽象的、平板的、夢想的なものでなく、多面的、具体的、重層的、現実的なものとして把えていくということだ)、ここで批判されるべきなのは、方法的には現代過渡期世界におけるブルジョアジーとプロレタリアートの基本的関係を位置づけそれを現代帝国主義(国家)の基本的動向、対応を通して、それから「世界プロレタリアートの歴史的、実践的な、かつ実態的な総体の位置」を把えかえそうとしたのに結果的にブルジョアジーとプロレタリアートの基本的関係の結論にまい戻っていることそれ自体にある。ここで追究しなければならなかったのは何か? それは実は総体として先進国プロレタリアート・革命運動の敗北にも拘らず、民族解放―社会主義革命が歴史の大道を歩み、多くの勝利を勝ちとり、今なお勝ちとりつつあるということである。

反スタ共産主義運動を形成し、受けつがれた。そしてその発展止揚が共産主義者同盟を普遍的形態とし、ゲバラ||カストロ、毛沢東を地方的形態として成熟してきたのである。」この強調部分の転倒・思ひ上がりは、今や歴然としている。

何故コミンテルン第二回大会に於て「民族問題と植民地問題」が大きな比重をもってとりあげられたのか? それはその民族解放闘争が世界革命の一翼として緊急の課題となったからに他ならない。だからこそ、コミンテルンは「地主ブルジョアジーを打倒するために、革命闘争のために、あらゆる民族、あらゆる国のプロレタリアートと労働大衆をお互いに接近させることが民族問題と植民地問題にかんするコミンテルンの全政策の重点とならなければならない」と宣言したのである。毛沢東主席は一九四〇年一月「新民主主義論」に於いて、「一九一七年ロシア革命以降、新ブルジョア民主主義革命は世界プロレタリア革命の一部をなす」ようになったとしてプロレタリア階級を指導階級とする革命的階級の連合独裁の新民主主義社会建設を訴えた。そうなのだ、ロシア革命以降、それまで、ブルジョアジー地主によって担われていた民族解放闘争は、プロレタリア貧農にヘゲモニーを移し、民族解放・民主主義革命闘争はソヴィエト・ロシアと結びつき世界革命と結びつき、社会主義と結びつこうようになったのである。このことを理解せず、コミンテルンの変質とスターリニズムの発生と先進国革命の挫折ばかりみているところに「世界プロレタリアートの歴史的・実践的なかつ実態的な総体の位置」などわかるはずはないのだ。レーニンの「万国のプロレタリアート・被抑圧民族人民、団結せよ」

※「No 4」第四章に次のような箇所がある。「過渡期世界の成熟とともに市民は帝国主義との恒常的同盟―構成要素へと転化し、レーニン主義の修正派||スターリン主義を過渡期世界||現代帝国主義の補完者として生み落とす、マルクス・レーニン主義は

を理解し抜くことである。「理解し抜く」とは民族解放―社会主義革命戦争の世界的歴史の意義を明確に評価すると同時に、先進国プロレタリアートの労働運動・社会主義革命の役割も又、決して低めることなく、※世界革命は唯一第三世界の窮民にあるという、後進国発射台論を今なおふりかざすバカどもを見よ、彼らは現実には帝国主義の先兵として、侵略戦争をたきつけ世界人民を弾圧せよと叫んでいるのだ、何という愚劣／何という墮落／プロレタリアート・被抑圧民族人民の団結を固めよ、ということである。

#### 5 現状分析について

「No 4」の「第四章、過渡期世界とプロレタリア・党」は本来、「現状分析として展開されるはずだったようだが、結果的には、現実形態的分析の歴史的展開になっていて、現状分析そのものは粗雑にしか書かれていない。又、世界革命戦争、世界―世界赤軍―世界革命戦線のア・ブリオリな設定が厳密な分析を妨げている。だからここではごくごく簡単にみておくにとどめる。(i)の「ブルジョアジーの攻撃のあり方」では、現実形態的分析の現代帝国主義論のくりかえしが殆んどである。ただ、「帝国主義世界秩序の巨大な変更がNATO・安保再編―なし崩しファシズムとして展開し、それが新たな侵略反革命戦争の序曲であり、この戦争が巨大で、世界的であり、「労働者国家」をまきこまずにはおかない」と主張しているだけである。ここは安保反革命同盟再編が沖繩―返還―を基軸に、米日アジア侵略・反革命戦争体制の強化・再編となること。即ち、沖繩を侵略反革命の前線基地として、日帝が

「韓国」・台湾ら極東アジア地下の防衛―侵略を主体的に担わんとせんとしていること等々に全くふれられていない。あとから何やかやというのは気がひけるものだが、とにかくそういう具体的なことに全くふれていないことに驚ろく他はないのである。現状分析そのものについては、「菩薩」の敗北の総括として書かれたパンフ「赤軍No 5、6、7」とくに「No 7」に出されているが、いざれにせよ緻密さに欠けていたことは事実だと思ふ。(ii)の「プロレタリアートの対応の在り方」については、世界的にはベトナム臨時革命政府、PLAS・パレスチナ解放統一機構、ソ連、東欧、北朝鮮、北ベトナムにふれているがアジアの社会帝国主義―社会ファシズムへの転化、修正主義・スターリン主義派の人民戦線の反革命への転落、現代アナルコサンディカリズムと中央派的新スターリニズム派、そして世界革命戦争としての我々への分裂とし、当面の党派闘争の課題は中央派―新スターリン主義的傾向との闘いであると主張している。これが現在からみれば、いかに狭い視野であるかは歴然としている。我々自身が、未熟な小ブルジョア革命(戦争)派でしかなかったのである。(今はそれに言及するつもりはないが)さて、ここにおける批判は、現状分析に「ブルジョアジーの攻撃のあり方」「プロレタリアートの対応のあり方」に限定していることである。レーニンは言う「戦術はその国家(とそれをとりまく諸国家、および世界的な規模からみたらすべての国家)のすべての階級勢力を冷静に厳密に客観的に評価し、また革命運動の経験を評価して、その評価にもとづいてう

ちたてられなければならない。」「(政治の)科学は第一に、他国の経験を考慮に入れることを要求する。同じく資本主義国である他の国が非常によくにた経験を現に成しているか、あるいは最近なめた場合はとくにそうである。第二に科学はその国のなかで行動している勢力、グループ、党、階級、大衆のすべてを考慮に入れること、けっしてただ一つのグループまたは党の願望と見解、たたかおうとする意識と覚悟の程度だけをもとにして、政策を決定しないことを要求する。」「共産主義内の「左翼主義」小児病」)、私はこのレーニンの言葉を以前にも引用した。だが、このレーニンの忠告は何度も何度もかみしめるように脳髓にたたきこんでおかねばならないものである。我々は日本(と世界)の行動している勢力、グループ、党、階級、大衆のすべてを冷静に、厳密に、客観的に分析したか? 否／否／くやしいが否／なのだ。「悲劇」は否／と叫ぶのだ。

#### 6 狭義の革命論・戦略戦術について

最初に書いておいたように、「No 4」では、この分析と主張にあてられるはずだった第五章は書かれずじまいになっており、具体的な批判は展開できない。ただ、「No 4」の結論・主張―戦略的スローガンは、第一ページに大きく、掲げられている。即ち、「☆なし崩しファシズム―侵略―反革命戦争との闘いを世界革命戦争へ／ ☆世界同時革命／ ☆世界党―世界赤軍―世界革命戦線を創出せよ」と。実に壮大なスローガンである。戦術上のスローガンを加えるならば、「六九年秋、日米反革命同盟再編・安

保決戦に前段階蜂起を貫徹し、世界革命戦争の対時段階を切り拓き、日本を世界革命戦争の戦場とせよ」とでもなるだろう。すでに行なってきた私の批判を前提とした上で、これらの夢想は大いに結構なことであるといいたい。熱愛しなければ、失恋もないし、信頼しなければ、裏切られもしない。そして夢想しなければ、現実を知ることもない。だがこれらのスローガンの壮大さにも拘らず、これらは客観的には、六八年末以来急速に肥大、強化された「機動隊政治」をいかに打ち破るかに対する答えでしかなかったといえる。



## 補章 弁証法について

私自身、未だ未熟な革命兵士であることを自覚しつつ、それでも「一元論か、二元論か、多元論か、」などという不毛な論議を避けるために、そして、なにより折衷主義、小ブル観念主義、俗唯物論論に対して、レーニンや毛沢東の教えを確認しておきたいと思う。

### 1 レーニンの折衷主義批判

一九二一年一月二五日付で、レーニンは『ふたたび労働組合についで』、現在の情勢についで、トロツキーとブハーリンの誤りについて』を書いた。その折衷主義批判の部分を取りあげてみよう。トロツキー派とレーニン・ジノヴィエフ派との間の「緩衡派」を自称するブハーリンは次のように言った。「同志ジノヴィエフは労働組合は共産主義の学校である、と言ったが、トロツキーは、これは行政的・技術的生産管理機構である、と言った。私には、前者あるいは後者が正しくないということを証明するような論理的根拠は、まったく思いあたらない。この命題は二つながら正しく、これらの両命題の結合が正しいのである」と、更に、こう言う「同志諸君、諸君の多くは、ここでおこなわれている論争が

ら、およそ、つぎのような印象をうけたことであろう、ふたりの人がやってきて、演壇の上にあるコップはいったいなんなのかと尋ね合うとする。ひとりと言う、『これはガラスの円筒である。そうでないという者は犬にでも食われる』。と、他のひとりと言う『コップは飲むための道具である。そうでないと言う者は犬にでも食われる』とこれに対し、レーニンは大上段から批判する。「学校で教えるのは形式論理学にかざられている……が、この形式論理学はもっとも普遍なもの、あるいはもっとも頻繁に目につくものをたよりにして、形式的規定を採用し、それだけにとどめる。もし、このばあい、二つないし、それ以上の異なる想定をとって、それらを（ガラスの円筒と、飲むための道具とを）まったく偶然に結合すると、対象のさまざまな側面を示すだけの折衷的規定が得られる。

弁証法的論理学は、われわれがもっとさきへ進むことを要求する、対象をほんとうに知るためには、そのすべての側面、すべての連関と「媒介」を把握し、研究しなければならぬ。われわれはそれを完全に達成することはけっしてないだろうが、全面性の要求は、われわれが誤りや硬化に陥るのを防いでくれる。これとりあげ方全体、問題提起全体―あるいは、お望みなら問題提起の全方向と言ってもよい―を分析しようとする試みも、跡かたもないからである。

が第一。第二に、弁証法的論理学は、対象をその発展、「自己運動」（ヘーゲルがしばしば言っているように）、変化においてとりあげるように要求する。このことはコップについては、すぐには明らかにならない。だが、コップとして、普通のままではいえない。また、とくにコップの用途、その使い方、その周囲の世界との連関は変化する。第三に、人間の実践全体が、真理の基準としても、対象と人間が必要とするものとの連関の実践的規定者としても、対象の完全な「規定」に含まれなければならない。第四に、弁証法的論理学は、故ブレハノフがヘーゲルにならって好んで言ったように、「抽象的真理というものはない。真理はつねに具体的である」ことを教えている。

いうまでもなく、弁証法的論理学の概念は以上につきるわけではない。しかし、さしあたっては、これで十分である。そこで、コップから、労働組合とトロツキーの政綱に移ってもよいだろう。ブハーリンは次のように言い、またそのテーゼに書いている。「一方は学校であり、他方では機構である」。トロツキーの誤りは、彼が「学校という契機を十分に擁護していない」点であり、ジノヴィエフの誤りは、機構という「契機」について不十分であること。

なぜこのブハーリンの立証は死んだ、無内容を折衷主義なのか？ なぜなら、ブハーリンにあっては自主的に、自分自身の立場から、当面の論争の歴史全体を分析しようとする試み（マルクス主義、すなわち弁証法的論理学はそれを無条件に要求しているのだが）も、また当面の時期、当面の具体的事件のもとの問題の

もっと明瞭に説明するために、一例をとろう。私は中国南部の蜂起者や革命家については、まったくにも知らない（私が何年も前に読んだ孫逸仙の二、三の論文と数冊の本と新聞論説のほかに）。そこで蜂起が起っている以上、おそらく、蜂起はもっとも激烈な、全民族をとらえた階級闘争の産物であると論じる中国人第一号と、蜂起は兵術であると論じる中国人第二号とのあいだの論争もあるだろう。「一方では……、他方では……」というブハーリンのテーゼ式のテーゼなら、私はそれ以上にも知らないで書くことができる。一方では兵術。「契機」を十分に考慮しなかった。他方では「激化の契機」を十分に考慮しなかった。等々と。それは死んだ、無内容を折衷主義となるだろう。なぜなら、当面の論争、当面の問題、その問題のとりあげ方、等々の具体的研究がないからである。

労働組合は、一つの側面からみれば、学校である。第二の側面からみれば、機構である。第三の側面からみれば、勤労者の組織である。第四の側面からみれば、ほとんど工業労働者だけの組織である。第五の側面からみれば、産業別の組織である。その他、等々。なぜ、この問題もしくは対象の第三第四、第五等々の「側面」を考察しないで、最初の二つの「側面」だけを考察しなければならぬのか。ということについては、ブハーリンはどんな論証も、どんな自主的分析も、跡かたもない。だからこそ、ブハ

リン・グループのテーゼは、徹頭徹尾、折衷主義的空語である。

こうして、レーニン「当面の論争では……」労働組合はあらゆる側面からみて学校である」という結論を導いていくのであるが、ここではその結論が問題なのではない。「折衷主義」批判を学びとることが問題である。それは人民の軍隊とは？」「革命の軍隊とは？」と問う時に革命的な方法を与えよう。

## 2 レーニンの「対立面の統一」論（折衷主義でなく、真の「統一」論—弁証法の問題について。）

国民文庫版のレーニンの『哲学ノート』を見るとわかるように、

『弁証法の問題について』 一九一五年、執筆。

「一つのものを二つに分け、この一つのものの矛盾した二つの部分を認識すること……は、弁証法の核心（本質）の一つ、唯一の根本的特性あるいは特徴でないまでも、根本的な特性あるいは特徴の一つである」

「弁証法の内容のこの側面の正しさは、科学の歴史によって検証されなければならない。弁証法のこの側面には、通常……十分な注意がはらわれていない。対立面の同一は実例の総括と解されて「たとえば種子」とたとえば原始共産主義、エンゲルスにあって同じである。しかしこれは、通俗化のためである……」「認識の法則（および、客観的世界の法則）」とは解されていない。

数学では、十と一。微分と積分。

力学では作用と反作用。

物理学では陽電気と陰電気。

社会科学では階級闘争。

「対立面の同一（おそらく対立面の）統一」と言うほうが正しいのではないか？とは、自然（精神も社会もふくめて）の全ての現象と過程とのうちに矛盾した、たがいに排除しあう、対立した諸傾向を承認すること（発見すること）である。世界のすべての過程を、その「自己運動」において、その自発的な発展において、その生きいきとした生命において認識する条件は、それらに対立面の統一として認識することである。発展は対立面の「闘争」である。この二つの根本的な（あるいは二つの可能な？あるいは歴史上に見られる二つの？）（発展（進化）観は、つぎのものである。…減少および増大としての、反復としての発展、および対立面の統一（一つのものがたがいに排除しあう二つの対立面に分裂すること、および両者の相互関係）としての発展、である。……第二の運動観にあっては、おもに注意はまさに「自己運動の源泉の認識に向けられる。……第二の考えは、生きている。第二の考えだけがすべての存在するもの」「自己運動」を理解する鍵をあたえる。…それだけが、「飛躍」「漸次性の中断」「対立面への転化」、古いものの消滅と新しいものの出現を理解する鍵をあたえる。

「対立面の統一（合致、同一、均衡）は条件的、一時的、経過的、相対的である。たがいに排除しあう対立面の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である。」

「NB・主観主義（懷疑主義と詭弁、等々）と弁証法との区別は、とりわけ、（客観的）弁証法においては、相対的なものと絶対的なものと区別もまた比較的（相対的）だということにある。客観的弁証法にとって、相対的なものうちに絶対的なものがある。主観主義と詭弁にとっては、相対的なものはひたすら相対的であって、絶対的なものを排除する。」

「マルクスの『資本主義論』では、最初に、ブルジョア（商品生産）社会のもっとも単純な、もっとも普通な、もっとも根本的な、もっとも大量な、もっとも日常的な、何十億回となく出くわす関係、すなわち商品交換が分析されている。その分析は、このもっとも単純な現象のうち（ブルジョア社会のこの「細胞」のうち）に、現代社会のすべての矛盾とこの社会との発展を（成長をも、運動をも）、その発展の個々の総和において、その発展の始めから終りまで、我々に

「ラッサール批判」と「アリストテレスの論文の摘要」の間に「弁証法の問題について」というページ数にして、五ページにみえない一断章がはさまっている。しかし、この一断章は読めばわかるように、一つ一つの文章が深く輝いている。前節で折衷主義を批判したから「統一」論ともいえるべき、この断章をノートしておく、ついでに言っておけば、毛沢東同志の矛盾論はこの断章をもとにして発展させたものなのです。（下線の——もくもくも全てレーニン自身の強調です。）

## 『資本論』の分析方法

『矛盾論』「五 矛盾の諸側面の同一性と闘争性」へ発展する

示している。▽

《弁証法一般の叙述（あるいは研究）の方法も、またこのようなものでなければならぬ。もつとも単純なもの、もつとも普遍的なもの、もつとも大量的なもの、等々からはじめること……」のような任意の命題からはじめること。すでにここには個別的なものは普遍的なものである」という弁証法がある。……つまり対立物（個別なものに對立している）は同一である。…個別的なものは、普遍的なものへ通じる連関以外には存在しない。普遍的なものは、個別的なもののうちだけにだけ、個別的なものを通じてだけ存在する。あらゆる個別的なものは、（いづれにしても）普遍的なものである。あらゆる普遍的なものは、個別的なもの（一部分あるいは一側面あるいは本質である。あらゆる普遍的なものは、すべて個別的な事実をただ近似的に包括するだけである。あらゆる個別的なものは普遍的なものの中にはいない。等々、あらゆる個別的なものは、何千もの移行によって、他の種類の個別的なもの（もろもろの事物、現象、過程）に連関している。等々、すでにここに、自然の必然性、客観的連関、等々の要素、萌芽、概念がある。偶然なものとの必然的なもの、現象と本質とが、すでにここにある。なぜなら、我々がイヴァンは人間である。ジューチカは犬である、これは木の葉である、等々と言うとき、我々は多くの微表を偶然的なものとして捨て去り、本質的なものを現実的なものから區別し、一方を他方に對立させるからである。▽

《このようにして、我々は任意の命題のうち、細胞〃（〃小細胞〃）のうちでそうであるように、弁証法の全ての要素の萌芽をあげきだすことができる。（また、あげきださねばならない）このようにして、弁証法が総じて人間のすべての認識に固有なものであることがしめされる。そして自然科学は、客観的自然が個別的なものへの、偶然的なものとの必然的なものへの転化、対立物のもろもろの移行、変移、相互連関という同じ諸性質をもっていることを我々にしめしている。弁証法こそ、マルクス主義の認識論である。事柄のまさにこの〃側面〃（これは事柄の〃側面〃ではなく、事柄の核心である）に、ほかのマルクス主義者はいうまでもなく、ブレハノフは注意をほらわなかつた▽

弁証法的唯物論  
形而上学的唯物論  
反映論に弁証法  
を適用する能力

弁証法的唯物論  
哲學的觀念論

坊主主義〃へ生きた木についた  
あだ花▽

輕井沢統撃戦

「統一」論といつても、簡単に見ただけでも以上のように複雑（言葉がよくなく「深」といふかえよう）である。レーニン自身、「ヘーゲル論理学の摘要」のなかで次のように書いている。「弁証法は簡単に對立物の統一の学説と規定することができる。これによって弁証法の核心はつかまれるだろうが、しかし、これは説明と展開とを要する。↓分析と結合、矛盾性・矛盾した諸力と諸傾向」（「哲学ノート」上、P 191）よく弁証法を理解しないで、（とさうことは対象をよく分析しないで）高校時代に習う「正・反・合」なんてふりまわすと、とんでもないことになるだろう。

《現実へのあらゆる接近の仕方、近づき方の無数の色あいをもつ（それぞれの色あいから一つの全一体に成長してくるところの哲学体系をもつ）、生きいきとした、多面的な（その側面の数がたえず増大しているところの）認識としての弁証法——そこには、形而上学的な唯物論にくらべて測りしれないほど豊富な内容がある。この後者の根本的な不幸は反映論に認識の過程と発展とに弁証法を適用する能力がないことである。▽

《弁証法的唯物論の見地からすれば、哲學的觀念論は認識の特徴、側面、限界の一つを物質、自然から切りはなされた、神化された絶対者へと、一面的に誇大に過度……発達させ（膨脹させ、ふくらませ）たものである。觀念論は坊主主義である。そのとおりだ。しかし、哲學的觀念論は（〃より正しく言えば〃そして〃そのほかに〃）人間の無限に複雑な（弁証法的な）認識の色合の〃一つをとらえて坊主主義にいたる道なのだ▽

《坊主主義（〃哲學的觀念論）には、もちろん、認識論的な根がある。坊主主義は根拠のないものではない、それは疑いもなくあだ花であるが。しかしそれは、生きいきとした実を結ぶ、真の、強力な、（全能な、絶対的な人間認識の、生きた木についたあだ花なのである。▽

### 3 毛沢東同志の「矛盾論」

毛沢東同志はレーニンの『弁証法の問題について』を中国革命戦争を指導する立場から発展させた。毛沢東同志は弁証法の中の該心たる、事実の対立性、即ち「矛盾」に焦点をあて、それを深く分析した。それは中国革命戦争、社会主義建設の全ての理論的、思想的基礎となっている。それは『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』へうけつがれ、中国文化大革命を導いた。ところでこの「矛盾」に焦点をあてて、分析し、総括し方策を導びき出す方法はレーニンに於て最も重要な方法であった。レーニン

は『ソヴェト権力の当面の任務』（一九一八年）で次のように言っている。「革命家であるということ、あるいは一般に共産主義者であるということだけでは不十分である。それぞれの特定の時機に鎖の特定の環を、すなわち、鎖全体をおさえ、そして次の環への移行をしっかりと準備するために、全力をあげてつかまねばならない、鎖の特定の環を見つけたことができなかったならばならない。この場合、諸事件の歴史的連鎖におけるいろいろの環

の順序、その形態、そのつながり、その相互の差異は、鍛冶屋がつくる普通の鎖ほど単純でなく、またそれほど素朴なものでもない。」レーニンは時の主要な問題の解決に抜群の集中力をもっていった。（トロツキー『レーニン』河出書房刊）それは天性であったかもしれない。しかしその集中力を一つの焦点にあわせて「一つの環」を見つげ出し、しっかりと全力をあげて把えることはこの弁証法なくしてできない。

『矛盾論』 一九三七年八月

△事物の矛盾の法則、すなわち対立面の統一の法則は、唯物弁証法のもっとも根本的な法則である▽

「本来の意味においては弁証法は対象の本質そのものにおける矛盾の研究である」（レーニン）  
デボリン学派批判

一、二つの世界観

宇宙の発展法則について形而上学と弁証法的見解、

△形而上学の世界観とは反対に、唯物弁証法の世界観は事物の発展を事物の内部から、また、ある事物の他の事物に対する関係から研究するように主張する。即ち、事物の発展を事物の内部の必然的な自己運動とみなし、また一つ一つの事物の運動は、すべてその周囲の他の事物とたがいに連係しあい、影響しあっているものとみる。事物の発展の根本原因は事物の外部にあるのではなくて、事物の内部にあり、事物の内部の矛盾性にある。どんな事物の内部にもこうした矛盾性があり、そのために事物の運動と発展がひきおこされる。事物のこの矛盾は事物の発展の根本原因であり、ある事物と他の事物がたがいに連係しあい、影響しあうことは事物の発展の第二義的な原因である▽

内部矛盾性と  
他との連係

内部矛盾性と他の連係の位置は、「革命」に於ては、路線（綱領）面と戦略面に照応する興味深いものです。というのは戦略面とは、革命における「敵味方の攻防」の側面のことであり、革命路線（綱領）とは、その「敵味方の攻防」を包摂しつつも「プロレタリア、被抑圧人民の成長」に基軸があるからです。勿論、「路線」の外的攻防側面の重要な環を「戦略」と呼ぶのであって、可分であると同時に不可分である関係ですから、単純に内部矛盾性と他との連係に結びつけて理解してはだめです。ついでに言えば、パンフ『赤軍No.4』はプロレタリアートの歴史を戦略面から（つまり攻防面から）把えかえした画期的なものです。そうだからこそ路線（綱領）としては不十分なのです。——松田

△社会の変化は、主として社会の内部の矛盾の発展、即ち、生産力と生産関係との矛盾、新旧の間の矛盾によるものであり、これらの矛盾の発展によって社会の前進が促がされ、新旧社会の新陳代謝をうながされる。では唯物弁証法は、外部的原因を排除するものだろうか。排除しない。唯物弁証法は外因を変化の条件、内因を変化の根拠とし、外因は内因を通じて作用するものと考ええる。鶏の卵は適当な温度をあたえられるとひよこに変化するが、石ころは温度を加えてもひよこにはならない。それは両者の根拠が違うからである。▽

この外的条件、内部根拠について注意しておかねばならないのは、おうおうにして、この内的根拠（内因）を俗物的に解釈して、主体性論者、運命論者に変身してしまうことがあることである。それについてはレーニンの折衷主義批判のところを読み返してほしいが、ここでは、ただ、内因をその歴史性、場所性において把えるべきだ※ということだけを言っておく。

※いや、これだけでは不十分すぎる。特に、外因と内因の連係において把えるということが抜けてはダメだ。ここでも両者は可分であると同時に不可分なのだ。——松田

## 二、矛盾の普遍性

△矛盾の普遍性、絶対性①矛盾があらゆる事物の発展の過程に存在すること。②どの事物の発展過程にも始めから終りまで矛盾の運動が存在すること

「運動そのものが矛盾である」(エンゲルス『反デューリング論』)、レーニン『弁証法の問題について』

△全ての事物のなかに含まれている矛盾の側面の相互依存と相互闘争はすべての事物の生命を決定し、すべての事物の発展を推進する。▽

△新しい過程はまた、新しい矛盾を含んでいて、それ自身の発展史がはじまる▽

例えば『弁証法の問題について』のマルクス「資本論」の分析方法の部分。

「その分析はのもっとも単純な現象のうち……現代社会のすべての矛盾とこの社会との発展を(成長をも、運動をも)その発展の個々の部分の総和において、その発展の始めから終りまで我々に示してゐる」

## 三、矛盾の特殊性

△いかなる運動の形態にも、その内部にそれ自身の特殊の矛盾がふくまれている。▽

△特殊から一般へ、一般から特殊へ……認識の二つの過程である▽

・△物質の一つ一つの大きな体系としての運動形態がもつ特殊な矛盾性と、それによって規定される本質を研究しなければならぬばかりでなく、物質の一つ一つの運動形態の長い発展途上で一つ一つの過程の特殊な矛盾とその本質をも研究しなければならない▽

△質の異なる矛盾は質の異なる方法でしか解決できない▽

・△事物の発展過程における矛盾がその全体のうちで、相互に結びつきのおうえでもっている特殊性をあげ出すには、つまり、事物の発展過程の本質をあげ出すには、過程における矛盾の、それぞれの側面の特殊性をあげさなければならぬ。そうしなければ過程の本質をあげさだせない▽

△矛盾の各々の側面を理解するということは、その一つ一つの側面がどんな特定の地位をしめ

△一つ一つの過程の特殊な矛盾と本質▽

△発展過程の本質  
各々の側面の特殊性

△全面性の要求▽

△各々の段階の特徴▽

←分析—  
運動形態の矛盾  
その発展過程のもつ矛盾  
その各々の側面  
発展過程の発展段階のもつ矛盾  
その側面

同一性||△共存と転化▽

△どんな条件のもとで……▽

ているか、各々どんな具体的ななかたちで相手とたがいに依存しあいながらたがいに矛盾しあう関係をもつか、また、たがいに依存しあいながら、たがいに矛盾しあうなかで、その依存が破れたのちに各々、どんな具体的な方法で相手がたと闘争するかを理解することである▽

「具体的状況を具体的に分析する」(レーニン)

- ・△問題を研究するには、主観性、一面性、および表面性をおびることは禁物である▽
- ・△事物の発展の全過程における矛盾の運動に対して、その相互の結びつきとそれぞれの側面の状況において、その特徴に注意しなければならないばかりでなく、過程の発展の各々の段階にも、やはりその特徴があり、それにも注意しなければならない▽
- △どんな矛盾の特性を研究するにも、つまり、物質の各々の運動形態がもつ矛盾、それぞれの運動形態が各々の発展過程でもつ矛盾、各々の発展過程でもつ矛盾の各々の側面、各々の発展過程が、各々の発展段階でもつ矛盾、および各々の発展段階の矛盾の各々の側面など、主観性をおびず、具体的分析する▽
- △個性がなければ通性はない▽
- 四、矛盾の諸側面の同一性と闘争性

△同一性、統一性、一致性、相互浸透、相互貫通、相互依頼(依存)相互連絡、相互協力は同じ意味で、次の二つのことをいっている。第一、事物の発展過程における一つ一つの矛盾のもつ二つの側面はそれぞれ自己と対立する側面を自己の存在の前提としており、双方が、一つの統一体のなかに共存していること、第二、矛盾する二側面は一定の条件によってそれぞれ反対の側面に転化してゆくということ▽

「弁証法とは、対立面がどうして同一であることができ、どのようにして同一であるのか(どのようにして同一となるのか)——それらはどんな条件のもとで同一であり、たがいに転化しあうのか、——なぜ人間の頭脳はこれらの対立面を死んだ凝固したものとしてではなく、生き条件を可動的なたがいに転化しあうものとして見なければならぬのか、ということにつよつての学説である」(レーニン)

### △矛盾の性質▽

△統一は相対的、闘争は絶体的▽「弁証法の問題について」を見よ。  
 △すべての過程には始めと終りがある。すべての過程は自己の対立物に転化する。すべての過程の常住性は相対的であるが、ある過程が、他の過程に転化するという変動性は絶対的である▽  
 △同一性のなかに闘争性が存在し、特殊性のなかに普遍性が存在し、個性のなかに通性が存在している。レーニンのことばをかりていえば「相対的なもののなかに絶対的なものがある」のである▽

### 六、矛盾における敵対の位置

△敵対とは矛盾の闘争形態のすべてではなく、矛盾の闘争形態の一つにすぎない。▽

△矛盾と闘争とは普遍的であり、絶対的であるが、矛盾を解決する方法、すなわち、闘争の形態は、矛盾の性質の違いによって異なる。一部の矛盾は公然たる敵対性をもつが、一部の矛盾はそうでない▽

### △敵対と矛盾▽

「敵対と矛盾とは、全く異なったものである。社会主義のもとでは、前者は消失するだろうが後者は存続するだろう」(ブハーリン『過渡期の経済』への評注「レーニン」)

「敵対と矛盾、闘争の区別は決定的に重要です。「一般的状況のもとでは、人民内部の矛盾は敵対性のもではない。しかし、その処理が適切でなかったり、警戒心をうしななって油断していたりすると、敵対が生ずることもありうる。」(『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』)

### 4 毛沢東同志の主観主義(特に教条主義)批判

最後に、毛沢東同志の教条主義批判たる『実践論』を見てみよう。『毛沢東選集』の解題によると「一九三一年から三四年にか

けて教条主義の思想はきわめて大きな損失をもたらした、」とある。一九二七年の蔣介石の反共クーデター以後、都市部の共産党は混乱をきわめ、三〇年代半ばには組織はメチャメチャになってしまった。それは、ロシア革命直輸入のソヴェト型革命を中国

の具体的、特殊の状況を無視して遂行しようとした李立三、王明ら教条主義路線の結果です。<sup>ソウニイ</sup>邁義で、長征途上共産党の指導権を確立した毛沢東同志は延安に入って、この教条主義に対し理論的に結着をつけようとした。それが『実践論』です。ところで、毛沢東同志にしては正しくない箇所があるので、それをまず批判しておこう。誰でもそうかもしれないが私も毛沢東同志の著作で最初に読んだものが、この「実践論、矛盾論」だったのですが、そこに「梨の味は食べてみないとわからない」というところがある。それを見つけて、ゲンナリして、一遍に毛沢東同志を軽べつし、俗物経験主義者ときめつけて、それ以降、毛沢東同志のものは読む気がしなくなりました。実はこの俗物経験主義には思ひ出があるのです。私が家で浪人生活をしている頃、どっちかといえば論争好きで、創価学会(私は大嫌いだったのですが)の若い人をよんで家で論争している時、その一人が、そこにあるお菓子をさして「お菓子の味は食べてみないとわからない」と言ったのです。要するに例の如く、「学会に入ってみないとその正しさ、よさがわからない」と言いたかったのでしょう。しかし、それは馬鹿らしい主張です。何故なら、私は「味」について語っているのではないからです。むしろ、この例でいえば、この菓子に毒はないか、あるいは栄養価は糖分はどの位あるのか、といったことを考えて

いるのです。それは食べてみるだけでは全く不十分で、科学的実験、分析することが必要なのです。それも、もちろん経験のうちに入ります。しかし、「食べる」という経験とは質的に異なっています。私は思うのですが、物事の「味」というのは芸術の部類に入るのではないのでしょうか? 人生の味、自殺者、苦惱者の心境、老境、それらはまさしく個人自身にならねばわかりません。その感情感覚は個々別々のものです。芸術は感覚を最も大事に扱います。人間生活における「味」の領域の芸術であるといってもよいと思います。しかし、とにかく、私たちにあって、今は「味」の領域を考察しているわけではなく、革命的理論と実践の領域について考察しているので、俗物的経験主義は批判されねばなりません。今でも、毛沢東同志のこの「梨の味は食べてみないとわからない」という主張は一つの真理※ではあっても、誤りを生みやすく、非常に不正確ないい方であると思っています。ところで、この『実践論』はレーニンの『ヘーゲル論理学の摘要』に依って書かれています。(特に「概念論」の「A)主観的概念」のところ)、それとあわせて読むことが理解を深めるでしょう。

※ 感性的認識より、理性的認識を得る第一段階を始めるという意味では正しく。

### 『実践論』(一九三七年七月)

副題: 認識と実践の関係——知と行の関係について、

・△マルクス以前の唯物論は人間の社会性から離れ、人間の歴史的实践から離れて認識の問題を

考察したので、社会的実践に対する認識の依存関係、即ち生産および階級闘争に対する認識の依存関係を理解できなかった。▽

△まず第一に、マルクス主義者は、人間の生産活動がもつとも基本的な実践活動で、その他のすべての活動を決定するものであると考える。▽

△(生産活動が)人間の認識の発展の基本的な源である。▽…次に、他の社会的実践にふれて△特に様々な形態の階級闘争は人間の認識の発展に深い影響をあたえる。階級社会では誰でも一定の階級の地位において生活しており、どんな思想でも階級の烙印をおされていけないものはない。▽

△マルクス主義者は人びとの社会的実践だけが外界に対する人びとの認識の真理性をはかる基準であると考える。…つまり予想した結果をえようとするなら、必ず自分の思想を客観的外界の法則性に合致させなければならぬ▽「失敗は成功のもと」△弁証法的唯物論の認識論は実践を第一の地位にひきあげ、人間の認識は実践から少しでもはなれることができないと考えており実践の重要性を認めず、認識を実践から切り離す全ての誤った理論をしりぞける。…「実践は(理論的)認識よりも高い。なぜなら、実践はたんに普遍性という長所をもつだけでなく、直接的な現実性という長所ももっているからである。」(レーニン)▽

「人間の意識は客観的世界を反映するだけでなく、それを創造しもある」(レーニン)又、レーニンはこうも言う。「真理は過程である。人間は主観的理念から「実践(と技術)」を経て客観的真理へと進んでいく」と。

△(弁証法的唯物論の著しい特徴) ①プロレタリア階級に奉仕する。②実践性、「認識あるいは理論が真理であるかどうかは…客観的に社会的実践の結果がどうであるのかによって判定するのである」▽

感覚・印象↓概念↓判断…判断

△社会的実践の継続(感覚と印象)認識過程における質的激変(飛躍)がおこり、概念がうまれ

↓論理的認識  
(思想)

れる。…判断と推理の方法を使っていけば理論にたった結論を生み出すことができる、…これが認識の第二段階である。認識の真の任務は感覚をつうじて思惟にたつこの過程との間の内部的なつながりを理解するようになること、つまり論理的認識に達することにある。▽

「全ての事物は推理であり、特殊性によって個別性と結びつけられているところの普遍的なものである。しかし、勿論、事物は三つの命題からなる全体ではない」(ヘーゲル) 個別—特殊—普遍、特殊—個別—普遍。

「概念の客観性、個別的なもの、および特殊なものにおける普遍的なもの客観性を否定することは不可能である。したがってヘーゲルは概念の運動における客観的世界の運動の反映を研究するとき、カントその他よりもずっと深いのである。ちょうど単純な価値形態、一つの特定の商品と他の商品との交換という個別な行為がすでに、そのうちに未発達な形で資本主義のすべての矛盾を含んでいるようにもともと単純な概括「普遍化」、諸概念(判断、推理etc)の最初でもっとも単純な形成がすでに、世界のますます深い客観的連関を人間が認識していくことを意味する。」(レーニン)

「ところで、実際には、主観性は、ただ有と本質からの発展の一段階であるだけで—その次にこの主観性は△弁証法的に△その制限を打ち破り▽そして、推理をつうじて客観へと展開していく▽(ヘーゲル)論理学の諸法則は、人間の主観的意識における客観的なものの反映である」(レーニン)

△もし、理性的認識が感性的認識からでなくてもえられるという考えなら、その人は観念論者である。▽

「生活・実践の観点は認識論の第一の、そして基本的な観点でなければならぬ」(レーニン) 「理論は革命の実践と結びつかなければ対象のない理論になる。同様に実践は革命の理論を指針

としなければ、盲目的な実践となる」(レーニン)  
▲無数の相対的真理の総和が、絶対的真理である。▼

我々「赤軍」は実践的には素朴実践主義者であった。それは決して悪いことではない。逆に非常によいことなのです。菩薩もH・J「F」も、M作戦も、それを実践しつつ学んできた。しかし、素朴実践主義(経験主義)は主観主義という意味で、教条主義と背中あわせのものなのです。だから容易に相互転化しあう。例えば、戦術面で一揆の蜂起(前段階蜂起)は従来のソヴェト運動という教条主義を批判したものであり、六九年安保決戦というさしせまった要求に応える実践的有效性をもったものであった。しかし、一度それを階級攻防全体を無視して遂行しようとする、教条主義へと転化し、革命の手足をしばってしまおう。それを又、実践的経験から批判し、ゲリラ戦術へ乗り移ると、今度それが、桎梏となって革命の手足をしぼる。理論的には教条主義、実践的には経験主義といった具合になってしまうのだ。いずれにせよ、普遍的な戦術、(あらゆる階級攻防に有効なという意味)なんてあるはずはないのであり、戦術が戦略をそして路線をもしばってはならない。勿論戦術は戦略、路線の反映ではあるのだけど。とにかく、教条主義・経験主義、双方の主観主義、(我々にとって小ブル観念主義・小ブル実践主義)を我々は克服していかなければならぬ。

## あとがき

私は、あの一連の「処刑」がいまわしいマスコミの手によって、報道され始めた時、何が何だか何もかもわからなくなってしまった。同志森たちをとにかく信ずるといふ一点をもって、残酷な悲しみを耐えたのだった。私はまず「レクイエム」(鎮魂歌)を書くことしかできなかった。詩なんぞ書いても何もできはしなかった。私は唯物弁証法を学び直し、「共産主義内の『左翼主義』小児病」を学習した。それが△補章Vと△IVVのノートである。そこには私の総括の直観を見出すことができるだろう。そして、次に冒険を書き始めた。最初のプランは△I△V裁判への姿勢と私的総括そして現下の情勢「△II△V日本の階級構成分析」「△III△V赤軍派の軌跡」として、(一)処刑と銃撃戦、(二)ボサツからハイジャック「F」へ、ハイジャック「F」からM作戦へM作戦から現在まで、(三)赤軍派の理論的総括、パンフ「№4」批判、を内容に予定していた。そして、△IV△Vとして「『左翼小児病』ノート」△V△Vとして路線問題と方針を扱い、(一)人民戦線戦略(戦術)批判、反米愛国路線批判、(二)中国共産党の人民外交の検討、(三)世界革命情勢分析、(四)我々の革命路線・方針、そして、△補章Vとして「弁証法について」を入れるというのが全体のプランであった。

しかし、叙述を進めるうちに「冒険」としては時間的に間にあわなくなることが明らかになってきたが、やたら諸問題に手を出し、焦る余り、分析をおろそかにしては元も子もなくなることはわかっていたので、当初の計画したプランを大幅に縮少し、変更した。だから、総括の中心課題として考えていた「組織問題」については殆んど、分析を深められずにいるし、叙述も中途半端になっている。組織問題が中心課題だというのは、我々の都市ゲリラ戦術への転換の際の組織的基軸が「軍の中の党」||「党の軍化、前衛軍化」であったからである。更に地下革命軍の統一戦線||地下革命武装勢力の問題、大衆戦線、大衆的統一戦線の問題も含めて、歴史的に(国際革命運動の歴史である)具体的に検討することがせまられているといえる。それを私は△III△Vの(一)、(二)で赤軍派の実践的、理論的分析のなかでやろうとしていたのだが、これを含めて、残りの多くの課題は別の機会にとりくむつもりである。

我々にとって今の最大の課題は日本(―世界)社会主義革命路線(綱領)である。だが、今の私には正直いって革命路線と革命戦略を区別するのが精一杯である。戦略についての分析についてはほぼ結論を出せるが、階級闘争全般を取り扱う革命路線を戦略



面から見るのになれきっている私には地道なことから初めるしかない。革命路線を確立するというのは、困難な仕事である。だが我々が整然と退却しつつ総力をあげて業をすすめるなら決って困難な仕事ではない。自らの闘いを緻密に分析総括し、日本プロレタリア人民の実践に真摯に学び、具体例と統計をまとめ、世界の革命運動、労働運動、社会主義建設に学び分析し、それらに世界のマルクス・レーニン主義の歴史的な貴重な文献を活学活用するならば、必ず、我々のそして世界の革命の発展に寄与する革命路線を確立することができるであろう。

私は「処刑」問題についての、およそ俗物的な批判・総括には殆んど目をくれなかった。それらについては既に、私は不十分なから人民救済会発行の獄中書簡集「連合赤軍と我々」に簡単な一文を発表し、批判してある。そんなに沼地にいきたくないがよいのだ。今そんなことにかまってはいられない。とにかく、皆の足をひっぱらないでくれたまえ。独りじゃ寂しいからといって。「人生そのものもまた、無限に空虚な、意気阻喪させる、絶望的な空白なページを人に向けている。空白のカンヴァスと同じように何ひとつ書かれていないページを、しかし、人生がどんなに空虚で死んだような姿を示そうとも、信実と精力と情熱をもち、腕に覚えのある人間は、そのために墮落はしない。彼は歩み入り、行動し、築きあげる。つまるところ彼は挫折するのだ。―世人は、それを廢墟だという……」これはゴッホの言葉である。私はゴッホをよく知っているわけではない。彼の画集をながめながらその解説のなかにあった一文が目がとまっただけである。挫折し

ようと廢墟とよばれようと、我々は墮落してはならないし、するつもりもない。「連合赤軍」の同志たちよ！同志たちも同様であろう。彼はベルギーの炭鉱に入り、教会に非難される程、最大の愛情をこめて、精神的に、労働者たちに福祉救済布教活動を行ないつつも、結局はその活動の徹底性故に教会をおわれ、挫折した。親友ゴーガンとの共同生活も結局は両者の個性の激しさが故に、(?)・破砕し、ゴッホはゴーガンを殺そうとして殺せず、自ら自分の耳をそぎ落とす結末で終わった。挫折であった。ゴッホの絵には「夜のカフェ」を描くにもその内部の社会矛盾の凝縮・ふきだまり・犯罪の根源といった印象を与えるものとその外部の小学生の絵のような間の抜けた明るさという印象を与えるものとがある。農村の絵もとびきり明るい人間たちを描いた「ラ・クロの平原」と群なす鴉だけの飛ぶ「鴉のいる麦畑」がある。現実の根源(何の根源かははっきりわからない。とにかく病的根源なのだ)へのめりこみつつ、「海の男」に「私は海よりもこの方がすきだ、なぜならここには人間たちがいるから」といわせる農民たちの働く平原を描き、又はカフェの上の空の星をばかてかく描くように、「明るさ」(それはゴッホの考える明るさなのだが)へ希望をかけているのだろうか？ 絵は書くものではないが一言いおう、腕に覚えのある者は墮落してはならない、腕に覚えのないものならなおさらである。歩み入り、行動し、築きあげる時挫折もあれば飛躍もある。我々にあるのはゴッホの描く、絶望的な「明」と「暗」ではなく、「暗」の中に芽生える「明」である。挫折の中に生起する飛躍であり、廢墟に生まれ育つ野草である。革命兵士と人民の

死のうめきの中に育つプロレタリア・農民の楽天的笑顔である。それ以外の未来はありえない。闘うことは楽しいことだ。

我々の若き世代はどんな若き世代だったか？ 我々の父たちは帝国主義戦争に直接傷ついた世代だった。私の父と同じ大正九年生まれの詩人鮎川信夫さんはつぶやく、 $\wedge$ 「何百万の死者の霊とともに、敗戦がぼくの魂を解放する」たえまなく出血している内部の世界で、おろかにもぼくはながいこと、そう信じてきたのだ(「もしも明日があるなら」)と、次の世代はアメリカの占領軍と屈辱された世代だった。アメリカに身を売るか、おどおどと屈辱され続けるかどちらかだった。それは大江健三郎のような羊人間を生みだして終った。その次の世代は60年安保のはつらつとした世代だった。そして我々の世代がやってきた。小ブル革命派、小ブル革命戦争派という生きのいい世代が、しかし、今それも次の世代に移行しようとしている。「銃撃戦」「処刑」は我々の世代の終焉だった。次の世代はどんな世代なのか、私はたのしみになっている。きつとすばらしい世代が登場するだろう。私もその世代に移行し、我々の世代の遺産をうけついでもらうことを願っている。

「連合赤軍の同志たちよ！我々は、ゴッホの描く腕に覚えのある人間でもなく、又、魯迅の描く『このような戦士』でさえもなく、同志たちの闘いを確実にうけつぎ飛躍をちとるだろう。

つつか会いたいけど、でもさようなら森のオヤジさん！もはやあなたを想って涙をこぼすこともない。あなたを想って詩を書きつこともない。もはや私はあなたとは違う一赤軍兵士だし、わた

し自身としての一赤軍兵士だし、人民全ての一赤軍兵士になるのだから、野草の如き赤軍兵士になるのだから。

五月二六日 夜八時五〇分 東京拘置所の独房にて

一赤軍兵士

松田 久

## 森同志に社会主義の勝利を誓う

以下送るのは、森恒夫同志が二月二四日記、二五日付で僕あてに書いた手紙の写しです。

森同志からは一月一日付、一月二四日付そして二月二五日付と計三通の手紙と電報七通受け取っています。他二通の手紙も七枚ぎっしり書きつめたのですが、現在早急に必要とする内容ではないと考えるので二月二五日付の僕あてで最後の手紙だけ送ります。森同志が自ら「制裁」するに到った直接の動機をアレコレと詮索することはあまり意味のないことと考えますが、彼がどのような政治的立場（総括の立場）になっていたかははっきりさせる必要があります。それは権力—マスコミのプタ共が「唯銃主義」の破産—あるいは「連合赤軍は思想的に破産したのだ」とデッチ上げていることに反撃するためです。敵権力にとって森同志の死は有利なものです。敗北の中から真実をつかみとり社会主義革命の発展のために闘い続ける者がいなくなることは願っていません。僕が彼の死に方に不可解を感じています（↑だから我々は彼の分も任務を遂行しなければなりません）

僕は彼が自ら果たすべき責務を放棄したことに怒りさえ感じています。僕の最愛なる同志であり、師であった森同志がこんな愚

行をするなんて考えもしなかった。確かに許し難い誤ち—罪を犯したものにあって自らの存在さえ許すことが出来なくなる自責感というのは解からないわけでもない。しかし、それなら何のためか闘って来たのかと言いたくなる。その類の「自責感」は結局「自供」と同質の思想的粹でしかないと思うのです。個人的な苦難など階級苦に較べればたかがしれているものです。とにかく、彼が悲しまれるような死に方をしたことが悔まれてなりません。とはいえ、僕は僕たちの無力さをつくづく思わざるを得ません。彼はより多くのより力強い援助を必要としていたのです。彼に最も親しかった同志の一人として僕の名すべきことは多くありました。これは我々一人一人の責任なのです。彼が「リンチ—処刑・制裁」の粹からついに飛躍しきれなかったこと、そして我々の対応からいっても「リンチ・処刑」は続いているのです。僕自身、この手紙で森同志から批判されているように「リンチ・処刑」を必然化する論理を持っていたし、今も完全にそれを克服したとは言いきれないのです。この飛躍がシンドイことは森同志の「死」にせよ、同盟の分裂にせよ明らかです。そして僕たちは焦らず、確実に、そして早くこの種の飛躍をかちとって行かなばなりません。だがまた、この飛躍をかちと

っても更にさらに巨大な苦難が待ちかまえているでしょう。それも一歩一歩克服して行かねばなりません。この手紙での森同志の僕と革命左派に対する批判は正当です。（「資本主義批判」を核心と捉えることはいいが、今考えれば革命左派批判などは「曳かれ者の小唄」とも言えるものです。後に電報をよこしたように革命左派へ責任転嫁の傾向はないとは言えないが、そこで彼自身の責任を回避している訳ではないのです。それは逆であり、彼は「粛清」の責任をとことん取ろうとして「再生の一步」を踏み出した時自壊したのです。彼はある意味で「誠実」であり過ぎたのです。真の敵を憎み殺すことを知らないで。

森同志の「死」に対しては彼の手紙や文章をまともて、他同志たちの見解などまとめる必要があるでしょう。この手紙の写しもその一助のつもりです。連赤同志の団結は更に一層堅くしなければなりません。

森同志に社会主義の勝利を誓う。

一月五日 夜

松田 久

超階級的「規律・作風」の讚美—右翼的

清算主義—小ブル共産主義粉砕

森 恒夫

一月二五日付の手紙をもらっておきながら、返事が遅れたことを深くおわびします。我的同志！ 元氣ですか。ぼくはこの間な

し崩的に自己批判をしつつ、その整理を通してようやく再生の一步を得ました。つまり、ぼくの獄中での「自己批判書」—「銃—共産主義化」論の擁護と死刑の主張（「自己の有罪—死刑」と彼は言っていたのですが、それは権力の手によるそれではなく、むしろ自分自身によるそれであったことのように今は思えます。—松田）が、何より制裁の論理と同じであること、そしてぼくは「他のメンバーは少しでも救いたい」と権力に惨めに屈服したこと、それ故制裁を支えた論理は権力への根底的思想的敗北を内包していること、を確認して、徹底して「制裁」を一片の擁護もなく批判し尽くすことから出発しようとしたのです。それで、ぼくは前信で書いたように若干八木氏に依拠する傾向—序章No.8の受け入れの傾向をもちました。ぼくがこの出発をしようとした時すでにぶつかったのは、ぼくらの超階級的作風の追求—鞭の規律への転化の根源が革命左派の山岳根拠地—革命戦士化にあること—それは決して永田さんや坂口君の個人的誤りではなく革命左派の中国革命戦争の教条化の小ブル革命主義・五一年綱領の教条化・プロレタリア文化大革命教条の社会革命主義から必然的に派生したものであることを明らかにせざるを得ないこと。だが革命左派や坂口君はこの点を曖昧にし、結局超階級的作風や唯銃主義を擁護する傾向になっていること（ぼくが自己批判書で目指したことは正しかった、が方法を誤ったと言ったのと同じように）ぼくは永田さん（今は分らないが）や坂口君のこの超階級的な作風追求の未総括—むしろ一面では正しかったとする考え方や浅間山荘を讚美しようとする考え方とどうしても闘わざるを得なかった。同志！ ぼくは本当に一片の擁護もなくあの

反革命行為を批判しようと思いませんし、その為には事実として「遠山批判」に端を発した一挙的共産主義化の要求が革命左派の山で経験の絶対化であったことを根拠から批判せざるを得ません。革命左派がその責任を永田・坂口君の「政治放棄」に押しつけ、反米愛国路線の無謬性を誇っているどし難い態度をコテンパーに批判しないとうとうしようもないし、また清算主義の都委——八木氏の傾向に対して闘わないと自己批判はありません。若干、同志は感うかもしれませんが、七一年の総括のポイントは6・17後に「組織戦」を闘い、「転換」をものにするにありました。一方で戦闘グループや支援網と結合し、組織し、党——軍——準ゲリラ——支援網の複合的組織陣型を形成しつつ武装闘争を恒常化させ、他方で才三次綱領論争をちとって政治・思想上の飛躍をちとることが問われていた訳です。これらに対して、ぼくらは（獄中も含めて）都市ゲリラ戦論でアブローチしました。ぼくが「連合赤軍」を革命左派に提起したのは、スタ・反スタ止揚のイデオロギー問題と、他方日本革命戦争の戦争・戦術——「都市ゲリラ戦」攻撃型蜂起」の連帯した獲得を目指したものでした。が、この時すでに山岳ベースはあり、革命左派は山岳根拠地主義になつていたので（唯銃主義にも）。まさにそうした革命左派の批判をし切れず、「連合赤軍」をあつた戦術レベルでしか結成出来なかったことは、ぼくのすでに後退・敗北でした。（ぼくは才二次綱領論争でも、具体的実践的な待機主義・組織的腐朽と闘わずに論争を行うというイデオロギー、党主義に陥りました。これはぼくの見解が高原氏の戦旗主義的傾向を突破し切れなかったことに

起因しています——即ち、『赤軍No.4』の戦旗的批判の限界。こころもぼくは自己の後退を自己の（ぼくらの）都市ゲリラ論の内容の貧困・誤りとして把えて行く必要がある訳です。）彼らの都市プロレタリアート軽視、人民なき根拠地主義、「銃か爆弾か」論争による唯銃主義、そして共同生活——家族主義（これはサークル主義の延長だった）、超階級的な「革命的気概」、ぼくはこれらに対する闘争を徹底化せず、イデオロギー上の批判の不徹底と共に自ら軍による殲滅戦（軍を問われていた準ゲリラオルグや指導に組織するのではなく）を中心にする事で、この6・17後の飛躍のチャンス放棄したのです。それなりに組織的なプランを持ちつつも、こうした活動を放棄して「戦術」に埋没したことは、ぼくの組織活動の無理解・小ブル性を示していますし、この才三次綱領論争——都市ゲリラ戦論の限界を示しています。（その意味で獄中同志の責任共有の問題もあります。）いざにせよ、革命左派の二名の処刑、米子の敗北はこの「後退」、12・18↓6・17への自然発生的飛躍の否定的側面（唯軍主義・召還主義・陰謀主義・組織無政府主義）の固定がいかに犯罪的であったかを示しています。二名の処刑は人民なき根拠地での必然的に極左的軍事と生活環境への忍耐・自己犠牲によってしか革命戦士の基準をつくれず、それ故脱落を引き起さざるを得ない——これを根拠地防衛を名目に処刑、従って主観的にはどうあれ、超階級的作風の追求——その反動化なのであり、米子の敗北は一握りの浮浪人の軍を徹底して新しい戦闘グループ、支援網の組織・指導に集中して自らの浮浪人性を、そして不可避に落ち込む唯軍主義等

を解決して非合法闘争陣型をつくり上げ自らを政治・組織——軍事指導者——党に鍛え上げていくことから、党を「軍事戦術——戦闘団」に押し下げ、戦闘で突破しようとしたことの敗北であったのですし、（この点米子の諸同志は自らの敗北を明確にしていないうちに思います。）軍事訓練への過程では、こうした戦術突破の挫折、軍の政治危機と軍事的アセリ、革命戦線の急進化と分解（先進的戦闘グループとより広い統一戦線へ）とその自然発生的民兵主義（この理論的根拠は八木氏の地方軍——レーニン党建設であり、当時ぼくはこれを解党主義と批判しました。また山では八木氏の清算主義——赤軍——小ブル革命主義——を批判しました。これらは一面では今でも正しいと思えます。）等に対して過渡期綱領とゲリラ戦術、ゲリラ隊建設（革命戦線の先進部分や準ゲリラの一体化、革命戦線解体）で応えようとしたのであり（即ち6・17後の後退の枠内の純化）それ故革命左派の「遠山批判」——女性の作風問題へのこまごました批判、とりわけ「山へどういふつもりで来たのか」というもの、明らかに同志の枠を越えた詰問——そして「殲滅戦に向けて短期で革命戦士化せよ、それ迄山を降ろさない」という要求——を批判し切らず、逆にこれを作風の問題として「共産主義化」と論理化していったのです。こうして永田さんの超階級的、小ブル道徳主義的作風、ぼくの論理化、両者の相互依存、そして両者の共産主義理解の絶対化——党物神化・独裁化が「銃——共産主義化」論（銃の物神化を媒介した命がけの一挙的共産主義化論）の生成と一体的に進展したのです。それ故ぼくは超階級的作風——その反動化が山岳ベースと切り離

せないものであり、その実際上の暴力制裁——プロレタリア的意識性、思想への限りない不信、外圧的ブルジョアの暴力への依拠は根底的なイデオロギー批判として切開しない限り総括出来ないと思うのです。ぼくはこの間もこの点について曖昧でした。革命左派を批判すること——連合赤軍や浅間山荘を讃美して、結局「反革命的行為」を免罪するモップルなどの傾向と闘うこと（彼らは自己の小ブル革命主義の教条化を武闘清算反対で隠蔽している。）ははっきりしていても、清算主義と闘うことを明確に出来ず、どうしても政治組織上の問題に止ることになっていたので。しかし、塩見氏の援助によって原則的な資本主義批判の確立がどれだけ実践的な意義を待っているか——小ブル共産主義の止揚の原点であるか、を理解するようになりました。それにつれて八木氏の一貫した（昨年末からの清算主義、それ以前の労働者サークル主義）レーニン教条主義を批判することを回避して左右の傾向の止揚もないことが分りました。ぼくがこれから書こうとしていることは、大体以上の自己点検の上に総括論争に対するぼくの立場——断乎として塩見氏に学び、支持する立場——原則的な資本主義批判を確立し、この間のブンド内論争を含めたスタ・反スタ止揚の諸傾向を止揚する立場の表明でもあります。同志が今どういふ考えでいるかわかりませんが、早急に徹底してぼくと同じ立場を確立されるよう望んでやみません。正直いってぼくはメタメタに同志の歩みののろさ、不徹底さを、自らのそれを恥じたように恥ずかしいのです。

① 今日「も一度こんちくしょう」（編集部註——72・11・

28日付上告審にむけての決意表明として書かれたもの。(絶望的ないらだちと共に読みました。実は差し入れられた時チラッと見て「何度こんなくしょ」と云っても根底的な資本主義批判抜きのイデオロギー批判など役に立ちません」と電報を打とうと思いましたが、今日は日曜ですし、とにかく手紙を書くことにしたのです。自己批判は結構です。が、結論からいえば、同志は小ブル革命主義——超階級の作風の讚美の立場に転落していることを全く分かってない——客観的には総括論争で最も悪い傾向をこたつたづめにしており、「組織」するどころではなくなっています。坂口君の手記については、ぼくも対権力問題で学んだのですが、同志は感傷的に「本ものがある」などということ、あそこを書かれている感情——銃撃戦を闘っている間だけホッとしたというのが、制裁の中でぼくらがつねに同志の死を「銃殲滅戦」で償うとしてきた永遠の共産主義化、銃撃戦のロマン化の表現に他ならないこと(その正直な表現)——そして、制裁を自己批判しようとする余り、反米愛国教条——獄中革命左派全能化で問題を切開しようとして全く非科学的な、路線還元主義的(その意味で清算的)総括に陥っていること——云わば獄中革命左派を全能化することで総括を「神秘化」し自己の苦闘を放棄していること——を見ることとができないでいる。「革命・階級・人民の利益に自らを合致させんと苦悶しながら闘い抜こうとする彼に対し……」同志よ、映画の見すぎと違いませんか？ 坂口君の反米愛国教条主義、一般的な幹部の傲慢、思い上りの無媒介的批判、全体を通してみられる素朴な感情、苦悶とその非科学性、同志はまず出発点でどし難

い自己の小ブル的ロマン主義をさらけだしている。何故、坂口君が山岳ベースヤそこで超階級の作風を批判し切れないのか、(雪野君の云うことは一面では正しい。)後者について何故、擁護するのか？ そのことよって結局、坂口君らが路線を放棄したから処刑という、全くデタラメな結論——そして、獄中R.L派は何でも見通しだったという神話がデッチ上げられていること。同志はどのように見抜けぬのか？ 獄中R.L派が昔のサークル主義を「作風」などともち上げて自分達は昔からそういうのもっていたなどというこけおどしに同志は他愛もなく参るようですね。同志は一生懸命「規律・作風」の重要性を主張している。そして、プロ的階級性を叫んでいるが、今、現実はどうしてその獲得に発するのかわり一つ云っていない。(※)

(※)同志はまさに毛沢東の云うように政治問題「イデオロギー問題——小ブル共産主義」を全く考えず、小さな問題にのみ集中している。作風問題を作風問題としてとりだしたから制裁があったのです。作風は政治問題「同」として批判されねばなりません。同志は無意識的にせよ総括の限界につき当たったのをR.L派の密輸入で隠蔽している。——最もR.L派の破産が批判されねばならないときに秘かな妥協を行おうとしている。それが同志の果している客観的役割です。)

いのですか、同志。同志の問題の抽出の仕方は山でのぼくらと同じなのです。「規律・作風」のみをひきだし、それを何の科学的根拠もなしに(即ち、明確な資本主義批判の確立抜きに)アレ

ヤコレヤの経験や「教訓」に基いて批判することが一般的空論のみならず、反動化すらしたことを同志はもう少し冷静に考えるべきではないでしょうか。「組織規律、作風が全ての実践の基礎である」主観的にはどうあれ、これは同志の総括論争への態度になります。今、総括論争に対してこう主張することの客観的意味を同志は考えましたか？ この主張は全くデタラメです。プロレタリアートの階級実践の基礎——それはプロの資本主義批判です。M.L主義の核心です。三大規律、八項注意が半殖民地中国でのプロ・ヘゲ——小ブルの革命化としての土地革命戦争、その中でプロの行政、軍事政策の発展——赤色政権の領導の鍵だ、というのがぼくらの山での制裁をもたらし論理であるように、機械的に規律を絶対化するのには全くの誤りです。「いかに革命的規律・作風をうちたてるか」三八作風の八字以外何も云っていない。「3」「4」も現象をならべたてているのみで、少しもそれを深め弁証法的に批判しようとする努力がみられない。特に「1」は全く山での論理と同じで作風を絶対化し、そこに政治・思想問題を収められていく考え方に他なりませんし、必然的に超階級のな「作風」の論の展開をもたらしません。同志は一体何を総括したのか。このP7~P8は同志が何一つ総括していないこと、一生懸命、形を変えただけで「制裁」と同じことを主張していることを余りに鮮やかに、無惨に示している。どし難い小ブルロマン主義者よ、同志はP10で「僕自身のニヒリズムと安直なヒューマニズムと政治的の一發主義、盲動主義と、それらが結びつき……」と云っていますが、ぼくはぼく自身が塩見氏に指摘された

ように、同志にニヒリズムやヒューマニズムの思想的根源の切開を問わねばなりません。同志が革命的楽天主義、ロマン主義者であることは衆知のことですが、ニヒリズム等でこの批判はできない筈です。P11ではどうしようもない。「無節操とはとりも直さず階級の革命的潔癖性の欠如のことです」この大ウソつき、階級のイデオロギー問題を「潔癖さ」にすり変えるベテンス師、同志は塩見氏の長征No3の高原氏批判(「同志高原を批判す」塩見孝也論叢No1に収録——編集部)を何と読んだんだ。M・Nと同じレベルで、超階級の作風を云々する誤りが、根底的な資本主義批判の歪曲につながっていることの典型を同志はみなかったのか？ 何のために塩見氏が「共産主義化」を自己の「再総括」のイデオロギー的アイマイさ、それ故の決意や無基準な作風の故であったと痛苦の自己批判をしたんだ。永田さんの潔癖さが山の中でどういふ役割を果たしたか、ぼくのそれへの屈服——小ブル的道德への拝跪がどういふ結果を招いたか、少しは考えてもらいたいものです。同志は近藤同志をして「階級の革命的潔癖性こそが権力の一番恐れるものであり、いわゆる自己を律する規範に迄高まった共産主義であろう」というデタラメな「共産主義」の超階級的「潔癖」さへの還元をさせている。ぼくは坂口君にも近藤同志にもその完黙の闘いを評価しているし学ぼうと思っています。しかし、かつて八木氏が(七一年二月)云ったような小ブル革命主義の赤軍の為に完黙したのではなく、一〇年間の階級闘争の歴史の遺産故に完黙したなどという、自分が何故バクられたのか、いかなる敗北なのかを清算するような完黙(云いすぎかとも思いま

すが、ぼくはこの点ひっかかりますので）が決して真のプロ革命主義でないこともぼくらは、知らねばならない。

ぼくが「自己批判書」で書いたのは結局同志と同じように総括の核心がつかめず、ひたすらアレコレの現象をとり上げてプロ的でなかったとか、指導者としてまちがっていたとかいうことにすぎず、そうした総括だったからこそ、「銃——共産主義化」論が正しい、目ざしたことは正しかったなどという制裁擁護の論理が密着していたのです。「敵は誰か？ 味方は誰か？」という階級政治」だって、同志はP13でこうもいってますね。「そして、それはつきつめれば階級性の問題であり、政治の問題に根柢をもっているのです。政治とは味方階級を組織し、敵階級を支配することです。」

「資本主義の原則的批判は独自の実践的領域をもってあり、……それは革命的ML主義科学的社会主義の心臓です。価値論——剰余価値論は革命的ML主義の核心だと考えます。それ故ML主義のイデオロギー——階級性の科学的表現ともいえます。」（塩見氏の手紙）このことを少し冷静に考えて下さい。RL派にはこの資本主義批判は全く欠落しています。渡辺君の「行動綱領をかちとるために」を見てみればデタラメさは明らかです。ぼくは同志がRL派の「米日反動の侵略戦争を革命戦争で打ち破れ」から権力問題の目を開いたという一二月五日付の手紙にガクゼンとしました。あれはもと「内乱」となっていたのを永田さんから「革命戦争」におきかえたものですが、赤軍派の日——米帝の侵略抑圧革命に対するRW——前峰、世界RWによる安保、NA

と社会革命主義の結合をロマン主義的にぬりかえて用いている——というのは云いすぎだろうか？ しかし、同志は、はっきりそう書いている。これは自己批判を深めようとしてまだ深めていない限界などでは決していない。明確な政治主張です。

ロシアに於ける資本主義の発達をふまえた、後進資本主義国ロシアでの「社会主義革命」、半植民地中国での「人民民主主義革命」、この両革命を規定した諸要素を投げすて、プロ——貧農——社会主義R、プロ——農民一般——ブル民Rとかいう反スタバリのRL理論、日帝と英、仏帝を「独自の経済圏」で分けて後者は社会主義革命などという過渡期世界への無知（これらは知識水準の問題ではありません。知識水準の問題と考えるのはサロン共産主義——メンシェヴィズムに陥っているからです。）RL派を不徹底にしか批判しないこと——実は全く批判しない——によって、同志は逆に才二ブンドを清算しています。というより同志は全く才二ブンドを理解せずに「世界だ」だけで赤軍に入ったのか、これはつっこんだ同志の総括ぬきに何とも云えませんが。

同志／同志の階級的潔癖さという小ブル共産主義、「敵は誰か、味方は誰か」の政治力学——反権力主義（毛沢東の農民調査——秋収蜂起——井岡山での闘いが、4月上海クーデター、コミンテルンの一般主義との陰然たる党派闘争の中であったこと——その中心課題はスタの二段階革命論、ブルへの妥協に対する資本主義を縫ない社会主義への到達、プロ武装ヘゲ創出であったこと）をまともに総括せずに、機械的に言葉だけを引きだすとは、これは総括論争の中で教条派に近く、同時に清算派にも移行しうる

TO解体の引きうつしにすぎません。同志は一度まじめに才二ブンドのことを考えるべきですね。——とりわけ茨城県でのマル戦くずれの経済主義の影響下にあったことを。いかなる階級に依拠するかを全く理解していなかったRL派の山岳根拠地や坂口君の9月段階での農村根拠地——人民戦争論を同志は何と考えるのか、六〇年以降プロ階級に立脚してこずに反戦青年委の運動がやれたらどうか？

同志はML主義のイデオロギー問題を「潔癖」さにより変えたように、権力問題を単純政治力学におきかえている。だからこそ、RL派のスタの二段階戦略（米帝を打倒して何が民主主義革命だ）……その小ブル的民族主義を民族主義は間違いだとしてしか批判しえない。小ブル民族革命主義は帝国主義の美化になり、日共のように帝国主義政策論になり、不断に反権力を再生産することが全く理解されず、またそれが従属論+人民戦争論の接木として全く小ブル武闘主義にすぎず、従って「作風」を超階級の追求することを内在化すること——換言すれば、制裁がRL派の根底的な破産を示していることを何一つ分っていない。（勿論、赤軍派にとっても程度は違うが同じことです。しかし、この程度の違いは大きいものです。今、労働党を建設する闘いでこうした反米愛国路線は解体止揚されるべきです）同志のRL派への「甘さ」は同志の反権力主義の表われに他なりません。（——赤軍派の小ブル革命主義を清算するの一面でRG派を密輸入した八木氏をもってきて、清算した抜けがらとしての「作風——規律」問題の絶対化で、RL派の「革命的気概」——実は労働者サークル主義

アイマイな立場を示していないでしようか。八木氏の清算主義+RL派の社会革命主義、反権力主義以外の何物でもありません。他の同志を「組織」するどころか「自己批判」に名をかりて害毒をバラまいているとはいえないでしようか。ぼくは現帝論——党組織問題等を、資本主義批判に一面化できないと最初は考えていました。同志も一月二〇日付の手紙で「しかし総括（塩見氏の「長征No.3」論文をさす——松田）が資本主義批判に一面化されています。」と書いていますね。が、「烽火派やRG派が何故資本主義の原則的批判、宇野批判から一歩も進まず……」を考へべきだと思います。」の中には、当時のぼくもそうですが、RG派の資本主義批判を正しいと考える考え方がありますね。塩見氏はRGがイデオロギー主義に止まっていることを中間主義的反スタ主義として、彼らの資本主義批判の誤りを批判することで説明しています。つまりぼくや同志はRG派をその点で密輸入して自らで資本主義批判をやることを放り出していたわけです。塩見氏の「論叢（その2）」等をよく読んで下さい。ぼくはまだ資本主義批判についてまとも云えませんでしたので塩見氏を学んでくれとしかいえないのですが、しかし小ブル的潔癖さの讚美だけは全く許せません。又RL派についてぼくはその知識水準を言っているのではありませんし、同志が本当に労働党をつくるつもりなら花園君の「北方領土奪還」にまで墮落した反米愛国の小ブル民族主義、毛教条主義（MLはいらぬこと）になる——林彪主義）、中国RW教条の小ブル革命主義、プロ文革教条（実はサークル主義の変質）の社会革命主義、そして資本主義批判の欠落をその資本主義批判

の確立から批判すること―根底的に批判することが不可欠です。政治―綱領問題でぼくは塩見氏と同様、困難はないと考えます。問題は政治、綱領上の問題としてのみアレコレすることでは、「制裁」の超階級的作風―銃の物神化―根底的なプロ階級不信、小ブル革命主義の反動化は止揚できないということ―それ故、資本主義批判を確立することに全力を挙げていることが問われています。―各個人は自己批判を科学的資本主義批判に立脚した根底的イデオロギー批判として展開することが問われていることにあると思います。同志ノ、ぼくはあの制裁への批判を曖昧にすることなく徹底してひとこま、ひとこまに表われた自己の小ブル性を批判するつもりです。それではじめて、赤軍派の総括と接点をもちえると思います。ぼくがやっとこの原点を築いて、少し歩み、次に政治、綱領問題に止らうとする不徹底さに気づいた時、何と同志は「制裁」と本質的に同じ論理、同じ言葉で「こんなくしょうノ」「も一度こんなくしょうノ」を書いてるノ。ぼくが同志を口汚なく批判した気持をわかって下さい、というのは感傷的でナンセンスですが、とにかく同志の「事件」に対する曖昧な態度―むしろ擁護の姿勢は、依然、買かれており、同志は当初のぼくらの擁護から、自分も同じ誤りをもっていったとして、ぼくらと自己を同レベルにおいたのみで、それから一歩も進まず、結局一度も「制裁」を批判していない―それどころか日々、無意識的にそれを美化する論理をつくっていること、客観的に総括論争の激化の中で、致命的な犯罪的役割を果していることは動かし難い事実なのです。

同志よノ、ぼくは同志への批判を曖昧にするつもりはありませんよノ。このまま同志の傾向を放置したら、どえらい墮落を招くのは明らかです。レーニンは38巻哲学ノートで、半世紀の間、ヘーゲル弁証法を研究しなかったから「マルクス主義者」は資本論を理解しなかったと云ってますね。同志のロマン主義的ナイーヴな小ブル性を今こそ弁証法と資本主義批判で武装すべきです。そのためにも徹底して論争しましょう。こんな同志をこのままどうして下獄させられようか。こんな同志を残してぼくは死にきれないよ。ぼくがメモロになりながらも同志に云った「組織せよ」を同志は一つも分っていない。とにかく反論をまちます。次回はそのれにもっとつかい批判をするよう準備します。元気でノ。二月二十五日 森(塩見氏に手紙だしていますか? 必ずず文通して下さい。)

小ブル共産主義、小ブル革命主義の風車に、超階級的作風の槍と反権力主義の楯で、立ち向う我が勇者ドン・キ・ホーテ同志ノ追伸 できるだけ早く返事下さいね。

以上が僕が二月二十六日、夕、落手した彼からの最後の手紙です。僕はすでに年内に発信の機会がなかったので返事を書くこと

がついにできなかつた。彼はこの後、二通の電報を僕に出してゐます。

「肅清抜き作風の強調、結果的に革左に責任転嫁する傾向を自己批判します」(二七日)

「清算的傾向になつていたことです」(二八日)

というものです。僕も二八日に手紙のかわりに電報で、

「批判は正当、基本的に塩見氏の許に結集するつもり」と答えておきました。

「こんな同志」を残してあっさり死んじまうなんて、どこまでバカな「オヤジさん」なんだろうノ。僕は腹立しくて仕方ない。

「もっふる」の同志たち、彼からのこの手紙は「連赤公判支援委」の同志たちにも見せてやって下さい。「連赤公判委」の同志が四日面会にきたので「分裂」のことなど文句たらたらいったのだけど、やっぱりこの場で文句をいうより、団結して敵にあたる必要をその後、感じています。団結して森同志の死を悼み、敵を糾弾しよう!!

一月五日 夜 松田 久

さよなら！ 行ってまいります

30日頃下獄で、最後の手紙になりそうです。坂東同志、近藤同志らには、是非とも返事がかかねばならないのですが、他の直接にどうしても返事を出さねばならぬ所を優先してしまつて結局彼らに返事を出せませんでした。その他の同志も含めて、この手紙でまとめて代用させてもらいます。

### 一、森同志の「死」の問いかけたもの。

僕は、彼が自ら死を選んだことにどうしても釈然としませんが、ここでは、彼が自ら死を選んだことを想定しておきます。(それでも一面では殺し、殺されたことに違いはありません。又、謀殺だとしても問題は同じものをもっています。)

①、彼が「大馬鹿野郎」ぶりを示し、わがままに死んだことは事実ですが、「革命家は死ぬべきじゃないよ」云々で彼を責める気には到底なれません。「彼は脆弱だった」「闘いを放棄した」として責める気にもなりません。ナンダカンダと「理論」をこねくりまわし、結局は、このような処に落ちて着くならば、それはみっともないことです。山での「リンチ・処刑」粛清」の中で、同志たちの「死」を睨めていた「連赤」同志たちと同じです。しかも、内在的

葛藤がないだけにより低水準です。被粛清者の骸に自らの骸を見たのは、粛清者であった。僕たちは粛清者の生きた姿に自らを見ていた。だが今、僕たちは森同志の骸に自らの骸を見なければならぬ。なにも死んで初めて骸になるのではない。生きているうちに、それは骨格をなしているのです。

②、彼は階級苦を個人苦に収斂させてしまった。これは単に、彼個人がそうさせたのではない。我々自身がそうであったのである。彼にそうさせたのです。ここに問題の核心があります。(そして、このことは皮相な自責感ではとても闘い抜けないことを示しています。俗っぽくいうなら、個人苦は階級苦に較べて、たかが知れています。我々の今までの苦難は、これらの苦難に較べてたかが知れているでしょう。(断っておきますが、これは、たかが知れているから個人苦なぞどうでもいいというブルジョア国家——道徳観からいっているわけではありません。「一人が万人のために、万人が一人のために」という観点からいっているのです。苦難は我々を鍛える。つまり、個人苦を階級苦として階級的に止揚することが問われているのです。)

③、さて、僕は総括上の清算主義・教条主義の根源は内在的・

科学的に止揚するという立場、方法ののっとっていないことにあると考えます。内在的とは、ここでは自己の、我々の思想的解

体をしかと見据えて自己否定的に総括・止揚することです。だが、これは科学的になされなければならぬ、悪無限的自己さんげ——「自己批判・相互批判」に陥らざるを得ません。僕自身がまさしくそれで「こんちくしょう」「も一度こんちくしょう」はその典型です。そして、これは山での「リンチ・処刑」粛清」と全く、同質のも

です。つまり、現在の階級攻防の中で自然成長的に革命戦争を展開せんとすると、どうして個人の「内奥」の生活力・生命力にその原動力を求めざるをえず、それを外的に皮相な思想問題として規律・作風の確立を超階級的に(つまりブルジョア軍隊と同様に)追求せざるをえないといえます。(勿論、山でのあのような「リンチ・処刑」粛清」という形をとるのにはそれなりの特殊の・個別的な条件があるのですが。)ここで注意すべきことは、山での整

風運動が政治・思想問題を基礎にして根底的な総括(資本主義批判等の)をつきつけていたということ、現在即時的に革命戦争を展開せんとすれば必然的に超階級的規律・作風の確立に頼らざるをえないということを混同してはならないということです。教条主義は政治・思想問題の根底的総括と無媒介になおも整風運動を強調しています。革命左派も同様で永田同志らに責任をおしつけ、実は、党組織規律の問題にことをすりかえ、「政治・思想路線」の問題だといいつつ、「反米愛国路線」の無謬性を誇らうとする生粋の教条主義です。とってつけたような統一戦線戦術(「人民に依拠する」)ではことは解決しません。山岳・農村根拠地

路線は、51年綱領・五全協の「反米愛国」からして必然的成り行きなのですから。

④、だが、森同志は塩見同志との生き生きとした交流を通じて、総括を思想問題として資本主義批判を軸とする科学的止揚の方向を獲得していました。(僕らと同じように)。なのに彼は力尽きました。ここで、彼が「弱かった」とか「小ブル的だった」とかいうことは、客観主義に戻ることです。では何故? これこそが、我々に問われていることです。一つは勿論「資本主義批判」そのもの、内容についてであり、もう一つは内在的止揚の内容についてです。ここでは後者についてだけ書いてみます。(前者は後述)。内在的止揚とは、ここでははっきりして個人的誤ちの個人的責任による個人的止揚ではないことを強調しなければなりません。「結局は個人の誤ち、個人の責任、個人の資質」とすることはいかに堅固そうな「理論」から生まれたにせよ、致命的誤ちです。これは誤ちを犯した者にとっては実際内在的下降しなく、又大きな誤ちを犯さない者にとっては、止揚の契機さえ失なわれることになり、皮相な「共犯意識」自責感」でしかやれないからです。内在的とは階級的、組織的ということです。勿論、ここでいうのは、社会主義革命・建設がなければ内在的止揚はありえないといっているわけではありません。そういう短絡したのっぺらぼうの現実的には無力です。プロレタリアートの存在そのものから来る階級的組織性が唯一の革命武器であるという基本認識から、我々の世界的、歴史的位置を探り上げて止揚することです。つきつめれば、この階級的組織性の要たるML主義前衛党を組織すべく止

揚することです。つまり、ただ内在的であるばかりでなく、科学的になされねばならず、科学的であるばかりでなく、組織的・階級的に止揚して現実の力にならねばならないのです。一言でいうなら党的止揚が問われているのです。森同志の「死」は「資本主義批判」は総括の方向としては正しいが、未だ無力であること、そして、我々の非組織性・階級的団結の貧しさをつきつけているのです。

⑤、ここで、森同志の「死」をこのように受けとめない典型的な二つの意見について書いておきます。

まず、一つは都委系のある同志の獄中のS同志に面会した時の「彼の死は小ブル革命主義の破産だ。これは都委の路線の正しさを示した。」という意見です。都委はかつてこういつていた。「同志虐殺の下手人と曖昧に手を結ぶことは、過去の誤りを徹底して正さないことは、革命運動の発展に敵対する行為以外の何ものでもない」と。我々は「連赤」同志たちと断固団結して総括しなければならぬのです。団結の願いから出発し、批判・闘争をへて、新たな団結をもちとること、これが問われているのです。だが、都委の諸同志は「連赤」同志たちを「同志虐殺の下手人」(Z)とし、団結、援助を積極的にしようとはせず、「連赤」同志たちの総括論もろくに保障せず、森同志の「死」の前に、都委の路線の正しさが証明されたという。都委も僕らも「連赤」同志たちも大いに団結して総括作業を進めねばならぬのです。各々の路線が正しかったどころか、ますますその無力さを示しているのです。(これは「反米愛国」路線についてもいえる)。都委のこ

を意味しよう？ 千葉同志のいう「世界党—プロレタリア革命・反スタ(小ブル独裁打倒)・建軍遊撃戦」のプロ独派の赤軍なるものがいかなる内容なのかわからないでその面から批判できないが、もし実践的に(軽井沢銃撃戦を評価するあまりその限界性を見抜けず)「今すぐ武闘」というならそれは「M作戦」の二の舞になるであろう。「赤軍」なるものが単に軍隊を意味し「非合法中央集権党」を意味しないならば、コスセポリタンのドブレ主義になるであろう。それは文字通り「一周遅れのトップランナー」の役を演ずる。勿論、僕は「清算主義」よりむしろどうとは思わう。

⑦、ただ、森同志ら政治指導部の責任として次のようなことはいえます。つまりオ—ゲリラ隊(坂東同志ら)が自然成長的であれ部分的な組織戦を展開し、軍事力学主義を徐々に克服し、プロレタリア革命主義の萌芽を獲得しつづけたのに対し、森同志山田同志ら政治指導部は逆に旧来の党の立場から軍事の自然発生的に拝跪し、「銃による殲滅戦—唯銃主義」として実質山岳根拠地路線に陥っていったこと。だからプロレタリア革命主義の芽を飛躍—発展させず、遂につぶしていったこと。だが、これは単に森同志らの責任なのではない。森同志らは「獄中指導部」の意見を徹底して忠実に展開しようとしたのであり、僕たちや「獄中指導部」も我々のぶつかっている壁に感ずきつつ、色々小手先のことをやっていたがその本来的任務—思想的、綱領的問題を科学的、理論的により深く鋭く掘り下げ問題の核心をつかむこと—を果し得なかつた限りで主要な責任を担わねばならぬ。(「オ

ういう対応は彼らの反動的、清算主義総括の当然の帰結です。

⑧、もう一つの意見は「連合赤軍」の囚われた戦士たちを、敵に対してしっかりと共産主義者として、闘わせるように全力をあげるオ一の任務という全く正当な立場に立ちつつ、いわゆる「赤軍派獄中幹部」に責任をおしつけ、あたりかまわず悪罵を投げつけ、拳句の果ては「『同志ごころし』よりも最高責任者の自殺の方がよっぽど階級闘争に悪影響を与えずにはおかない」などと深刻ぶり恫喝をかけている千葉正健同志である。この立場に際して、責任のなすり合いをやり、課題の深刻さの前にわめきちらすことは、「連赤」敗北直後の我々赤軍派の醜態と同様のものである。いわゆる赤軍派が分裂し、旧幹部の多くの同志たちが「人民に依拠してなかった」と彼のいう「人民民主主義派」に墜走する傾向をみせていることは事実であったとしても、「新党」支持か否かを一つの基準として、森同志を「ハムレット」に仕立てあげることには愚かなことであろう。「新党」は次のような基準に始まっている。「何故ぼくらが彼ら(革命左派)を評価したのか、オ一に武装闘争です。オ二に毛派であること(教条的でも)です。オ三の点はトロツキズムの止場の為にも毛派との共闘が不可欠と考えたからです。この点ではR・L派より積極的でした。」(11・24日付の僕への私信)「新党」が新たな党建設の着手という意図のもとになされたことは確かであるが、それは実質戦術的一致「銃による殲滅戦」でしかなく、山岳ベースを実践的基礎としたことは理論上はどうかあれ、日共五全協式山岳農村根拠地論になっているのである。この「新党」に支持か反対かを総括の基準にすることが何

レが殺したんだ」という皮相な自責感と同じに「オレだったらそんなことしない」ということがいかに無節操であることか。しかし、それはそういう切れないものの苦言なのかもしれぬ)⑧、僕は解ってくればくれば程解らないことが明らかに。割り切れば割り切る程、割り切れないものがぬうと出てくるという感情を抱いています。基礎的、基本的姿が見えれば見える程他のもが見えなくなってしまうとでもいうものです。十五の骸がしかと見えれば見える程、彼らの目、彼らの口、彼らの髪、彼らの胸、彼らの手、足、そして何より彼らの息、ぬくもりが感じられなくなってしまうのです。こんな想いを青砥幹夫同志の手紙から僕は感じています。「わかった。安らかに眠れ」とはいかないのです。いつまでも僕らとともに人民とともに生活し闘い続けてほしい。僕らは彼らの息、ぬくもりがほしい。その上で我々の今までの苦難は、これからの苦難に較べたらたかが知れているといいたい。いい切りたい。そうでなかったら何のために彼らは闘ったのだ。また基本的なもの、骨格がわかっていく時、いかにその割り切れない生きた人々の生命力、創造力、苦悩が豊かであるかわかるのではなからうか？ 青砥同志の手紙は全文引用したい気がする。しかし、それは彼自身が徐々にいって行くことであろう。ただ一言「この自己分裂が、旧来の小ブル革命主義の矛盾の現出であり、それを一方で戦術主義へ、一方で個への矛盾の集中—共産主義化……」。森同志は「共産主義化」に死んだのであろうか……。



①、塩見同志「資本主義批判」について。僕は正直いって「資本主義批判」に不安を持っており、そのことがケチつけになることを危惧しつつ少し書き留めておきます。①僕は塩見同志に勧められて『マルクス主義経済学の擁護』（新日本出版社）を最近読みましたが、これは宇野経済学のようなボンコツ小ブル経済学批判として大いに有効だとしても、講座派経済学に対するプロレタリア革命派としての止揚・批判の立場を築く方向を同時に明示しなければならぬだろうと感じています。これは宇野批判以上に課題が困難であろうが、これなくして現代カウツキー主義・政治的には現代修正主義反動の日共を批判しきることではできないのではと思うからです。講座派の良質の部分にせよ、全般的危機論には変りはないのです。

②、思想問題、「資本主義批判」を総括の一つの核心とすることに異議はないのですが、思想問題——資本主義批判、綱領、戦略問題——現代帝国主義、現代修正主義批判とする仕方に疑問をもっています。山での「粛清」が規律、作風という即時的思想問題を問うており、それに対して「共產主義化」という小ブル共産主義——小ブル革命主義の恣意的な基準によってしか応えられなかったこと、そこから革命運動——階級闘争にとつて最も根底的な思想問題が問われていると結論したことは正しいと思います。又「No.4」の限界が「資本論」の資本主義批判を根底に据えられていないことにあるというのも正しいでしょう。にも拘らず、思

想問題は現代帝国主義——現代修正主義批判から切り離してあるものではないのです。逆にそれをやらねば思想問題として深め総括できないのです。つまり指導部、指導理論が資本主義批判として「小ブル共産主義」を克服する確乎たる立場を獲得していなかっただけで、我々の革命運動が（自然発生的であればある程）その具体的階級攻防（闘争）の思想的、政治的反映であり、それは現代帝国主義、現代修正主義に経済的、物質的根拠をもっていることをすりかえてはならぬのです。これは唯物弁証法の立場、方法ではありません。この二つは統一して考察されるべきです。その意味で思想問題と綱領問題を分解することはできないのです。

（むしろ戦略問題が切り離されるべきです。）この分離は現在の具体的階級闘争と無関係に純粋科学的に「小ブル共産主義」の克服が追求される傾向を生んでいるし、より酷い場合は、小ブル主義一般の克服が追求されることになりません。これは例えば、人間の認識活動の契機として、ド・イデの三（四）契機（労働・欲望の産出・性活動）を思想問題として無媒介にとり出していることに表われているように思います。我々はやはり、生産活動・階級闘争・科学実験Vという毛沢東の認識論に立脚して階級闘争を軸にして思想問題を考えるべきです。ほくは思想問題を、資本主義批判を軸に徹底して科学的に探究せねばならないと思っ

化した日本の小ブル革命主義止揚に焦点を据えるべきです。そしてそれは日共の現代修正主義反動という経済主義・日和見主義の罪禍としてある限り、その批判を徹底しなければならず、又その経済的基盤としての日帝批判を深めねばならぬのであり、そしてそれらは、世界的な規模でなされ、現代過渡期世界批判とならねばならぬのです。「資本主義批判」そのものをとり出してわけのわからぬことを言い、マルクス・エンゲルス・レーニンの引用で脅しをかけるブンド諸派、否、革共同（とくにカクマル）の死を我々は宣告すべきです。

③、教条主義、清算主義論議、小ブル革命戦争主義・プロレタリア革命戦争主義論議について。

④、教条主義と清算主義を批判すればよいという段階はすぎたのではないかと思っています。それはすでに「連赤」をどう総括するかというより事態は進んでいると思うからでもあります。例えば、いわゆる清算主義的傾向は明確に非合法中央集権党を現実否定する潮流として、大衆運動——大衆の統一戦線から党建設という間の抜けた現代メンシェウイキの萌芽になっており、これは、今後も根強いものとなっていくだろうからです（これはその潮流がいかなる理論をもっているか、から判断すべきでなく、現実の實踐から判断すべきです）。これに対しては党組織次元において『一步前進・二歩後退』を軸に『なにをなすべきか？』『党の改組について』（これは閉鎖主義批判として重要）を理論的武器にすべきです。勿論小ブルインテリとプロレタリアートの相違——プロレタリアートの組織性——を資本主義的分析、批判として確

定することが必要です。ここでいわれる清算主義的総括の主要なものとして（実はいわゆる教条派や止揚派の人々のうちにもあるのですが）単純に「連赤は人民に依拠していなかった」とする非弁証法にふれねばなりません。「連赤」は「人民に依拠していなかった」のか？ 否です。「連赤」は人民に依拠しすぎていた。勿論即時的に。よく我々をロシアSRとアナロジーする同志がいるがSRは人民に依拠していなかったのか？ 否、彼らはあまりに依拠しすぎていた、即時的に。大衆の自然発生的に拜跪することは経済主義をさすだけではないのです。それは即時的に依拠することを言っているのです。「人民、ただの人民のみが世界の歴史を創造する原動力である」ということは歴史的唯物論のすばらしい核心の一つですが、このことをもって即「人民に依拠して

いなかった」「人民の中へ」とは決してならないのです。人民の創造力、生命力を凝縮し、指導するML主義前衛党が問われている時、ただやみくもに「人民の中へ」では「人民」はヘソを出して笑うでしょう。以上は概念上の形而上学に対する批判ですが、具体的にみた時我々「連赤」が人民に向自的に依拠せず、結合し指導しえていないことは事実です。にも拘らず、結合し指導し始めていたことも又事実です。（これがプロレタリア革命主義の芽という由縁です）このことは特に6・17以降の階級攻防の中で具体的に分析、総括する必要があります。6・17以降の自然発生的だが、体系的革命武装勢力の登場をより意識的に党組織を軸にした革命政治勢力へ飛躍、発展させ、武装勢力をその中核とすることだろうと思います。ここではこれ以上かけませんが具体性

の欠けた総括などおよそ無意味です。「あまのじゃく」としていうなら「連赤」を清算し、教条し、止揚する、これが我々の任務でしょう。

②、小ブル革命戦争主義からプロレタリア革命戦争主義へ、というスローガンは象徴としては間違っていないだろうが、実際はそう簡単にはいかないものです。「小ブルからプロレタリアへ依拠基盤をかえる」といったところで何も現実の意味もないからです。小ブル革命戦争主義の延長にプロレタリア革命戦争主義があるわけでもなく、又別の軌道に乗り移って革命戦争を唱えても始らいからです。小ブル革命戦争主義を今でも呼号しているのは「教条主義」といえるでしょうか。この止揚は小ブル革命戦争主義そのものを批判してもそれは乗り移りしていかないのです。ここでは小ブル革命戦争主義そのものを止揚するしかありません。内容あることをなにもいえずに申し訳ありませんが、これは現代修正主義批判と対をなすものとしてじっくりやっています。こうと思っています。(これは下獄後の課題です。勿論下獄中も階級闘争に對し超然としてゐる訳にはいかないのですが)

③ 行ってまいります。さようなら

④、僕は同盟(赤軍派)が再団結して同盟再建——ML主義党建設へむかうべきだと思います。しかし絶対忘れてはならないのはレーニン党組織論の核心——非合法中央集権党建設——をつかみ、その方向に現実に向わねばならないということです。僕は八木同志、上野同志は自らの思想的・綱領的・組織的立場を明文化(テレーゼ化)して同盟諸同志の信を問うべきだと思います。都委の組

織的責任者はこの間の分裂に對して、自己批判をすべきだと思います。僕はこの二つの基準抜きにして(官僚的に)同盟が総括されることは反対です。ただこれは要望であり、絶対的反対ではない、あとは塩見同志らに一任するしかありません。八木同志には非合法中央集権党建設か否か、そして「連赤」を発展的に止揚するか否か、上野同志には「即時廃貨」は小ブル社会主義か否か、日共に對する立場、(これはソ連に對する立場でもある。)そして「連赤」を発展的に止揚するか否かを明確にしてもらいたいと願います。

⑤、近藤同志はすばらしい政治感覚をより一層伸ばして自分を組織的に鍛えて下さい。青砥同志、彼らは歴史の中で必ずほぐえむでしょう。大西同志、忠告は心しておこうと思っています。「もっぶる支持」でなく「都委分裂主義批判」とすべきなのだと思います。

高田同志、血肉の欠陥云々はやはり悪無限的自己批判になります。いちいち名をあげられないけど、愛する同志たち戦場で会おう。会えなかったら地獄で会おう。どこまでもオレはしつこくついていくぞ。救援・支援戦線の同志たちありがとう。皆さん身体と精神の健康にはくれぐれも気をつけて、(ボク? ボクはほれ、○は風邪ひかぬの類ですよ)。行ってまいります。さようなら。再見!!

一九七三年一月二十九日記

1

ようやくにして松田久『銃よ、おまえは誰のために』全文を、お届けすることが出来る。しかしなお、またしても発行の遅れに対するお詫びから書きはじめなければならぬのが苦しい。——何よりも、著者、松田久氏に対して——著者、松田久氏は、△M作戦△被告として、1月末、8年の刑で下獄——われわれは、できる限り下獄の日以前にこの出版を果したかったと思う。(果し得なかつた理由がまたしても金！)

そしてまた、この△論文△の出版を心まちにしてくれた読者諸兄に対してもまた、心からなるお詫びを添えておく。——

2

この論文は、昨9月発行の本誌5号誌

上に於いて部分的に発表されたものの全文である。当初、この論文は控訴審にむけた意見陳述の草稿として書きはじめられ、他に△補△として「弁証法について」の一章を加えたものとして成立している。種々の事情から△増刊号△として発行するに至ったが、このような形で発行するにあたって、新たに著者による△序文△を付した。

これらの論文は、1972年、春から初夏にかけて東京拘留所に於いて執筆された。いわば、彼のあくまでも△連合赤軍△の立場からなる、△連合赤軍△総括への試み——試論であるといえるだろう。同じ頃、彼は次のように書いている。

「『殺した』同志たちも『殺された』同志たちも、僕にとっては全くかけがえない兄弟であり、同志なのです。たとえ

どんなに誤りを犯したとしても。ところが僕たちの隊列のなかからさえ、『殺した』同志たちを『反革命』だの『裏切者』だの『気狂い』だのと罵倒する人がいるのです。そしてわれわれの闘いのすべてを否定しようとしているのです。そのような情況に僕は独房の中で、とてつもない『怒り』と『悲しみ』と『悲壮さ』をかかえていました。僕は今それを総括文書につづけています。自らの愚かさを自覚しつつ必死の思いで夜明けとともに起きて、書き続けています。僕のそばにはいつも『連合赤軍』のかけがえない同志たちがいるのです。」

「もし、同志重信に伝えられるならば伝えて下さい。僕の最も敬愛している同志森のオヤジさんをはじめ『連合赤軍』同志たちの革命の『生と死』を、なにがなん

でもうけつぐ決意であると。僕たちは赤軍派と『連合赤軍』の歴史につばをかけた、ケツをまくったりはけっしてしないから安心しろ、と。オレたちはいつも本気だったし、今も本気だ、と。……

僕の総括文書はいずれパンフにしてもらうつもりです。機会がありましたら是非よんで下さい。……」(1972.6.12付書簡・『新左翼』紙 1972.7.5号)

右に引用しておいたのは、新聞『新左翼』紙(7月5日号)に「獄中通信——腹立たしい清算主義」と題されて掲載された彼の文章だが、ここにはこの場で、われわれがコメントできる以上のものが雄弁に語られていると思われるので、あえて引用させて頂いておく。

そしてこの、松田久自身によれば「誤解を恐れずあえて」まとめられた総括の覚え書きは少なからぬ反響を呼んだようだ。(ちなみに、その後、8月15日付『新左翼』紙には「獄中の松田久君へ」と題された大阪の読者からの投稿が掲載されている。——)

われわれは、ようやくにしてその「総括文書」の刊行にまでこぎつけたが、果してこの△臨時増刊号△は、それらの

△読者△をはじめとする多くの読者の手もとに届いてくれるかどうか。——最近の松田久の他の論文、先に引用した『新左翼』紙、「獄中通信——腹立たしい清算主義」(1972.7.5号)、「獄中より——テルアビブでのテロにつづいて」(テルアビブ闘争支援委員会通信、2号)、「朝鮮の国際路線と我々」(人民救済会・獄中書簡集『赤い河』1号、1973.1)等々と、併せ読んで頂ければ幸いである。

3

さて、発行の△遅れ△に対するお詫びから書きはじめられたこの後記を、またしても△遅れ△ということをしめくくらないければならぬことを恐縮するが、雑誌『査証』の7号が、またまた発行の遅れをみせている。7号誌上に原稿を頂いている多くの筆者、及び読者に再度の△お詫び△を書き添えておく。遅くとも

8月には、読者の手にとって頂ける予定である。(乞う、資金カンパ！)

査証 臨時増刊

---

銃よ、おまえは誰のために

著者=松田 久

発行日=1973年 8月30日

発行=査証編集委員会

定価= 350円

---

# 遺稿 森恒夫

査証編集委員会 編集 日本赤色救援会 協力 ●定価 430円

いま、こうして読者の前に提出されているこの一冊の黒い書物は単に死んだ森恒夫の『遺稿集』というよりは、兵士森恒夫の手になった〈連合赤軍〉の戦いのひとつの『総括論集』なのである。

## 英雄兵士の物語

●上野勝輝 / 定価 650円

——国家論の発展のために——

この文章は世界革命戦争を生き抜く無名の兵士たちのために書くものである。これは単なる物語ではなく、マルクス、レーニン主義の国家論を過渡期世界において発展させるための創造的意欲に燃えた歴史の概説である。

〔続刊〕

査証

第7号 予価 450円

塩見孝也 / 榎原均 / 奥平剛士(遺稿) / 若宮正則 / 蔵田計成 / ガッサン・カナファニー / ほか

奥平剛士 〓 安田安之遺稿集 (仮題)

査証出版